
絶対すくみず黙示録

雛祭パペ彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絶対すくみず黙示録

【Nコード】

N8786B

【作者名】

雛祭パペ彦

【あらすじ】

移動しました。<http://p.booklog.jp/book/22517> 魔法使いに透明人間、改造人間の姉妹に巨大口ボット操縦少年たちが集う「私立カドミウム学園」に、スクール水着姿の幼女がやってきた。その名は、ぱもみタン。7才の超絶幼女が繰り広げる、学園コメディー長編連載です。

1：ぱもみ登場

「着いたよ。お嬢ちゃん」

運転席にいる乗務員に声をかけられ、わたしは我にかえた。

「はいはい なんえんですか？」

ふわふわとしている頭の中を整理しながら、わたしは訊いた。

「五千五百円、頂戴いたします」

すこし高額なこともあって、タクシー乗務員は恭しく告げる。

「カードで おねがいします」

そう言っ、わたしが首から下げていたガマ口からクレジットカードを取り出すと、乗務員は、ほっとしたような不審がるような、煮え切らない表情を浮かべて見せた。

「もちろん いったつばらいで」

そのつもりはなくても、つい誇らしげな口調になってしまった。クレジットカードは、常に一括払いを指定してこそ、一人前なのだ。

「あ、ええと……お預かりします」

決して少なくない売り上げを得られたというのに、やはり運転手は嬉しいのか悲しいのかわからないような微苦笑を浮かべつつ、清算作業をおこなっていた。

「どうも ありがとう」

うわべだけの礼を言っ、わたしはタクシーから降りた。

身長が二三〇センチのわたしは、当然のように足も短いので、気をつけないと地面を踏み外してケガをしてしまう。

「ばいばい またね」

おそらく、あのタクシー運転手は、わたしの後ろ姿を訝しげな顔で眺めている違いなかった。

なにせ、わたしの格好……裸足にスクール水着という姿は、誰もが目を疑わずにはいられないものだ。

「きょうも いいてんき」

エアコンの効いていた車内とはうってかわり、外はとても暑い。朝の九時前だというのに、燃え尽きるかと思うほどの勢いで、太陽は強い日差しを放っている。

七月の中旬を過ぎてから今日までのあいだ、ずっと暑い日が続いていた。

「うーん にやはーん」

わたしは背伸びをする。

天に向かって両腕を伸ばし、なるべく愛らしい声を漏らしながら背伸びをするためには、少しコツがいる。

今の背伸びは、八十点くらいだろうか。

「やっぱ すくみずがいちばんだよね」

わたしが着ているスクール水着は、伸縮性にすぐれた特殊ナイロン繊維を用いたもので、布地のつっぱりを感じることもなく気持ちよく背伸びをすることができた。

スクール水着のカラーは、紺色。

そんな慎みぶかい色のスクール水着は、白いラインで縁取られている。

おへそよりも下のあたりがとても短いスカートのような形状のをしている、伝統的な学校競泳用女子水着だった。

「ぱもみタン、おはよー」

背中から声をかけられたので振り返ると、夏服を着た男子生徒が、わたしを追い越していった。

「やまだくん おはよー」

しかし見覚えのない生徒であり、うちの学園の制服には名札がついていないので、わたしは適当に挨拶を返した。

あの生徒が「やまだ何某」であるかどうかは知らない。

おそらく違っただろうが、それにしても慣れ慣れしい奴だった。殺してやろうか、などという考えが、わたしの脳裏をよぎる。

今のわたしが、手投げ式トマホークを所持していなかったことを、

せいぜい感謝するがいい。

「あぶないもうそう たのしいね」

いま、わたしが立っている場所は校門前で、周囲には、カバンを携えた多くの学生たちの登校風景が見られた。

門柱に据え付けられたブロンズのプレートには、

『防衛省文部科学省合同特務機関付属カドミウム学園』

という文字が象られている。

「校長先生、おはようございまーす」

仲良しとおぼしき三人組の女子生徒が、わたしに戯れてくる。

「おはよー ぱもみだよ」

朝の挨拶は「おはよう」。

夜の挨拶は「こんばんわ」。

懲役明けの挨拶は「おつとめごくろうさまです、組長」

挨拶は、人間関係の基本だ。

さきほどの男子生徒・山田（仮称）とは違って、すれ違うほとんどの生徒は、わたしに対する礼節をわきまえていた。

2：夏の朝、セミの鳴き声（前書き）

私立カドミウム学園にやってきた、スクール水着姿の幼女「ぱもみタン」は、校門をくぐり、学園の校舎へと向かって歩いていたのだが……

2：夏の朝、セミの鳴き声

「おはよー ぱもみたんってよんでね」

「ええ？ でも、校長先生にむかって、そんな気安い呼び方は……」
たとえ愛称で呼ばれようと、職位の高い者に対する尊敬の念が伝わってくるならば、わたしが不快感をいだくことはない。

「いいよ ぱもみたんってよんでみ」

わたしが笑顔で促してみせると、照れくさそうに、

「えつと……ぱもみ…タン」

ツインテールの女子生徒は顔を赤らめ、恥ずかしそうに口を開いてみせた。

半袖の白いブラウスによく映えるワインレッドのリボンをいじらしく揺らす姿が、とても愛らしい。

義妹にしたいくらいに、ツインテールの女子生徒は愛らしかった。

「はい よくできました」

照れ笑いを浮かべる女子生徒を見ているうちに、わたしは、彼女のことをからかいたくなった。

「ごほうびに なでなでしてあげる」

そう言って、わたしは、女子生徒の制服スカートの上から、おしりを撫でまわした。

「やわらかー ぷにぷにー」

「いやー！ もー！ ぱもみタンのえつち！」

わたしの義妹候補は、戸惑いながらも、楽しそうにはしゃいで見せる。

「ごほーび ごほーび」

頭を撫でようにも手が届かなかったため、手の届く範囲にあったおしりを撫でまわしたにすぎない。

女子生徒の身長に比べて、わたしは一三〇センチ程度しかないのだから仕方がなかった。

これは、断じてセクハラではない。

裁判を起こされても、わたしには負けない自信があった。

「ばいばい またね」

それから、お互いに笑いあつて別れの挨拶をしたあと、仲良し三人組は、わたしを残して先を急いでいった。

あと十五分もすれば、朝のホームルームが始まる時間なのだ。

「……」

さつ、と風が吹き抜けて、真夏の熱く淀んだ空気を一瞬だけかきまわす。

「おはようございまーす」

「はい おはよ」

登校してくる遅刻寸前の生徒たちが、わたしに挨拶を投げかけては、わたしを追い越していった。

そのなかには、わたしのスクール水着姿を、遠慮がちではあるものの、チラチラと盗み見ていく男子生徒の姿もあった。

「としごろだから しかたないよね」

自分で言うのもアレだが、減るものではない。

見たい者は、気の済むまで見ればいい。

帰ってから晩ごはんのオカズにするのも、これまた自由だ。

「ひとりぼっちの うんどうかい」

校門を過ぎてしばらく歩けば、生徒用の正面玄関が見えてくる。

いつも、わたしは生徒玄関から校舎へ入ることにしていた。

教職員用の玄関は別の場所にあるが、あそこは薄暗くて湿っぽいので、好きではない。

「……」

彼方で、唐突にセミが鳴きはじめた。

つられるようにして、他のセミたちが輪唱をはじめた。

わたしは、その場に立ち止まり、目を閉じて耳を澄ませる。

苛烈で穏やかな夏の一日が、きょうも幕をあけるようだ。

「あ、あひゃあー」

そのとき、いきなり素っ頓狂な声が、わたしの耳に飛びこんできた。

気持ちよく感傷にひたっていたというのに、わたしの気分は台無しだった。

センチメンタル損害賠償を請求したいくらいだ。

「いちおくえん ほしいな」

情けない声の主を探すため、わたしは周りの様子をうかがう。

十名ほどいた登校中の生徒たちは、わたしと同じように、まぬけな声の張本人を探している様子だった。

「いやだ！ いやだあああ！ やだやだやだ！ いやだあああああ！」

その声は、若い男を思わせる差し迫った叫びだった。

いまだ姿が見当たらないが、おそらくは、学園の生徒だろうか。

悲痛ともいえるその声は、校舎の建物に反響し、すこし遠くの方から発せられている印象を受ける。

「やめろおおおお！ やめてくれ！ やめろやめろやめろおおおおおお！」

錯乱、と言つていいほどに取り乱した様子の叫び声が、空から降りかかるように聞こえてきた。

「うえのほうから きこえてくるよ」

わたしは迷わずに、叫び声が聞こえてきた方角……校舎の屋上へと視線を向けた。

「たのむから、あ、おねがいします！ ごめんなさいですからあああああああ！」

学園の屋上は、網目のフェンスで取り囲まれている。

そのフェンス越しに、二人の男子学生の姿を認めることができた。二人とも、夏服の半袖ワイシャツに黒い長ズボンを履いている。

この学園の制服だった。

3：異変、ふたりの少年（前書き）

見た目は幼女なのにカドミウム学園の校長である「ぱもみタン」は、出勤して早々、どうやらトラブルに巻き込まれそうな予感。第3回。

3：異変、ふたりの少年

「あさから さわがしいひとたち」

屋上という場所は、普段は施錠してあるのが当然で、いち生徒風情がカンタンに立ち入れる場所ではないはずだ。

なぜ、屋上は立入禁止なのか。

それは、生徒たちがお気軽にUFOと交信したりするのを、未然に防ぐためだ。

「じょうだんは さておき」

それにしても、あの二人の男子生徒は、こんな朝っぱらから屋上に忍び込んで、一体どういうつもりだろうか。

しかも、あるうことか、プロレスまがいの事をして遊んでいる様子だった。

「うわああああああ！」

我を忘れて泣き叫んでいる男子生徒は、もう一方の男子生徒にその体躯ごと担ぎ上げられていた。

まるで、大怪獣が高層ビルディングを両腕で持ち上げるかのような、特撮フィルムじみた光景だった。

「がんばれ がんばれ」

この珍事に、わたしは手を叩いて応援したくなったが不謹慎なのでそれを控え、事態を注視することにした。

次第に、登校中の生徒たちも異変に気がつきはじめたようで、その場で足を止め、息をのんで屋上の様子を見上げていた。

「あああああああ！」

怪獣役の生徒がノシノシとフェンスへ近づいていくことに、高層ビル役の無様な生徒が泣き叫ぶ。

その様子を、二十メートル下にいるわたしを含めた見物人たちが眺めている。

「うぎゃあああああ！」

痛々しい叫び声と同じくして、屋上の周りに張り巡らされた網目のフェンスが、激しく音をたてて揺れた。

怪獣役の生徒が、高層ビル役の生徒をフェンスに叩きつけたのだった。

フェンスを背中にして、哀れな男子生徒は尻餅をついている。

「あのこ わらってる」

泣き叫んでいる生徒が、ではない。

それでは、まるでマゾヒストだ。

「ぶきみな えがお」

笑みを浮かべているのは、怪獣役の生徒の方だった。

口元を歪め、ニタリと微笑んでいた。

「うおわあああああ！」

泣き叫んで嫌がっている男子生徒が、ふたたび空高く持ち上げられる。

その様子は、発泡スチロールの人形を持ち上げるかのように、軽々とした動作だった。

怪獣役の男子生徒は、最低でも体重五十キログラムはある人間ひとりを担ぎ上げて、なお余裕で楽しむかのような笑顔を浮かべていた。

「ばけものが わらってる」

あれは、人間の形をしたバケモノだ。

無邪気な笑顔で行われている残酷な光景に、皮肉のひとつも言いたくなる。

「ねえみんな ちこくしちゃうよ」

我を忘れて屋上を見上げている数人の生徒たちに、わたしはさりげなく退去を促す。

あと数分で、朝のホームルームが始まる時間だ。

「ゆうひにむかって はしるんだ」

足早に去っていった生徒たちを目の端で見送ったあと、わたしは、ふたたび屋上へと視線を戻す。

その、たった数秒のあいだ目を離していた隙に、事態は大きく変わっていた。

「……」

いつのまにか、高層ビル役の男子生徒が、フェンスの外へと投げ出されていたのだ。

人の形をしたモノが、宙を舞っている。

彼が投げ出された屋上フェンスの外側には、何もない。

何もないからこそ、フェンスで囲ってあったのだ。

屋上フェンスの向こう側、その垂直下方向二十メートルにわたって、何もない。

そんな何もないフェンスの向こう側へと投げ出された物体は、はたしてどうなるのか。

落下する。

母なる地球の引力は、万人に対して公平に作用する。

ひとりの人間が、つかみどころのない空気をバタバタと掻きまわしながら、墜落していった。

「あああああああ……っ」

4：血とトマトジュースは色が似ている（前書き）

すくみず校長のぱもみタンは、学園の屋上から墜落する男子生徒の姿を目撃してしまう。はたして、彼はこのまま死んでしまうのか。それとも……。

4：血とトマトジュースは色が似ている

まもなくして、高層ビル役の男子生徒は、頭部から地面に激突した。

ゴッソ！という、ひと抱えほどもある漬物石でも落としたかのような鈍い音がした。

人間の頭蓋骨というのは、そうとう硬いものらしい。

「あーあ いたそーだなー」

だが、いくら頭蓋骨が硬いと言っても、二十メートルの高さから落ちれば、ただでは済まない。

「こわいもの みたくないけど」

わたしは、ゆつくりと歩みながら、校門から学園正面玄関へと続く舗道の上に横たわる、男子生徒へと近づいていく。

一歩、また一歩と足を進めることに、男子生徒の頭部からドクドクとあふれでる赤い液体が、地面に広がっていくのが見える。

「とまとじゅーす なんちゃって」

流血にくわえて、男子生徒の四肢が、おどけたように好き勝手な方向へと折れ曲がっていた。

これが世に言う、複雑骨折だ。

「いたいだろうけど おとこはがまんだよ」

わたしは男子生徒のそばでしゃがみこみ、首筋の肌、そっと人差し指と薬指を添える。

落ちたばかりなので、まだ温もりがあった。

しかし、本来あるはずの脈動はとても弱く、次第に脈打つことをやめていった。

「あつ しんじやった」

まだ朝の十時前だというのに、この男子生徒は死んでしまった。今日、ベッドで目覚めてから、数時間後というあっけなさだ。

本人は、なにか損をした気分ではいっぱいだろう。

「でも だいじょうぶ」

何が大丈夫なのか。

それは、今にわかる。

とりあえず君は、安心して死んでいればいいのだ。

「ねー しんじやったよ」

わたしは、屋上を見あげて、こちらを見下ろしている男子生徒に声をかけた。

いうまでもなく、さっきまで怪獣役をやっていた奴で、殺人の現行犯だ。

「……………」

その人殺しの男子生徒は、何も言わないまま、いつのまにか屋上フェンスの上に登って、わたしのことを見下ろしていた。何をかつこつけているのか。

サーカス団員を気取っているのだろうか。

その人殺しは、相変わらず、口元を歪めて憎たらしい笑みを浮かべていた。

「……………」

不敵な笑みとは、まさにああいう表情をさして言うのだろう。

「あぶないよー おちるよー」

本当は「そのまま足を滑らして落ちて死んでしまえ」と思っていたわたしだが、いまは上辺だけの心配をしてみせる。

「……………」

唐突に、ごおっと、夏特有の激しい南風が吹き抜けた。

わたしのショートヘアーの先端が、幾つか口の中へと紛れこんでくる。

「あーっ あぶない」

その突風に揺られて、人殺しの男子生徒は、フェンスの上で大きくバランスを崩してしまった。

人殺しは、両手を振り回して全身のバランスを取ろうとするものの、取り返しのつかないほど足元をふらつかせ、もはや墜落するこ

とは決定的だった。

「ぐっじょぶ　ないすつつぶう」

しかし、人殺しの男子生徒は、高所から墜落するというにもかかわらず、まったく慌てた挙動を見せなかった。

むしろ、両腕を大きく広げ、つま先で足元のフェンスをトンツと蹴り上げて、みずから空中へとむかつて跳躍してみせたのだ。

「もしかして　とりにんげんこんですと？」

両腕を羽のように広げて、屋上から飛びたった人殺しの男子生徒は、飛翔距離ゼロメートルを記録して、そのまま、直下にいるわたしに向かって墜落してきた。

「なんだ　とべないじゃん」

では、一体なんのために屋上から飛び降りるなどという暴挙にでたのだろうか。

自殺か。

いや、そんなはずはない。

もしも、現在墜落中の彼が、わたしの知っているあの人物だとするならば、自殺することなど絶対に有り得ない。

そう……わたしは、あの人殺しの男子生徒のことを、前もって知っているのだ。

5：魔法使いは納豆風味（前書き）

男子生徒を屋上から放り投げた男は、そのあとを追うようにして、
自分も飛び降りる。ぱもみタンは、すこし混乱する。第5回。

5：魔法使いは納豆風味

「あれ？」

鳥人間コンテストから、すでに五秒以上が経過している。

つまり、屋上フェンスの上でバランスを崩した人殺しが、とつくに地面に激突しているはずだが、そうはなっていなかった。

「ばもみ　ちよっとおどろいた」

人殺しの男子生徒は、まだ生きていた。

まだ生きていて、いつの間にか、屋上を見あげていたわたしの眼前にいた。

「おはよー　はじめまして」

人殺しは、空中で静止していた。

墜落していたはずの彼は、地面に向かって逆立ちする形で空中に留まっていた。

そして、屋上を見あげていたわたしの鼻先に、逆立ち状態で空中に静止している人殺しの顔があった。

互いの鼻先が、触れそうで触れない距離。

あいかわらず不敵な笑みを浮かべている人殺しの口元からは、納豆の匂いがした。

「くちくさいね　はみがきした？」

めいっばい無邪気な笑みを浮かべて、わたしは言ってみせた。

ちなみに、わたしの吐息は、いちこの香りがする。

「……………っ！」

人殺しの男子生徒の口元が、わずかに引きつったようになった。

こういう鬼気迫る状況においては、下手に強がったことを言うよりも、こういう原始的な悪口のほうが効果的なのだ。

「ねぎが　まえばにはさまってるよ」

追い討ちをかけるように、わたしは、卑怯なくらい表層的な悪口をあびせる。

「あつ……うつ」

面白いことに、人殺しはわずかに顔面を赤く染めたかと思うと、空中静止を止めて、ゆっくり翻るようにして、二本の足を地面に着地させた。

そして、わたしから目を逸らしながら、頬をモゴモゴとさせはじめた。

よつぽど「くちくさい」が気に障ったのだろうか。

「はじめまして はしもとくん」

わたしは、目の前にいる人殺しを、本名で呼んでみせる。

「だれが橋本だ！ 俺のことを、その名前で呼ぶな！」

口元を右手の甲でぬぐいつつ、人殺しの男子生徒は、はじめてまともに言葉を発してみせた。

その口調には、さきほどの殺人行為による罪悪感など、微塵も感じられない。

「さつきより どばどばだ」

というか、その殺人行為の結果が、今もわたしのそばで横たわっていて、頭から血液やら脳漿やらを垂れ流していて、かつ腐敗が進行中である事を忘れてもらっては困る。

「はしもとくんがだめなら なんてよべばいいの？」

そう問いかければ彼が何と答えるか、わたしにはわかりきっていたが、あえて尋ねた。

「お、俺の名前は、真魔ラファエ郎だ！ 必ず様をつけて呼べ！」

「へんななまえ ふんぱんものだね」

すかさず、わたしは口撃を加える。

まさに、新潟県魚沼産コシヒカリ。パーセントの噴飯ものだ。センスが無いのにも程度というものがある。

そもそも、ラファエ郎を自称するこの男子生徒の本名は「橋本ひろし」だった。

わたしの記憶では、一五歳という年齢とともに、事前資料にはそう記載されていたはずだ。

「あはは ふんぱんものだね」

「ぶ、侮辱するなら、貴様も殺すぞ！」

「ころすって どうやって？」

「さっき俺がぶっ殺した……そこで転がってる奴みたいにな、地面に叩きつけてグチャグチャにしてやるよ！ それとも生きたまま、頭や腕や足を引きちぎって八つ裂きにしてやるのか？」

「ぎやははははっ、と下卑た笑い声をあげて、ラファエ郎は、わたしのことを冷たい目で見下ろした。

ただし、見下ろすといっても、ラファエ郎こと橋本ひろしの身長は一五〇センチにも届かないくらい低かった。

わたしが一三〇センチだから、さほど身長差があるわけでもなく、ラファエ郎は、いわゆるチビ助だった。

「ころされるまえに けーさつよばなきや」

勝ち誇った表情を浮かべているラファエ郎を無視して、わたしは首から下げていた携帯電話のダイヤルを操作しはじめる。

「えっと いちいちぜろ」

「おい、やめろ！……くそっ……ナール・デ・ラドエピ・スルクオ・リーベ・スソラプソーリユーク・ランブア・エルフェンバイン……」
なにやら焦りを隠せない様子で、ラファエ郎は、異国語めいた呪文のようなものを口走りはじめていた。

「……ルロコリト・ヴィオラ・レオン・デステインネス・ネニファール・ヒュアキントウス・パンセス・ヴィーナデルタ！」

ラファエ郎が、最後の呪文を唱え終えた瞬間、地面から噴き出すように光が溢れだし、わたしのすぐそばで、小規模竜巻のような豪風が起った。

「わはははは！ これで警察に電話しても無駄になった」

ずいぶんと得意げな態度で、ラファエ郎が、わたしのことを指差して言ってみせた。

「……」

わたしは、携帯電話の発信をキャンセルする。

はじめから、本気で――。番通報するつもりなど無かったのだ。

「うわあああああああつ！」

いきなり、すぐそばで大きな絶叫が轟く。

わたしが叫んだものではないし、目の前のラファエ郎のものでもない。

心の準備はしていたものの、ちょっとびっくりしてしまい、あやうく「ばもみの飲めない水」をちびりそうになった。

「おはよー よくねむれた？」

なるべく優しく朗らかな口調で、わたしは、地べたに横臥している男子学生に声をかけた。

さっきまで、死んでいた奴だ。

「あ、あ……」

夏服の半袖ワイシャツと黒ズボンを身に着けている男子生徒は、必死の形相をうかべて、みずからの身体のおちこちを押さえたりさすったりしている。

「だいじょうぶ どこもけがしてないよ」

そうは言い聞かせたものの、この男子生徒にしてみれば、無傷であることが信じられないのも当然のことだった。

無理もない。

さきほどまで周囲に飛び散っていた血や脳漿は跡形もなくなっていた。

これは例えるなら、酒を飲みすぎて失神する直前にニヤンニヤンを吐いた記憶があるのに、目覚めたら、そのニヤンニヤンがキレイサッパリ跡形もなくなっていた時の、気持ち悪さと後味の悪い不安に似ている。

もしかして、寝ぼけているあいだに、あろうことが酔っ払ったニヤンニヤンを残らず食べてしまったのではないか、そんな恐ろしい不安に似ているのかもしれない。

彼は、ついさきほどまで、死んでいたのだ。
なぜ、自分が無傷でいるのか、不思議でたまらないはずだ。

6：ぱもみの正体（前書き）

転落死したはずの男子生徒を、真魔ラファエロこと橋本ひろしは、
いとも簡単に蘇生させる。殺人罪の成立しない殺人。第6回。

6：ばもみの正体

「おちついて だいじょうぶだよ」

わたしは、やさしく微笑みながら、蘇生したばかりの男子生徒に近づいていく。

「あ、あう、ああ……」

言葉にならぬ呻き声を漏らしながら、わたしの姿が、男子生徒の瞳に映っていた。

わたしの容貌……せいぜいが小学校低学年にしか見えないわたしのスクール水着姿を認めた男子生徒は、まるで母親にすぎるかのような表情を浮かべてみせた。

「あ、あ、うわあああああつ！」

しかし突然に、怯え、恐怖、悲しみ、呆然、卑屈など、その表情をせわしなく変えながら、ふたたび、男子生徒は、我を失ったように叫ぶ。

わたしの後ろにいた、ラファエルの姿を認めてしまったせいだ。

「ふん、怯弱なやつだ。クズめ」

ラファエルが、そう吐き捨てた。

ひたすら泣き叫ぶ男子生徒を、干からびた犬のフンでも見るような目つきで侮蔑していた。

「ひとごろしに いわれたくないけどね」

くすくす、と思いきり嘲笑しながら、わたしは呟いた。

「人殺し？ いったい何のことだ？」

ラファエルは、平然としていた。

慌てて蘇生呪文を唱えはじめていたオツチヨコチヨイが、よくもまあ言えたものだ。

「おくじょうから なげおとしたでしょ？」

身体を震わせ怯えきっている男子生徒を指差して、私は言った。

「たしかに突き落としたが、現にそいつは生きているし、怪我もし

ていない。だから、俺がその虫けらを殺したという事実は存在しない。ちがうか？」

ラファエ郎が、すまし顔で、言い聞かせるようにして私を見つめた。

説得力はないが、論理的に誤りはないのが残念だった。

始業開始のチャイムが鳴りはじめる。

「あーあ　ちこくだね」

正面玄関前に、わたしたち三人を取り残したまま、アンニユイで間延びした鐘の音が、校舎中に鳴り響いていた。

「はしもとくん　きょうしついいかないの？」

ていうか地獄にでも行つてしまえ、と内心思いつつ、わたしは、橋本ひろしこと真魔ラファエ郎に話しかける。

「だからっ、俺のことを橋本と呼ぶな！　何度言ったら改めるんだ！　くそっ、もう一度だけ言うから、ちゃんと覚えるよな！　俺の

名前は、真魔ラファエ郎だ！　そして、かならず様をつけて呼べ！」

「そして　そのじつたいは？」

すかさず、私が合いの手をいれる。

「その実態は、橋本ひろs……って、貴様、ふざけるな！　くそっ、おふざけがすぎる！　もつとまじめに俺の話を……」

なかなか間抜けな男だと思った。

「……おまえ誰だ？　なんで幼女がここにいるんだ？　しかもスクール水着なんて着て、幼女のくせして露出狂なのか？」

顎をあげて、必要以上に人を見下すような目つきでもって、ラファエ郎が訊いてきた。

「じこしょうかいなら　きのうしたよ」

「俺は、おまえのことなんか知らない」

どうやら、この橋本ひろしは、昨日おこなわれた全校集会に出席しなかったらしい。

それならば、わたしが何者であるかを知らなくても不思議ではない。

わたしが赴任してきたのは、つい昨日の出来事だった。

「わたしは ばもみだよ」

こんな奴のために、わざわざ自己紹介するのも癪にさわるが、まあ仕方がない。

「ばもみ？ マンガみたいな名前だな」

「あんたより よっぱどまだよ」

ニツコリと微笑みながら、わたしは即座に言い返した。

そもそも「ラファエ郎」なんて、日本人が名乗っているいい名前ではない。

欧米か。

「へっ、挑発的な幼女だな。まあ、俺はオトナだから、大目に見てやるけどな……で、なんでうちの学園に、おまえみたいな幼女がいるんだ？ 迷子か？ ちょっとお兄さんに話してごらん、くっく……ぎやははははっ！」

どうやら、わたしは完全になめられているようだ。

「ばもみ じつはね」

わたしは、もったいぶって、わざと声をひそめる。

「実は、なんだ？」

ラファエ郎が、ヘラヘラと笑いながら、私の背丈にあわせてしゃがみこんで見せた。

すっかり、年上のお兄さんを気取っている。

「じつは こうちようせんせいなの」

「ああ？ なに言ってるんだ、おまえ」

人間というのは、どうして、他人の言葉を素直に信じようとしないのだろうか。

ラファエ郎は、相変わらず薄ら笑いを浮かべて、わたしのことを小馬鹿にした目つきで眺めている。

「だから ばもみはね」

「ああ、ぱもみがどうした？」

わたしは、ひと呼吸おいて一息で告げる。

「ぼうえいしょうからはけんされてきた こうちようせんせいなんだよ」

「……なに、防衛省」

わたしの口から「防衛省」という言葉が発せられた瞬間、ラファ

二郎は、わずかに顔を引きつらせて見せた。

「ぱもみはにとりくいひとだよ」

二等陸尉。

旧陸軍でいうなら、中尉にあたる。

外見は、スクール水着姿の幼女だが、こう見えても、わたしは防衛省所属の二等陸尉なのだ。

7：どうするラファエ郎（前書き）

スク水姿の幼女・ぱもみタンは、防衛省から派遣された校長先生だった。殺人犯、真魔ラファエ郎をこのまま逃がしてしまうのか… 第七回。

7：どうするラファエロ

防衛省内における二等陸尉とは、いわゆる幹部候補に相当する職位であり、わたしはキャリア組と呼ばれる立場にあった。

「二等陸尉……おまえが新しい校長というのも、本当なのか？」

「はじめから そういったでしょ」

ラファエロは素早く立ち上がり、わたしを警戒するようにして、間合いを計ってみせた。

「なんで貴様みたいな幼女が防衛省にいるんだ。っていうか、幼女がどうしてキャリア組に……」

「ようじょじゃなくって ばもみたんってよんでね」

ただし、こいつに愛称で呼ばれたとしても、返事せずに無視する方向で調整中だが。

「そうか！ そのアホで稚拙な喋り方も、すべてカムフラージュだったのか……ちくしょう、俺としたことが、スクール水着と幼女の外見にすっかり目が眩んで、隠された思惑を見抜けなかったとは！ 真魔ラファエロ、痛恨の極みでござる！」

「ひとりごとおおいね せいしんのびょうきなの？」

ツッコミを入れて欲しそうだったので、わたしは気を利かせた。

「ほんとに生意気な幼女だな」

「ようじょじゃなくって ばもみだよ」

一歩もひいてはならない。

「ふん。くだらん！」

ここは引き時だと感じたのか、ラファエロは溜めの動作なしに、いきなりその場で跳躍した。

「……………」

それから中空で、さきほどのような異国語めいた呪文を声高らかに唱えた。

「にげるな ひきよーもの」

次の瞬間、どこからともなく上昇気流が巻き起こり、一気にラファエルの身体を、十メートル以上の高さにある屋上へと運んだ。

「……なんとでも言えよ」

ふたたび、屋上フェンスの縁に佇んだ真魔ラファエロは、高所からわたしのことを睨みつけると、素早く視界から消えていった。

「とりあえず ほけんしつにいいこうね」

いまだ全身を震わせて怯えている男子生徒へ、わたしは慈しむように右手を差し出す。

「あ……は、はい、すみません」

いちど、二十メートルの高さから墜落死したとはいえ、ラファエロの呪文によって蘇った

男子生徒は、だいぶ衰弱している様子だったが、肉体的な損壊を危惧する必要はなかった。

「きもちのおちつく おくすりもらおうね」

しかし、一度でも死を経験した者が蘇生できたとしても、以前と同じ精神状態を取り戻すのは困難であるという症例報告が、わたしの脳裏をよぎった。

男子生徒は、小刻みに身体を震わせ、その顔を眺めれば、にわか雨に降られたかのような大量の汗をかいていた。

「う……えっと……あう」

いまわたしの目の前にいる男子生徒には、これまでの被害者に共通して見られた「中軽度失語症状」が、あらわれていた。

「だいじょうぶ いきかえったんだよ」

この生徒で、五人目。

他の四人も、やはりこの学園の生徒や教師たちで、現在は隔離病棟に入院しているのだ。

「おもっていたより たちがわるいなあ」

わたしは、本事業を可及的速やかに処理するために、このカドミウム学園に派遣されてきたのだった

8：壊された少年（前書き）

瞬間殺人犯の真魔ラファエロ。この恐るべき男子高校生をマークするために、ばもみタンは防衛省から派遣されてきたのだ。第8回。

8：壊された少年

二章

「どうなの　なおりそう？」

わたしは、目の前にいる白衣姿の女に訊ねる。

「うーん、わかりません。とりあえず目立った外傷は見当たらないので、そっち方面の心配はないと思いますけど……問題は、やはり精神的な外傷ではないでしょうか？」

さきほどまで泣き喚いていた男子生徒は、いまではベッドの上で静かな寝息をたてている。

落ち着かせるまでに、鎮静剤の注射を二本も費やした。

「けつきよく　まえのひとたちといっしょなことになるんだね」

白衣の女の身長は一八〇センチを超えているので、わたしは見上げて話しかけなければならない。

「心的外傷後ストレス障害、つまりPTSDうんぬんかどうかを、専門外の私が判断することはできません。というか脳神経外科が専門の私としては、あの、そのう、すぐに開頭手術をおこないまして、この患者の脳をすみずみまで調べたいわけでありまして、そのう……」

白衣の女が、長い黒髪をわずかに揺らし、わたしに向かって物欲しげな表情をしてみせた。

「だめ　ぜったいにだめだよ」

「おねがいします　しゅじゅつをきよかしてください」

おどけた表情を作り、白衣の女が、わたしのモノマネをしてみせる。

全然、似ていない。
不愉快ですらある。

「ばもみのまねしても だめなものはだめ」

「ああ……そうですか。考えてみれば、私、ずいぶん長いあいだ、あの美しい灰褐色の脳髓を目にしていけないのです。ああ……懐かしくてたまらない。目に青葉、山ほととぎす、ヒトの脳髓」

消えているような細い声でそう呟きながら、白衣の女……江腎原料子が、芝居がかった遠い目をしてみせる。

「かつてにしゅじゅつしたら さもんいいんかいだよ」

くれぐれも、厳しく釘をさしておかないと、この江腎原料子という二等陸曹は、本気で開頭手術をやりかねないのだ。

厄介なことに、ここカドミウム学園の保健室には、たいていの外科手術に耐えうる無菌ルームが併設されていて、やろうと思えばやれるから、すこしも油断できない。

横スライド式のドアを入り口にして、清潔なりノリウムの床が敷かれているこの保健室は、さほど広くなかった。

ベッドは四床あって、現在そのうちのひとつを覆うようにしてカーテンが閉じられていた。

具合の悪い生徒が、横になって身体を休めているのだろう。

「たいじゅうけい のっていい？」

保健医の江腎原料子が「開頭手術、開頭手術」とブツブツ呟きながら、懇願の目つきでわたしのことを見つめるので、その話題の矛盾を転じるきっかけが欲しかった。

「どうぞ。お好きなように」

私の思惑を感じ取ったのか、ぶすつとした無愛想な顔で、白衣姿の女陸曹はこたえる。

ちなみに、江腎原料子は感情に乏しいのか、普段から、無表情であることが多い。

そのくせ、わりと整った顔立ちをしていて、何より肩の下まで伸ばしている黒々とした長髪は、この学園の男子生徒たちをよく振り向かせるのほどに艶やかだった。

一八。センチ以上を誇るファッションモデル並の身長も、彼女の

人気に一役買っているにちがいない。

「えーと　さんじゅってんなきろぐらむ」

そう独りごちてみたものの、だからどうしたと自分でツッコミたくなった。

「そんなことよりも、ぱもみ二尉。もうそろそろ職員室に顔を出しに行かれたほうがよろしいのではないですか？　たしか、うちの教頭とはまだ……」

「きょうとう　そんなひといたね」

江賢原二曹に言われ、今日はじめて思い出した。

わたしが、この学園に着任したのは昨日の朝の出来事だ。

そのさい、間の悪いことに、教頭は出張中だった。

だから、着任したはいいものの、学園のトップとナンバー2が、いまだ面識のない状態だった。

これはあまり外聞のよい話ではない。

「めんどくさいけど　ちよつといってくるね」

「はい。この生徒のことは、わたしにお任せください。さきほど本省を通じて、最寄の自衛隊中央病院からへりを寄越してもらうように手配しましたので、じきに迎えが来るはずです」

すでに四回、同じ被害にあった教師や生徒たちを送り出している江賢原にしてみれば、輸送ヘリの手配など手慣れたものなのだろう。実に素早い対応だった。

江賢原二曹は、わたしが着任する数ヶ月前から、この学園の常勤保健医を務めているのだ。

「わかったよ　あとはたのむね」

紺色のスクール水着の肩ヒモの具合を直してから、わたしは保健室をあとにした。

9：世界が激変した日（前書き）

被害者の男子生徒の身柄を、脳手術が大好きな保健医、
に任せて、ぱもみタンは職員室へと向かう。第9回。

江^え腎^{じん}原^{はら}料^り子^{ょうこ}

9：世界が激変した日

ぺたっ、ぺたっ、という音をたてながら、わたしは、一階南館の廊下を歩いていった。

わたしのはだしの足裏が、コンクリートの床に吸い付くように着地しては離れるので、そういう音がするのだ。

「だれも いないよ」

ふたたび、スクール水着の肩ヒモの具合を直しながら、わたしは二階の職員室に向かって歩いていった。

「……」

廊下の窓が、ところどころ開いている。

侵入者を招きやすいこのような状態は、防犯の観点からは好ましくなかったが、日中の気温が三〇に迫る日が幾日も続いているので、それは仕方のないことかもしれない。

「みーん みんなみーん」

そのかわり、セミの音がうるさかった。

うるさいけれども、わたしは、なにげにセミの鳴きマネをしてしまった。

そんな恥かしいわたしの様子を、誰かに見られてはいはしまいかとつつさに周りを見まわしたが、さいわい人の気配はない。

いまごろは、教師も生徒も、みな教室や屋外で授業を行っているからだ。

「あーあ どうしょつかなー」

わたしが頭を悩ませているのは、真魔ラファエ郎のことだった。

本名、橋本ひろし。

十五才。カドミウム学園第一学年。

元・魔王討伐師団所属の一等陸佐。

真魔ラファエロこと橋本ひろしは、つい一年前までは、普通の中学二年生だった。

そして、この世界も、つい二年前までは、普通の世界だった。

「ふつうのせかい ひとのてきがひとだけのせかい」

それまでは、人類の敵となりうる存在といえば、同じ地球上に住む人類に限られていた。

人類が二千数百年のあいだ繰り返してきた陰惨で醜悪で愚かな歴史も、ここ数年間の出来事に比べれば、ぬるま湯に浸かっていたようなものだ。

「わるいことは どうじにおきる」

順を追って、説明していく。

まず、富士樹海の領域内にて発生した魔王と称する異形の存在が、休眠状態だった富士山の大噴火を誘発したのが、いまから二年前の出来事だった。

それとは別に、魔王出現と同日同時刻、軍事大国の最新鋭宇宙観測レーダー網をぐりぬけ、いきなり大気圏外から飛来した準光速ミサイルが、先進国だけを狙いを定めて打ち込まれたのも、同じ二年前の出来事だった。

さらに同日同時刻、世界同時多発的に仕掛けられた電波ジャック放送により『地底人類』の代表者の声による『地表人類』つまり我々人類に対する侵略を前提とした宣戦布告が行われたのも、やはり二年前の出来事だった。

彼らは、まるで申し合わせたかのように、まったく同じ日の、ほぼ同時刻に、我々人類に対して、自分たちの存在を声高らかにアピールしたのだった。

すべては、二年前の同じ日に始まった。

それは、今日のような暑い夏の日。

二年前のあの日、世界は激変したのだ。

「ぱもみは ぷーるにいつてたけどね」

そんな二年前の世界の激変がきっかけで、それまで平穏を保っていた橋本ひろしの生活も激変した。

それまで普通の中学二年生だった橋本ひろしが、魔王討伐のメンバーに選抜されたからだ。

「りある るーるぷれいんぐげーむ」

ちなみに、魔王が復活したのは日本国内のみの現象ではなく、世界八十五力国において、それぞれ異なる魔王が復活し、各国がそれぞれ対応策をとっていた。

日本国においては、富士山の大噴火に伴い、国内ほぼすべての火山や死火山が、ふたたび活動を開始する予兆を見せはじめた。大惨事に見舞われるのは、時間の問題だった。

富士樹海に巣食う魔王が放つ強大な魔力に対抗するためには、同じく強大な魔力が必要だった。

「まほうしょうじょ すくみずぱもみ」

魔力または魔法などというフィクション的な作用は、以前ならば現実世界には存在しない物理法則だった。

だが、魔王復活によって、これまでファンタジー小説やアニメの世界観においてのみ描かれていた「魔力」による様々な現象が、現実の世界でも見られるようになった。

「ぱもみぼったーと たんなるいし」

世界の物理法則に「魔法」が追加されてから一ヶ月が経ったのち、日本国政府が魔王討伐に向けたプロジェクトを立ち上げる。

「えつとえつとえつと なまえわすれたけどね」

まあプロジェクト名などはどうでもよいとして、おもに魔法による作用をコントロールできるのは、十八才未満の男子や女子に限られていた。

ただし統計に費やした期間がきわめて短く、必ずしも正確であるとはいえないが、魔法力を行使できる統計対象者が、十代の少年少女に集中しているのは、明らかだった。

統計では、特に一三才から一五才の少年少女を頂点にして、魔法力を行使できるものが多く、また魔力とよばれるものが強く検出されていた。

日本国政府は、国家権力をフル稼働させて、全国八〇〇万人の一〇才から一八才歳の少年少女たちの魔力適性検査を行い、より魔力の強い者だけを徹底的に選りすぐる作業を、数週間の急ピッチなペースでおこなった。

全国休火山死火山大噴火という国家存亡の危機が迫っていたため、有事法制内の条文に基づいた戒厳令が発せられ、まるで戦時下のような雰囲気だったことを、よく覚えている。

「ぱもみ いっぱいはたらいたよ」

そして適性検査の結果、四名の少年少女たちが、魔王討伐に耐える魔力の持ち主であることが判明した。

その四人のなかに、当時中学二年生だった橋本ひろしがいた。

彼は、のちに真魔ラファエロを自称することになる。

10：職員室の悪魔（前書き）

現在、人類は、魔王と宇宙人と地底人の三者と交戦状態にある。カドミウム学園とは、それら三者の敵から日本を守る人材を育成するための機関なのだ。第10回。

10：職員室の悪魔

「みんな おはよー」

二階の職員室のドアを開けると、数人の教師たちが事務机にむかって、それぞれの仕事をこなしていた。

「おはようございます。校長先生」

入口近くにいた若い男性教師が、笑顔で挨拶を返してくれた。

この教師は、わたしと同じ防衛省出向組なので、わたしにいろいろと気をつかってくれる。

「おはよー おしごとつづけてね」

他の教師たちにも愛想よく笑顔を振りまきつつ、わたしはさっさと懸案を済ませることにする。

「これはこれは新校長、おはようございます。ずいぶんとお待ちしておりますたよ」

職員室の北側突きあたりには、月間スケジュール用の大きな黒板があつたが、そこには教頭席もあつた。

「おはよー はじめまして」

席で待ち構えていた教頭に、私はめいっぱいのスマイルで挨拶をした。

もし彼が潜在的なロリコンならば、この時点ではぼ九割方、わたしにメモメロのはずだ。

「おはよー ……ではありません。大遅刻です。すでに二時間目の授業が始まっておりますよ」

残念ながら、この人物に幼女を愛でるという隠れた趣味はないらしい。

見れば、実に神経質そうな顔つきや服装をしていた。

「着任早々、そんなことでは、生徒や他の教師連中に示しがつきません。困ります」

五十二歳という年齢の割りには、黒々とした髪で、シワの見当た

らないスーツと、地味な紫色のネクタイ。

教頭は、文部科学省の課長だった経歴にふさわしい外貌をしていた。

世界が激変したあの日から数ヶ月後、この教頭が、カドミウム学園立ち上げメンバーとして、文科省から出向してきたのだ。

「ごめんね こんなぱもみをゆるして」

わたしは、ふたつの小さな手の平を、おへその前で組んでみせ、もじもじと甘えるような仕草をしてみせる。

「校長、だめですよ甘えて見せても。あなたは、ただでさえ我が学園の長としてふさわしくない容貌をして……いや失敬。とにかく、しっかりと校長の自覚を持っていただかないと、困ります。あなたは防衛畑の人間で、教育現場のことなど、なにもご存知ないのですからね」

まったくもって容赦のない嫌味を言ってくれる。前任者の苦労を想像するのは、そう難しくなかった。

わたしの前任者、つまりカドミウム学園の初代校長は、現在、体調不良で入院している。

本人は、体面のこともあり言い渋っているらしいが、原因は、この文科省出身のキャリア教頭との長きにわたる確執にあるということだった。

慢性の胃潰瘍だという噂だ。

「ぱもみのこと あんまりいじめないでね」

職位でいえば、校長であるわたしの方が上なのだが、このカドミウム学園の円滑な運営を担っているのは、この教頭の手腕によるものなのだから、ここは我慢のしどころだった。

「ガミガミ……ツベコベ……ガミガミ……」

そのことは防衛省側も評価していて、慢性胃潰瘍を患わされてしまった前任の校長のことを差し引いても、学園の運営を磐石なものとしておくためには、この嫌味な敏腕教頭に従う方が得策だといえた。

「校長であるあなたをイジメるなどと人聞きの悪いことを……私は、教師たちを統率し生徒たちを指導する立場の人間として、教育現場の右も左もトイレの場所もロクにわからないであろう新米校長であるあなたに、至極当たり前の要求をしているにすぎません」

背筋をピンつと伸ばし、淀みのないよく通る声で、教頭はわたしに説教じみたことを始める。

わたしは前任者とは違い、胃に穴が開くことなどは無いと思うが、このままグチグチやられ続けようものなら、どうなるかわからなかった。

「この荣誉あるカドミウム学園に赴任してきたということは、校長もわたしと同じ母校のご出身でしょう。ならば、職位はあなたの方が上だが、わたしは母校の先輩ということになる。そういうことであれば、かわいい後輩のために、立場とは関係なく、厳しく指導させていただきますから、覚悟してください」

頭の良すぎる人間というのは、どうしてこうも早口で身勝手なのだろうか。

確かに、こういう人間の言うことや行うことにはソツがなく正しい事が多いのだが、たとえそうだとしても「自分がいちばん正しい」と思っているところが、とても鼻についた。

「そっかー きょうとうはせんぱいなのかー」

わたしは、ここらでカウntpンチをかましてやろうと思った。「え？ まだ、私はあなたの経歴書を拝見しておりませんが、ここ荣誉あるカドミウム学園の長に任命されるくらいですから、それ相応の学府出身であるはずでしょう。違うのですか？」

そう早口でまくしたてた教頭の表情は、強い自信の念に満ちていた。

自分は、この国の最高学府の出身者であるという矜持心が強いのだろう。

「きょうとうは どこのだいがく？」

わたしは、不敵な笑みを浮かべたい気持ちを抑えつつ、無邪気に

尋ねる。

「わたしは、いまから三〇年以上前に東京大学法学部を首席で卒業しました。校長は、どちらの学部のご出身ですか？」

学校名を省いて、いきなり学部から尋ねるところがイヤらしい。

「ぱもみは すーぱーとうきょうだいがくをそつぎょうしたよ」

さらにと、何の屈託もなく、わたしは答えてみせた。

11：スーパー東京大学？（前書き）

カドミウム学園職員室。そこで待ち構えていたのは、イヤミな教頭だった。叱られるばもみタン。悔しいので、ちよつとした仕返しをすることに。第11回。

11：スーパー東京大学？

「は？ スーパー東京大学、ですか？……校長、私をからかっておられるのですか。なんです！ その子供銀行みたいな類のふざけた名前は。おふざけが過ぎますよ！」

教頭は、わたしのことを子供でも見るよう目で見下ろして、鼻で笑ってみせた。

かなり不愉快な態度だったが、現に、わたしは子供なので、腹をたてるほうが筋違いなのかもしれない。

「ふざけてないよ すーぱーとうきょうだいなく」

わたしは、べつに冗談を言ってみせたわけではなかった。

スーパー東京大学は実在するし、わたしは三年ほど前に卒業したばかりだった。

「な、なにをそんなふざけた名前の大学があるはずないでしょう。あるはずがない。なんですか、そのスーパー東京大学というのは……わが国の最高学府は、わたしが首席で卒業した東京大学であるところ――一〇〇年以上前から決まっているはずで……」

「え？ ひやくねんまえからあるよ すーぱーとうきょうだいなく」
そもそも、スーパー東京大学と東京大学は、帝国大学時代からその歴史を同じくし、創立年度も同じだったはずだ。

ただし、スーパーがつく方は、あまり公にはされていないというだけだった。

知る人ぞ知るといふやつだ。

「きょうとうは よばれなかっただけでしょ」

見つめなきや、現実を。

戦わなきや、現実と。

「あ、ああああえとまあ、そのう、仮にそのスーパー東京大学なるものが実在するとしましよう。そそそ、そのう、ではなぜ、わたしが、東京大学をブツぎりの首席で卒業したはずのわたしが、そ

のススススーパー東京大学に招かれなかったでしょうか？　で、で、で、でしょうか？」

ものすごい慌てふためきぶりで、目に見えるほどの大汗をかいて、教頭がわたしに訊ねてくる。

「ぱもみにきかれても　わかんない」

「あわわわ、そんなことおっしゃらずに、ちよつとしたヒントでも構いませんから……」

スーパー東京大学の、何をそんなに確認したいのか、わたしにはわからないが、この教頭が、よっぽど最高学府を卒業したという自らの学歴に執着があることだけはわかった。

「わかんないものは　わかんないよ」

「で、では、その、あのう、じゃあちよつと質問を変えますけど、そのう、今からでもスーパー東京大学とやらに入学するなんてことは、ええと、かか可能なのでしょいか？　こんなこと自分で言うのはなんですが、三〇年前の出来事とはいえ、東京大学をブッチギリの首席で卒業した私になら、そのスーパー東京大学への入学資格があると思うのですけど、どうなんです？　ねえ、どうなんです？」

我を忘れるほど必死なせいか、教頭は床に膝について、両手でわたしの肩に掴みかかってきた。

中年の掌に浮いている脂っぱい汗を二の腕に感じたわたしは、思わず鳥肌を立てて身震いをする。

「やめてよ　いたいよ」

「ねえ、どうなんですか！　教えてくださいよ、ねえ！」

ここで、わたしが一声「きゃーっ　へんたい」とても叫べば、一瞬にしてこの教頭を失脚させることができるだろう。

「あ……　ああ。私としたことが、つい取り乱してしまいました」

そう弁解しはじめた教頭は、ようやく自らが決定的な弱みを握られてしまったことに気がついたらしく、膝をついていた床から慌てて立ち上がった。

「いたいよう　うでがいたいよう」

取り乱すのも無理はない。

わたしが外国の著名な大学の出身者だったなら諦めもついたので、最高学府卒を自負していた人間にとって、まさか国内にそれ以上の高学歴あるとは、これまでの人生で考えたこともなかったのだろう。

「いまのこうい　せいてきぎゃくたい？」

ありえない誤解だが、わたしは、わざと大仰に言う。

「性的虐待！　ま、まさか！　と、とんでもありません！　あれは、その、とと咄嗟に取り乱した末の行動でして…あ、そうだ。そうです。こ、校長と私は本日はじめて顔を合わせたのだということを踏まえた単なるスキンシップだったのではないですか、さっきのアレは。ああ、そうだ。そうでした、ははははは、は、はは」

単なるスキンシップ。

セクハラ裁判において、被告人が用いる弁解ベスト3にランクインしていそうな言葉だ。

喋れば喋るほど、ドツボにはまっていく。

「おとーさん　おかーさん」

できるだけ切ない表情を作り、わたしは意味もなく叫んでみせる。職員室内にいる数人の教師たちの視線が集まっているのを、わたしは背中で感じていた。

楽しくて楽しくてたまらない。

「わー、わー。あ、ちよつとトイレ行つてきます。私ちよつとトイレに行つてきますから！　ドイツ語で言うところのトアレツテ、フランス語だったらトワレット……とにかく、私ちよつとバケラッタに行つてきます」

言い訳じみたことを、他の教師たちにわざとらしく喧伝しながら、教頭は早足で廊下へと飛び出していった。

「あはは　ゆにーくなひとだね」

わたしは、他の教師たちに振り返り、おどけた笑顔をつくりながら言った。

「……………」

すると、五人いた教師たちのうち、二人が声を出して笑った。
いずれも、わたしと同じ防衛省出向組の面々だ。

残りの苦笑いをしている教師たち三人は、文部科学省出向組だった。

いま職員室から逃げるように出ていった教頭は、文科省の出身者。
官僚というのは、こうもわかりやすい態度をとるものなのだろうか。

12：ばもみ、泣きそうになる（前書き）

性格の悪い教頭に、セクハラ教師の汚名をきせることに成功したばもみタン。この幼女には怖いものは無いのか？ 第12回。

12：ばもみ、泣きそうになる

「ごめんね おさがわせして」

ここカドミウム学園は、防衛省と文部科学省の共同管轄下にあった。

だから運営人員も、一部の者を除いて、ほぼ防衛省と文部科学省からの出向者で占められていた。

その割合は、ほぼ半々で、校長は防衛省、教頭は文部科学省の出向者が務めることになっている。

これについては、当初、文科省側の同意が得られなかったものの、この学園が純然たる教育機関ではなく、軍事的側面の強い機関であっただけに、結局、現在の人事システムへと落ちついたらしい。

「なわばりあらそい かっこわるい」

カドミウム学園設立の目的は、特殊防衛任務にあたる人材の育成だった。

この学園は「学園」と名がついているものの、教育基本法の条文が定めるいわゆる「学校」ではなかった。

二年前の世界激変を受けて、通常の防衛スキームでは新たな敵に対応しきれないと判断した日本国政府および防衛省は、早急に新たな防衛スキームを設備や人材の両面から再構築する必要に迫られた。「うちゅうじんとか ちていじんとか」

現在、日本国に対して宣戦布告を行っている敵対勢力は、三つ。

謎の地球外生命体。

地底人類連合。

富士樹海の魔王。

これらの敵は、それぞれが異なる物理体系をもち、世界激変以前の通常戦力よる反撃……主にミサイルや重火器などによる攻撃……

が、一切通用しなかった。

そこで、日本国政府は、それまで「異端」「擬似科学」「超科学」などと評され蔑ろにされていた過去の研究論文郡を収集し、またその研究者たちを半強制的に召集して、新たな防衛スキームを構築していった。

「えーと ちぼうがい？」

職員室には、二学年そろぞれのA2サイズ時間割ポスターが掲示されていた。

「えーと まぶんがい？」

一年生の時間割を見ると「地防概」「魔文概論」「数学」「宇戦概」「家庭」などという略称が、縦一列に並んでいる。

あまり一般的でないものを説明すれば、地坊概論は地球防衛戦略概論、魔文概論は魔法文明史概論、宇宙概は宇宙戦略概論の略称だ。一年生は、まず、これら膨大な量の概論を修めなければならない。

「なつかしー えすだいでならったよ」

えすだい…… S大とは、スーパー東京大学の略称で、わたしたち卒業生はそう呼称する。

世界激変からしばらくして、わたしは一度卒業したS大に再入学を命ぜられ、これらの新しい学問体系をさんざん履修させられた記憶があるけれど、とにかく膨大な体系のものであり、そのすべてを修了することは難しい。

なにせ、これらの学問体系自体、世界激変直後のたった数ヶ月ほどで慌てて収集された有象無象のトンデモ論文から組み上げられたものであり、いまだ整然としたものにはなっていなかった。

だがそれにもかかわらず、そのわずかな期間で、現在わが国に配備されている特殊な防衛スキームに必要な設備と人材を用意できたことは、人間に秘められた潜在能力を確認する良い機会となった。

「じゃあ ぱもみはいくねー」

教師連中に、ひらひらと愛らしい感じて手を振ってから、わたしは職員室を後にする。

「あ　　いうのわすれた」

廊下に出たあと、今朝の事件の顛末を、教頭に報告するのを忘れたことに気がついた。

「まあ　　いっか」

そもそも、ラファエ郎の件は、文部科学省の連中にはあまり関係のないことだった。

いずれにせよ、彼らは血生臭い案件の処理には消極的で、たとえば報告せずとも問題になることはない。

放っておいても、定期的な省間連絡が行われているからだ。

「おしごと　おしごと」

さっそく、わたしはこれから校長室へ行つて、今朝の事件の経緯などを、本省の上司へ報告しなければならなかった。

「おしごと　おしごと」

校長室は、今いた二階の職員室からそう遠く離れていない場所にあった。

出入口のドアには、不在時には力ギをかけてある。

室内には、わたしが持ち込んだいろいろと見られてはマズイ書類が保管されているからだった。

いっしておくが、マズイ書類といつても、たとえば裸の男同士がニヤンニヤンしている様子が描かれた手作りマンガ冊子とか、そういうものの事ではない。

校長室には、防衛機密書類の類が納められているのだ。

「うんとこ　どっこいしょ」

さっそく校長室の前まで辿りついたわたしは、ドア前に置いてあった高さ三〇センチ程度の踏み台の上に登る。

校長室の施錠をコントロールする防犯装置が、床から一五。センチの位置にあるため、一三。センチしかないわたしには、踏み台が必要だった。

「これを　こうするの」

それから、首からヒモ付きで提げていた携帯電話を、ドア横に据

え付けられている防犯装置のセンサー部分に掲げる。

「アカク、ヒカッテイルブブンヲ、サンビョウカン、ミツメテ、クダサイ」

ヒトの眼球の虹彩模様を照合することによるセキュリティセンサーを採用していた。

「はいはい わかりましたよ」

機械音声に命じられたとおり、わたしは防犯機器の赤く光るセンサー部分を覗きこむ。

「あ まぶしー」

チラチラする赤い光線に、私は思わず、目をつぶってしまった。
直後、ビーというエラー音が鳴った。

「エラー、デス。モウイチド、ニンショウ、シナオシテ、クダサイ」
「ごめんね ばもみをゆるして」

機械に謝りながら、わたしはもう一度、セキュリティチェックに挑戦する。

「よーし……あ まぶしっ」

ビーツというエラー音が繰り返される。

わかっていても、つい反射的に目を閉じてしまう。

「エラー、デス。フザケナイデ、マジメニ、ニンショウヲ、オコナツテ、クダサイ」

気のせいかな、機械音の割には、一度目のエラー時よりも語調が強くなっていた。

「ごめんね ほんとにごめんね」

昨日はじめて校長室に入ろうとしたときも、数回エラーを出しているわたしは、いわれのない劣等感に苛まれはじめていた。

今度こそと強く決意し、全精神力を顔面筋に集中させる。

「うーん……………」

ビーツ。

また、やってしまった。

「エラー、デス……フザケルノハ、イイカゲンニ、シテクダサイ。

ナンデスカ、キカイダカラッテ、バカニシテ、カラカッテイルノデスカ？」

無機質の機械音声が、人間的な感情のこもった口をきき始める。どうやら、ひがんでいる様子だった。

「よし こんどこそ」

わたしは、両手の人さし指と親指を使って、瞼が閉じるのを防ぎながら、センサーを見つめた。

「ニンショウ、シマシタ……ハジメカラ、ソウスレバ、ヨカッタノデス。マツタク、モウ。テマヲ、カケサセヤガツテ」

そんな機械の言い草に、わたしは無性に腹がたった。

13・目には見えない友人（前書き）

校長室のイジワルなセキュリティシステムに泣かされながらも、
もみタンは任務を遂行する。 第13回

13：目には見えない友人

校長室内が樟脳臭いのは、部屋の隅にあるクローゼットのせいだった。

着任時、はじめてクローゼットの扉をあけて見たら、初代校長の男性用スーツが三着そのまま残してあった。

中年の衣服というのは、樟脳臭いのだ。

「かちゃこちゃかちゃ えんたー」

大仰な革張りのアームチェアに座り、わたしは、ノートPCのキーボードをひたすら打鍵していた。

「いったんふしゅうしたものの かんさつたいしょうえーにより সেই」

観察対象Aとは、真魔ラファエロこと橋本ひろしを指している。

今朝あったばかりの出来事を、報告書にまとめて、わたしが所属している、防衛省の部署へと送信する必要があった。

いま、その報告書データの作成を行っているのだ。

「どうじつとおまるにいまるふん きゅうめいへりがとうちやく」

ついさきほど、この学園屋上のヘリポートから、ラファエロに殺され蘇生させられた男子生徒が搬送されていったところだった。

「こんごもひきつづき かんさつたいしょうえーのほそくをさいゆうせんじこうとする」

ノートPCの12インチディスプレイには、たくさんの漢字がならんでいる。

全部、わたしがタイピングしたのだ。

「ばもみ かんじよめたりかいたりできるよ」

「ねえ、さつきから独りごと多いよ」

横から、鋭いツツコミがはいる。

「だって ばかだっておもわれたくないもん」

わたしは、タイピングの手を休めて、言い返した。

「だれも、あんたのこと馬鹿だなんて言っていないでしょ」

女性にしては音程の低いその声は、いつも不機嫌そうに聴こえる。
「すけすけって ぜったいさだよね」

「あ、他人をサド呼ばわり……あんたって、ほんと失礼な幼女よね。
人は見かけによらないっていう典型みたいな性悪幼女」

私が「スケ助」と呼びかけた彼女は、すこし怒りを孕んだ口調で、
悪態をついてみせた。

「おっけー これでおしまい」

報告書の作成とその暗号化送信を終え、わたしはノートPCの操作をいったんやめる。

「ぱもみ しょうわるじゃないよ」

あえて自称するなら、スクール水着を身にまとった天使と名乗らせてもらいたい。

「自分じゃ何とでもいえるけどね」

スケ助は、また憎まれ口を叩く。

それでも、わたしは不愉快な気持ちにはならなかった。

彼女……スケ助が、普通の人間ではないからだ。

「ところで、ぱもみん。わたしを治す方法、調べてくれたの？」

姿は見えないものの、きっとスケ助は真剣な表情を浮かべているに違いない。

彼女にとっては、切実な問題なのだ。

「しらべてるよ げんざいといあわせちゅう」

私は、スケ助の声がした方向へ顔を向けてこたえる。

「どこ向いてしゃべってんの？ あたしはこっちだよ」

という声が、わたしの背中から聞こえてきた。いつのまに移動したのだろう。

つい先ほどまでは、わたしの正面あたりにいるとばかり思っていたのに。

「もー いたずらきんしー」

わたしは抗議するように、誰もいない空間を、両手でペチペチと

叩いてみせた。

「痛くなーい。ぜんぜん痛くなーい」

スケ助が、おどけた声で言ってみせる。

わたしの両手が、当然のように空振りしたからだ。

「きいー くやしー」

校長室のなかで、わたしは先ほどから壮大な独りごとを繰り返していた。

と言っても、傍目から見ればの話だ。

まったく姿は見えないものの、ここ校長室内には、わたし以外にもう一人いる。

それは「スケ助」とわたしが呼んでいる、透明人間の女の子だった。

13：目には見えない友人（後書き）

全部で原稿用紙300枚ありますので、あと35回以上は続きます。

14：記憶喪失の透明人間（前書き）

スケ助は、透明人間の女の子。正体不明、神出鬼没。今日もばもみにきついツツコミを放つ。第14回

14：記憶喪失の透明人間

「けんきゅうじょのひとが　いつてただけだね」

わたしは、言葉をよく選んでから、スケ助に説明する。

「とうめいにんげんって　まだよくわかってないらしいよ」

世界激変後、魔王やら宇宙人やら地底人やらの研究は進んでいたものの、それら以外のファンタジー的な概念に関する研究は、まだ発展途上のものが多いのだ。

「だったら、幽霊とかの研究は？」

わずかに責めるような口調で、スケ助が言った。

「ゆうれいも　よくわかんない」

たとえば、霊界の扉が開いて魑魅魍魎どもがこの世界を闊歩しはじめているのならば、防衛省も本格的な研究に乗り出すだろう。

しかし、いまだ未確認な、霊的存在というものに対しての研究は、せいぜいが市販されている妖怪マンガやトンデモ霊界本の精読とまりというのが、現状だった。

「そっか。じゃあ、あたしの正体解明は、今度もまだまだお預けてことなのね」

透明人間ゆえに表情をうかがうことは出来なかったが、スケ助の声は、ひどく落胆したものだった。

「しょうたいは　しーえむのあとで」

「こら、ふざけるなよー。この性悪幼女め」

すこしからかったら、スケ助は本来の元気な口調を取り戻した。

「ぱもみ　すけすけとあえてたのしいよ」

私がスケ助と出会ったのは、つい昨日の出来事だった。

つまり、このカドミウム学園に着任した当日だ。

「……あたしが話しかけて、おかしくならなかったのは、ぱもみんだけだよ」

照れ隠しなのか、スケ助は、昨日わたしに告げた言葉を、もうい

ちど繰り返した。

「ちよつとだけ　びつくりしたけどね」

わたしがこの学園に赴任してくるまで、スケ助は孤独な日々を送っていた。

一年と数ヶ月。

それは、ちょうどカドミウム学園の運営が始まった時期だった。

「あたしが話しかけると、みんなは決まって怖がって、怯えて、最後には精神に異常をきたしてしまう……まあ、姿の見えない存在に話しかけられて、面白がる奴のほうが変なんだけどね」

控えめな笑い声を漏らしながら、スケ助が語る。

「ぱもみって　きもがふといよ」

しかし、肝の太さを自認するわたしであっても、初めて校長室に足を踏み入れたときは、まさか室内に透明人間が潜んでいるとは夢にも思わず、すこし驚かされた。

「まあ、あんたの度胸のよさは、評価してあげてもいいわ」

わたしが、スケ助の存在に気がつく事が出来たのは、彼女が、校長室の中で、うっかりクシャミをしたからだだった。

わたしは、もちろん「だれ？」と尋ねた。

「実を言つと、あの時、あたしは返事をしようかどうか迷ってたんだよ。だって……もう他人がおかしくなっていく様を見たくなかったし」

スケ助の言うとおり、カドミウム学園が設立されてから今日まで、何名かの生徒が、精神科通いの末の休学ないしは自主退学していた。それらの生徒たちは、特殊防衛任務にまつわる過酷な訓練や教育カリキュラムを修める課程で精神疾患を患ったものだと思われるのだが、どうやら原因は、さみしがりやの透明人間にしつこく話しかけられたことにあつたようだ。

「じゃあなんで　ぱもみにはなしかけたの？」

「あはは、よく言うわよ……あの時、何のつもりだったのか知らないけど、ぱもみん、いきなりその場で踊り始めたじゃない。あれに

は笑ったわ」

踊った。

盆踊りを。

たしかに、わたしは盆踊りを披露してみせた。

校長室のど真ん中で。

「むかし　ならってたんだよ」

姿の见えないクシャミを耳にしたとき、わたしは、とっさに判断した。

　　なんと誰何しても返事がかえってこなかったので、あえて無防備に盆踊りを舞ってみせることにより、相手につけこむ隙を与える作戦だった。

「スク水を着た幼女が、かわいらしくも一生懸命に盆踊りしはじめたんだもの。そんなものを見せられて、好奇心を抑えられる人間なんていないわよ」

わたしは当初、宇宙人、地底人、魔王いずれかの敵勢力が放った暗殺者か、もしくはスパイ目的の諜報員の類だと思っていた。

だが、話しかけてきたのは、照れ屋でさみしがり屋の透明ガールだったのだから、世の中ふしぎな事があるものだ。

「せかい　ふしぎはっけん」

「え？　何よ、いきなり。あんた、ちょっと独りごと多いわよ」

こうやって、ふつうに会話をしているものの、やはりスケ助の姿は見えない。

声が聞こえてくる方向から、かろうじて現在の立ち位置が推し量れるものの、彼女は、やはり真正正銘の透明人間だった。

「あのあと　なにかおもいださせた？」

スケ助が言うには、彼女の過去の記憶には、抜け落ちている部分があまりに多いらしい。

「だめよ、ぜんぜん。一年以上もの間、何度も思い出そうとしてきたけど、結果は同じ。いまさら、一晩くらい脳味噌を絞ったところで、何にも出てこないわよ」

「のうみそしぼつたら　にゆるにゆるしたものか」

スケ助が言うには、いま思い出せる最も古い記憶は「一年と数ヶ月前のこの校長室で目を覚ました」というものだった。

そして、それ以前の記憶が、すっぽりと抜け落ちていっているらしい。

「あたしって……いったい何なんだろう？」

初対面の際に「ここカドミウム学園の生徒だったのか」と私は聞いたが、スケ助からは「それすらわからない」という答えが返ってきた。

「それどころか、あたし、自分で自分の姿を見ることができないのよ。鏡に映らないのは勿論のこと、自分の顔や身体すら、この目で視覚映像として捉えることができないの。唯一できることといったら、移動することくらい。でも、ドアや壁をすり抜けられるわけじゃないし、それなのに地面を踏みしめたり蹴ったりする感覚が無く、移動するといっても、ある地点から別の地点へフワリフワリと流されていく感覚。透明人間っていうか、まるで幽霊って感じよね」

スケ助が思い出せる最も古い記憶……一年と数ヶ月前の校長室。

それは、世界が激変してからしばらく経った頃だ。

単純に考えれば、世界激変がもたらした影響が、時間差的にスケ助を透明人間なるものへと変容させた……そして、この校長室で目を覚ましたというのだから、カドミウム学園の生徒だったと考えるのが、いちばん素直だろう。

いずれにせよ、断定はできない。

「ねえ　はなしはかわるけど」

辛気くさくなってきたので、思い切って話題を変えることにした。

「え？　なに、あたしの話、もう終わりなの？」

スケ助という女の子は、すこしくらい冷たくあしらった方が、かえって気持ちに張り合いがでるようだ。

その声に、不満のようなものはあれど、悲愴感も感じられなかった。

15：橋本ひろしは劣等生（前書き）

ぱもみと透明人間スケ助のおしゃべりは続く。第15回。

15：橋本ひろしは劣等生

「すけすけは らふぁえろうつてしつてる？」

「ラファエ郎？……ああ、あの横暴でちよつと頭のおかしい魔法使いのことでしょ」

「そうそう そいつそいつ」

スケ助は、一年以上前からこの学園に住み着いているのだから、知っていて当然だった。

「今朝も派手にやってたわね……実は、あたし見てたのよ。すぐ近くで」

「ふーん そつかー」

普段、スケ助は、学園内をふらふらと見て回っているらしい。

なにせ、ずっと暇を持てあましているのだから、学園内の様々な場所に足を運んでいるであろうことは、容易に想像できた。

「あの子、あの屋上から投げ落とされた子はどうなったの？ いちおう生き返ったところまでは見てただけだ」

「へりこぶたーで びょういんにいったよ」

今ごろは、最寄りの自衛隊中央病院で精密検査を受けているはずだ。

検査結果の報告が寄せられるのは明日の予定だが、あまり芳しいものではないだろうと、わたしは思っていた。

「元・ヒーローの哀れな末路って感じよね、アイツって」

「まおうたいじ したのにねー」

真魔ラファエ郎こと橋本ひろしを、この国で知らない者はいない。彼は、ほんの数ヶ月前に、この国を滅亡から救った。

富士樹海にて復活した魔王を、ほかの三人のメンバーとともに、討伐したのだ。

「あのラファエ郎って奴が、この学園に入学してきた時って、それはもうすごい騒ぎだったんだから」

魔王討伐のあと、一五歳だった真魔ラファエロこと橋本ひろしは、高校進学を希望した。

しかし、その希望を受けた防衛省は、頭を悩ませることになる。

「けっこう もめたんだよ」

橋本ひろし自身は、自らの功績を踏まえた上で、当然のように有名進学校を志望したが、そこには幾つかのハードルがたちはだかっていた。

「え？ どういうこと」

スケ助が意外そうな声を放つ。

一般人には、知らされていないことなのだから無理もない。

「あのこって べんきょうにがてなの」

橋本ひろしが魔王討伐メンバーに選ばれたのは、中学二年生の時それからというもの、防衛省の機関での特殊訓練と、魔王のもとへ辿りつくまでの戦闘に明け暮れる日々が続いた。

つまり、肉体的な鍛錬ばかりがなされ、同年代の人間が当然のように行っている義務教育を全く受けなかったのだ。

そうでなくとも、橋本ひろしという少年は、もともと勉強ができるタイプの生徒ではなかった。

「まあ しかたないけどね」

一般的な教育カリキュラム上、一番重要な時期に、魔王討伐に関わってしまったおかげで、学習が大幅に遅れてしまったのだ。

さらに、そこへ生来の出来の悪さが加わり、学力は悲惨なものとなる。

「だけど、なんだかんだいってヒーロー様なんだから、裏口入学じやダメだったの？」

記憶喪失ではあるものの、スケ助には、そういう基本的な一般常識くらいは持ち合わせているらしい。

「しようとおもえば うらぐちにゆうがく」

ただ、橋本ひろしは、あまりにもその存在が国民に広く知られていたため、不正な手段で有名進学校に入学させた場合、のちのち面

倒なことになりかねない。

いくら国を救ったヒーローといえども、裏口入学をしていい道理はないのだ。

同様に、推薦入学や無試験入学というのも、一般の受験生との兼ね合いを考えると難しかった。

それに、たとえ世論の合意を得たうえで有名進学校校に入学できたとしても、橋本ひろしの学力と学校の偏差値に差がありすぎるため、結局は、本人のためにならないという結論に至った。

「でも、学力うんぬんで言ったら、この学園だって偏差値高いですよ」

「そうだけど、ここはとくべつだから」

カドミウム学園に入学するのが狭き門だというのは事実だ。

なにせ、宇宙人や地底人や魔王との戦いにおける後方任務を担う人材を育成する機関であるから、秀でた頭脳だけではなく、特殊な適性も求められる。

しかしながら、ここカドミウム学園は、一般的な教育機関ではなく、防衛省付属の職業訓練校としての色合いが強かった。

だから、本省のさじ加減ひとつで、勉強のできない功労者ひとり入学することなど、たやすいことだった。

「橋本ひろしは、この学園で納得したの？」

スケ助が、なかなか鋭い問いかけをする。

「してないよ、それでいちばんもめたんだよ」

わたしは、スクール水着のおしり辺りの違和感を直しながら、スケ助に笑いかける。

橋本ひろしが防衛省に要求したのは、あくまでも一般人が通う高校への進学だった。

それも、マンガやアニメなどで描かれている、涙と笑いの青春わくわくキラキラな学園ユートピアを満喫したいのと言ったとか言わなかったとか。

「べつに有名進学校じゃなくても、選ばなければ、他に高校なん

てたくさんあるんじゃないの？」

「どうやら　へんなぷらいどがあつたらしいよ」

魔王討伐を成し遂げた、というプライド。

強大な魔力という、稀有な才能による人とは異なる能力を備えているというプライド。

凡人たちと自分は違うのだ、という正しくも歪んだエリート意識。はつきりと口に出しては言わなかったらしいが、橋本ひろしから聞き取りをしていた担当者の記録に「才色兼備の女性にたいする過度な憧れ？」と走り書きされていたのを見た記憶があつた。

真魔ラファエロこと橋本ひろしは、有名進学校に入学すれば、無条件で、美人かつ聡明な女の子との青春わくわくキラキラ学園ユー・トピア生活が満喫できると信じて疑わなかったのだらう。

「思春期ね。しかも、そうとう性質の悪い」

スケ助が、唸りながらつぶやく。

「えろのちからは　すごいよね」

「……ばもみん、けっこうハッキリ言うんだね。あどけない顔してるくせして」

「ぶいえつちえすしかり　ぴーえすつーしかり」

すべての発展と隆盛は、エロの力によるものだという説もある。

とにかく、今朝で五回目を数える、真魔ラファエロこと橋本ひろしの殺人後「即」蘇生行為が、この学園へ無理矢理にねじこみ入学させられたことへの抗議活動であるのは、明らかだった。

16：魔法使いは、駄々をこねる（前書き）

真魔ラファエロこと橋本ひろしの、カドミウム学園入学秘話のつづき。第16回

16：魔法使いは、駄々をこねる

「たしか、いちばん初めに殺されたのは、先生だったよね」

三ヶ月ほど前の出来事なので、スケ助はよく覚えているらしい。

「せいかつしどうの　たいばつきようし」

防衛省出向組の体育教師だった。

時は、入学式。

場所は、体育館。

真魔ラファエロこと橋本ひろしは、あれほどこねた割には、四月初旬に行われた入学式典に姿をあらわした。

しかし、殊勝だったのはそこまでで、式典開始一〇分ほどで飽きてしまい、途中で体育館を抜け出そうとした。

「まあ普通、注意するよね」

当然のごとく、数人の教師がラファエロを注意しにいく。

彼ら教師は、ラファエロが強大な魔力の持ち主であるということをも十分に承知していた。

しかし、その恐るべき発現を目の当たりにしたことはなく、かつラファエロの外見がごく平凡な一五才の少年だったので、油断してしまった。

「うつかり　てっけんせいさい」

反抗的な態度をとったラファエロを、その体育教師は、ついうつかり殴ってしまったのだ。

「きつと後悔したでしょうね。教師としてじゃなくって、一個の生き物として」

魔物どもと血みどろの殺し合いを繰り返してきたラファエロは、いふなれば全自動の殺戮マシンだ。

そのときには、すでに魔王との戦いは終わったとはいえ、一年以上にわたって繰り返してきたルーティンワークの記憶は消えることはない。

「そくしまほう あたまばくはつ」

命知らずの体育教師は、ラファエ郎に制裁を加えた鉄拳をにぎりしめたまま、その場で死亡した。

首から上が、針でつついたゴム風船のように「ぱんツ」と音をたてて破裂したそう。

「あたし見てたけど、あれはグロかったよ……」

スケ助が、いかにも眉をひそめていそうな声を漏らした。

体育教師の頭部が破裂した直後、周囲に赤いものやら黒いものやら灰褐色のものやらが飛び散った。

「でも すぐもとどおり」

体育館全体から悲鳴や絶叫があがるなか、その場を立ち去ろうとするラファエ郎は、背中を見せてゆっくりと歩きながら、呪文を唱える。

「ぐらたん もえたん らぼらとり」

「その呪文、ぜんぜん違うと思うけどね」

ラファエ郎の姿が見えなくなった頃には、周囲の生徒たちの衣服にこびりついた肉片や脳漿や血飛沫などが、ビデオの逆再生のごとく、ふたたび体育教師の頭部へと戻った。

「まさに かんぜんはんざい」

異様な光景を見せつけられ、体育館全体が騒然としている中、いちど死亡したはずの体育教師が、われを忘れて泣き叫ぶという形で蘇生したことをアピールはじめ、この事件はいちおう終結をみた。

「いったん殺しているけど、すぐに生き返らせてるからね。肉体は無傷だし」

スケ助のいうとおり、この入学式や今朝の出来事を殺人事件として立件するのは不可能だった。

なによりも、殺した物的証拠がないからだ。

それでも、ラファエ郎に殺害「即」蘇生行為をされたものは、必ずといっていいほど精神疾患に陥る。

しかし、傷害罪また暴行罪で立件しようにも、完全な肉体蘇生が行われているので、やはり物的証拠がないために、ラファエ郎を逮捕するのは困難だった。

「っていうか こうそくふかのう」

たとえ、ラファエ郎が何らかの犯罪を構成していると立証できたとしても、そもそも彼を逮捕、拘束することができなかった。

実際の手続きを考えると、警察や自衛隊警務隊程度の人員では、強大な魔力をもつラファエ郎を逮捕拘束することは不可能だった。

だからといって、五人程度を精神疾患に陥らせたという理由だけをもってして、およそ一万人規模の一個師団を展開させるということも、非現実的だった。

「まさに、腫れ物にさわるような扱いなのね」

スケ助が、まとめの言葉を述べた。

「そうなの こまってるの」

正式な手続きによってラファエ郎を拘束できないのであれば、残っているのは非合法な手段だけだ。

つまり「暗殺」なのだが、結果は言わなくてもわかるだろう。

この二、三ヶ月のあいだ、十七回にわたってラファエ郎に対する暗殺作戦が行われたが、すべて失敗に終わっている。

しかも、暗殺の実行者たちは、ご丁寧にすべて殺害され消滅した。

暗殺者たち自体が違法な存在であることから、その殺害をもって罪に問われることはない、ラファエ郎はよくわかっていているようだった。

もちろん、この暗殺作戦のことは極秘事項であり、スケ助に話す必要はない。

「……暗殺も失敗しまくりだしね」

とつぜん向けられた言葉に、わたしは虚を突かれる。

17：となりの秘密基地（前書き）

超極秘作戦である「橋本ひろし暗殺計画」を、透明人間のスケ助は目撃していた！？ どうする、ばもみ。第17回

17：となりの秘密基地

「なんのことだか さっぱりだよ」

たとえ白々しく見えたとしても、極秘事項を認めるわけにはいかない。

「とぼけなさんなって、ばもみん。あたしを、いったい誰だと思ってるのよ」

スケ助は透明人間だ。

なるほど。納得した。

いつも学校内を逍遙しているスケ助なら、十数回の暗殺作戦のうち、幾度かを目撃していたとしても不思議ではない。

「しってること ぜんぶはくじょうしてね」

わたしは、思い切って尋ねる。

「この学園の制服を着た奴らが、ラファエ郎にボコボコにされてる現場を、わたし何回も見てるわよ。あ、ボコボコっていうか、グチャグチャって感じだけど」

防衛省が放った暗殺者は、おもに十代なかばの魔力の持ち主たちだった。

目には目を、歯には歯を、魔法使いには魔法使いをぶつけるといふ、ごく自然な暗殺方法が採用された。

「まほうつかい いっぱいいいるよ」

いまや強大な魔力を備えているのは、何もラファエ郎だけではなかった。

二年前、魔王討伐隊を選抜するときに惜しくも選から漏れた連中というのがいる。

その数、数百名。

ラファエ郎たち正式メンバーに比べ、魔力の容量こそ劣っていたものの、防衛省はそんな彼らを囲い込み、養成するプロジェクトを発案して実行に移した。

「数百人って……その気になれば、この国を転覆できるんじゃないの？」

世界激変による魔王復活から二年が経った現在、いわゆる「魔力」というものに関する研究は、順調に進歩し続けていた。

その中でも、特に成果を挙げているのが、通常の科学力と魔力を融合させて行われる「魔力増幅」という技術だった。

この魔力増幅技術を用いれば、まったく魔力を持ち合わせていない者でも、自動車一台を瞬時にスクラップにする事くらいは出来るようになる。

ラファエロ暗殺作戦には、この魔力増幅技術によって強化された者が用いられた。

「でも あいつにはかなわない」

戦力でいえば、一〇〇名規模の陸軍一個中隊に匹敵するはずの強化魔力者たちは、ことごとくラファエロによってに惨殺され、その死体ごと消滅させられていった。

「……気をつけなよ。あいつに関わりすぎると、ばもみんな殺されちゃうよ」

表情こそ見えないが、スケ助は、かなり本気で私の身の安全を心配してくれているようだった。

「そうだね すけすけもきをつけてね」

いちおう社交辞令で言っておく。

「え？ わたしは大丈夫だよ。ぜんぜん心配ない」

思ったとおり、スケ助はわたしの言うことなど、おとなしく聞くはずがない。

「だめだよ ゆだんはきんもつ」

「へーき、平気。だって、わたし、何度もラファエロのすぐ側まで近づいて、ふざけて見せたことがあるけど、あいつ全然気がつかなかったし」

あっけらかんとした口調で、スケ助がケラケラと笑いながら言った。

危険も顧みず、そのような事を行ったということは、よほど透明人間としての日常生活が退屈だったに違いなかった。

あきれてよいのか同情すればよいのか、わたしはわからなくなってくる。

それにしても、いかに強大な魔力の持ち主といえども、スケ助を認識することができないとは。

「ひざしが つよいねー」

校長室から窓の外を眺める。

眼下には、運動グラウンドが見え、白いＴシャツと黒の短パンを身に着けた生徒たちが、サッカーボールを追いかけて、ひたすら走り回っていた。

時計の針は、午前十一時半ごろを指している。

「あ、出勤するんじゃないの？」

わたしの耳のあたりに息をふきかけるようにして、スケ助が話しかけてくる。

「もう くすぐつたいよー」

きやつ、と首をすくめながら、わたしはわずかにその場で飛び上がる。

「ほら、あそこ。ぱもみん、見るの初めてじゃないの？」

おそらく、スケ助は窓の外に向かって指さしているのだろうが、透明人間なのだから、わたしに見えるはずがない。

「しゅつどうつて るぼつとのこと？」

スケ助の言うとおり、こうして肉眼で見るのは初めてかもしれない。

防衛機密資料のうえでは、何度も目にしたことがあった。

「ほんと、冗談みたいな代物よね、あれって」

サッカーの授業が行われているグラウンドを通り越して、学園全体に張り巡らされているフェンスのさらに向こう側を眺める。

「ふつりよくはつでん あばんげりぴょん」

その二十五階建てビルに匹敵する高さを持つ機体は、まるで筍が

生えるように、ゆつくりと地面からせり上がっていた。

第十八式地球外生命体迎撃用自立式二足歩行兵器。
風力発電アバンゲリピヨン。

18：巨大ロボット操縦士の法則（前書き）

カドミウム学園の隣には、なんと巨大ロボットの発進基地があった。
ロボットの名は、風力発電アヴァンゲリピョン！ 第18回

18：巨大ロボット操縦士の法則

世界激変のあと、各国は、つぎつぎと宇宙から飛来してくる巨大怪獣の来襲に悩まされていた。

太古の昔に滅びた恐竜を彷彿とさせる、その巨大でグロテスクな容貌をもつ怪獣には、核を含む通常兵器および生物化学兵器による迎撃はまるで効果がなく、日本国政府および防衛省は、早急に、まったく新しい兵器の開発を迫られた。

フィクションの世界ではおなじみだった大怪獣に対抗するには、やはり同じフィクションの世界を参考にするしかない。

そこで、防衛省は、過去の特撮映画およびロボットアニメーションに関する研究を推し進め、地球外より飛来してくる大怪獣に対抗しうる、巨大な自立式二足歩行兵器、いわゆる戦闘用ロボットを開発することに成功した。

「ねえ、ぱもみん。あれって、本当に風力発電だけで動いてんの？　すごく嘘っぽいんだけど」

女のくせに、スケ助はロボットのスペックに興味があるようだった。

「うそじゃないよ　ふうりよくはつでん」

嘘ではないが、あのロボットを開発した防衛研究所は、なにも好きこのんで駆動機関を風力発電にしたわけではなかった。

アバンゲリピヨンの駆動機関は、はじめ原子力機関によるものになる予定だった。

しかし、原子力機関の技術は、核分裂反応によるものしか実用化されておらず、それはメルトダウンによる大事故につながる恐れのある技術だった。

そこで、日本国政府および防衛省は、思い切って地球に優しい風力発電ロボットの開発を試みた結果、これが意外なことに、原子力発電以上の成果をあげることになった。

「げんみつには ふうりよくじゃないけどね」

正確に言えば、アバングリピオン本体の八箇所に取り付けられた風車型スクリューによって、大気中に漂う不可視のニュートリノおよびダークマターおよび空気中に含まれる微量のアルゴン・キセノン・クリプトンを取り込み、それを変換器内で特殊エンロン・ラプネトーチル融合反応させることにより、原子力機関が生み出す以上の超エネルギーを発生させる。

「あ、飛んだ」

スケ助が、素っ頓狂な声を出す。

その言葉のとおり、遠く向こう側に直立していたはずの、地球に優しい巨大ロボット・風力発電アバングリピオンは、ゆっくりと地面から浮上し、付属するアンチ・グラビティ・ジェットエンジンを推進力にして、北北東の方角へと飛んでいった。

「びゅーん きをつけてねー」

ゲリピオンが向かった先は、おそらく石川県だと思う。

世界激変後、大怪獣たちは世界中に隈なく来襲したが、ここ日本国においては、なぜか石川県のみが狙いうちされた。

これまで二年のあいだ、数十回も来襲の機会があったにもかかわらず、大怪獣たちは、首都や大都市を狙わず、なぜか石川県のみを標的として破壊行為を繰り返していた。

「明らかに変よね。あんな存在感のうすい自治体を狙うなんて」

スケ助の言うことは、もっともだった。

北陸三県のうち、黒部峡谷トロッコ電車で有名な富山県や、原子力発電所の放射能漏れ事故で有名な福井県に比べて、さしたる特徴のない石川県だけが狙われるのは、とても不自然だった。

あえて大怪獣が狙う理由があるとすれば、石川県小松市に駐屯する自衛隊基地ということになるが、大怪獣には通常兵器が通用しないので、あの程度の航空戦力では脅威とは認められないだろう。

「でも よくかんがえると」

首都や大都市などに比べて防衛する必要性の低い石川県を攻撃す

るという行為は、高度な戦略であるという見方もできた。

いくら石川県が、さして重要でない地点だといっても、そこが自国の領土であるかぎり、防衛しなければならぬ。

防衛の費用対効果が低いからといって石川県を放棄したとして、万が一、そこに拠点でも設けられてしまえば、自国防衛戦略に深刻な影響を及ぼすからだ。

あえてどうでもよい地点に繰り返し大怪獣を来襲させることにより、こちら側の士気や軍事力を徐々に疲弊させていくという作戦の可能性もあった。

さらに言えば、相手の本拠地や正体がまったく判明しておらず、反撃にうつて出られないこちら側に見れば、そういう単純で効果的な戦略をとられれば手も足もでなかった。

いってみれば、我々は、莫大な軍事費を用いて、日本国のなかでも特にどうでもよい石川県という自治体を防衛しなければならず、やりがいがないばかりか、いたずらに国家としての体力を削られているのだった。

「ロボット基地がお隣にある学校って、このカドミウム学園くらいのものでしょね」

スケ助の言うとおりだった。

敵の襲撃も考えられるロボット基地と、まだ年若い生徒たちがいる学園を隣接させるなど、普通ならば考えられない組み合わせだ。

「でも しかたないよ」

風力発電アバンゲリピョンを唯一操縦できる人間が、一五才の少年なのだから、仕方がなかった。

「いちねんごくみ ちょーおんそくなむる」

カドミウム学園、一年五組。出席番号十三番。

超音速ナムル。

およそ一兆二千億円を費やして建造された戦闘用巨大ロボットの操縦者だ。

19：超音速ナムル（前書き）

風力発電アヴァンゲリピヨンの操縦士・超音速ナムルにまつわるエピソード。第19回

19：超音速ナムル

「うるさいらしいね、世論が」

透明人間のくせに、よく知っている。

普段から学園内をフラフラと歩き回っているのだから、情報通にもなる。

「そうそう　せろんうるさいよ」

世界激変後から二年程度を経ると「将来ある若者たちの青春時代を、国家の任務に奉仕させるのみに費やすなど許されない」という世論が、徐々にではあるが醸成されていた。

世界激変によって現れた三つの敵に対抗しうる能力をもっていたのは、すべて十代はじめから半ばの少女少女たちだ。

人類の存亡の危機を乗り切るため、世界激変の当初は、年若い少女少女たちを酷使するのもやむなしとされていたが、二年を経た現在ともなると、さすがに反対意見が噴き出し始めていた。

「まあそれって、健全な考え方だけどね」

特に、超音速ナムルの場合、たった一人だけのロボット操縦適格者だったため、年の離れた大人ばかりに囲まれて毎日を過ごしていた。

人格形成上もっとも重要な時期である青春時代を、十五才の少年にとつて不自然な環境のなかで送ってしまえば、のちのち良くない影響がないとも限らない。

彼……ナムルには、ロボット操縦者としての任務を全うさせながらも、周囲に同年代の者たちを配する必要があった。

「ひとりのために　がっこうせつりつ」

そこで、もともと四国地方の香川県中央部にあった『アバンゲリピオン駐屯地』に隣接する形で『防衛省付属カドミウム学園』を設立したのだった。

「ここの生徒って、みんな後方任務志望の子たちなんですよ？」

スヶ助の言うとおり、この学園に、お花屋さんやケーキ屋さんになりたい子供たちはいない。

「そうだよ みんなこうむいんしぼう」

「イヤな言い方するわね、ぱもみん」

カドミウム学園は、宇宙人・地底人・魔王の三種の敵から日本国を防衛する任務における後方支援担当員を養成するための軍事訓練施設だった。

ロボット操縦士のナムルのためにもなり、お国のためにもなる。

カドミウム学園は、まさに一石二鳥の方針のもと設置された機関なのだ。

「その超音速ナムルって奴も大変よね。だいたい、ロボットの操縦なんて、大人がすればいいのにね」

「ところが どのこい」

魔力というものが、十代半ばの少年少女しか持ち得ない能力であるのに対し、ロボット操縦には、そのような類の特殊な能力は必要ない。

では、なぜ十代半ばの少年……超音速ナムルでなければならなかったのか。

「いわゆるひとつの げんかつぎ」

実をいえば、ただのゲンかつぎだった。

超音速ナムルのような少年にアバングリピオンを操縦させるのが、いちばん縁起が良いのだと、様々な分析を行った研究者たちが自信をもって主張したのだ。

「何よそれ。ぱもみん、冗談言ってるの？」

その不可解で非科学的な結論を理解するためには、ロボット操縦士適格者の条件を知る必要がある。

「そのいち てんがいこどくなこと」

巨大ロボット操縦という任務には、つねに死の危険がつきまとう。このような任務をおこなう者に、両親をはじめとする親族が存命していた場合、いちいち国の方針に口をだしてくる恐れがある。

また、少年を危険な任務に従事させているということを口実にして、高額の金銭的見返りを求めてくるという可能性も考えられる。

ナムルには、両親を含めた親族がひとりもいなかった。

世界激変時に、全員死亡していたのだ。

「それに きよわなこと」

巨大ロボットという、保持戦力のうちもつとも強力で、自国にとっても脅威となりうる兵器を操縦するものが、あまりポジティブな人間であっては困る。

ましてや、国家転覆や世界征服などという野望を抱くような人間であつてもまずい。

そして、なるべく年少の頃からスポーツなどを嗜んでこなかった、どちらかといえば肉体的・精神的に虚弱な人間の方が、巨大ロボット操縦者としては適切だった。

ここでいう適切とは、国家にとって都合が良いという意味だ。

ナムルは、かなり消極的な性格の持ち主で、たとえば、朝決まった時間に起きれないほど、意思が弱かった。

「そのさん てれびやげーむがすきなこと」

逆説的にいえば、成長する過程で、小説や哲学書などの本を読まないできた人間であることが好ましい。

小説には、人間の愚かさや同じ過ちを繰り返す歴史が描かれている。

すなわち、出版されている小説の類には、戦争が人類最大の愚行であるとして描かれているものが極めて多く、それは自国防衛の精神とは相反するものだ。

巨大戦闘ロボットによって憎むべき敵を残酷に完膚なきまでに殲滅しなければならぬ操縦者が、市販小説に描かれているような安くて浅はかな正義感に染まっただけでは困る。

さいわい、ナムルが今まで読んだことのある小説といえば、小学生時代の読書感想文を書く際にイヤイヤ読まされた数冊にすぎず、その内容もほとんど失念しているようだった。

かろうじて、ヘミングウェイの『老人と海』という作品名を覚えていたが、超音速ナムルに対してその内容を尋ねたところ「浜辺のゴミ拾いボランティアをしているおじいさんの話？」という返答があったということだ。

「そのよん しょうねんしょうじよであること」

この四番目の条件こそが、巨大ロボットを操縦する者としての、重要な適性だった。

ここでいう少年少女とは、一三才から一七才くらいの者を指している。

彼らぐらいの年齢は、物心がついて間もないので、きわめて外部の意見に影響されやすいのだ。

20：機動兵卒ランダムは名作ロボットアニメ（前書き）

ばもみタンによって、巨大ロボット操縦士になるための条件が語られてきた。しかし、もっとも重要な適性は……。第20回

20：機動兵卒ランダムは名作ロボットアニメ

「つまり あつかいやすいの」

たとえば一八才くらいの少年少女ともなれば、ある程度的人格形成が済んでいるので、意のままに操ることが難しくなる。

「それとね でんとうにしたがつて」

風力発電アバンゲリピヨンという巨大ロボットを開発する際に、もつとも参考になったのは、過去に制作された数多のロボットアニメーション作品だった。

世界激変の以前には、それらは単なるフィクションとしてしか認知されていなかった。

しかし、莫大な国家予算を背景に、有能な科学者たちが研究目的で過去のロボットアニメーション作品群を本格的に鑑賞した結果、いままでは不可能であるとされた技術が、いくつも実現可能であることが判明したのだった。

つまり、風力発電アバンゲリピヨンという戦闘用巨大ロボットは、過去のロボットアニメーションで描かれていた、フィクション的科學技術の結晶なのだった。

「ウソみたいな話だけど、実際、あんなに大きいロボットが、二本足で立つて、しかも空まで飛んじやってるもんね」

そんな戦闘用巨大ロボット工学の理論的支柱になったロボットアニメーションには、多くの場合に共通するパターンがあった。

「しゅじんこうが しょうねんしょうじょ」

例えば、超名作ロボットアニメと語り継がれている『伝説巨漢ウデオン』という作品では、三名の操縦者のうち二名が一六才と一七歳の少年少女だった。

残り一名の操縦者は二一才であり、この人物は、作品の中盤あたりで死亡する。

ちなみに、作品の後半で、この二十代操縦士のかわりに、新たな

人物が操縦者となるが、やはり二十代前半の男性であり、不慮の事故によって操縦桿を握りしめたまま死亡する。

その事故の際、二人の少年少女は、同じロボット内にて操縦していたにもかかわらず、なぜか生き残っている。

「そのほかにも れいはあるよ」

きわめつけは、初代シリーズから数十年を経た現在でも続編が制作され続けている『機動兵卒ランダム』の主人公が一六才の少年だったという事実だ。

そして、注目すべき事実として、この機動戦士ランダムの主人公、ヒムロ・ルイは、その十五年後の物語を描いた『機動兵卒ランダム・復讐のミヤア』という映画で、あるうことが死亡してしまう。

享年・二九歳。

ヒムロ・ルイは、少年ではなくなってしまったが故に、死んでしまったのだ。

以上、ほんの一部の例を挙げたにすぎないが、やはり戦闘用巨大ロボットの主人公は、少なくとも一六才くらいの者でなければならぬ。

それ以上の年齢の者が巨大ロボットに乗り込み戦闘を行った場合、死亡する確率が格段に高くなるのだ。

「りゆうはない ろぼつとあにめとはそういうものだ」

わたしは、巨大ロボット工学の権威と呼ばれている研究者たちの口真似を試みせた。

彼らとは、何度も面識があつたが、なるべくならもう二度と言葉を交わさずに済めばいいと思つてるのが正直なところだ。

特に、巨大ロボット工学の礎となつた『機動兵卒ランダム』というロボットアニメーションの話題ともなれば、彼らは最悪の様相を呈する。

「ころしあういきおいで おたがいをのしりあうよ」

コアなファンともなれば、まるで原理主義宗教の信徒のごとく、意見の違ふ者に対して激しい口撃を加えることすらあつた。

機動兵卒ランダムに言及する時に限って言えば、例外なく彼らは気が触れている。

「そんなにヒドイの？ ランダムっていうアニメが好きの人って、あまり興味がなさそうな口ぶりで、スケ助が言った。

「ぞくへんでは もっとたいへんなことに」

ランダムファンといえば、以前は男性向けの内容がほとんどだったが、近年に制作された続編『機動兵卒ランダムWINDS』や『機動兵卒ランダムSPEED』では、新たに女性ファン獲得のための要素が加わえられた。

そのせいで、ランダムファンの周辺は、ますますキナ臭いことになっていくとかいないとか。

「ろぼつとといえば じゅうだいのしょうねん」

巨大ロボット工学者たちが口を揃えて主張した結果、数々の選考と厳しい適性検査を経て、当時一四才だった超音速ナムルが、風力発電アバンゲリピヨンの操縦者に任命されたのだった。

最終選考にあがってきた超音速ナムルを見たロボット工学の権威たち皆が「ヒムロ・ルイにそっくりじゃないか！」などと、嬉々とした表情を浮かべながら言ったとか、言わなかったとか。

いずれにせよ、なんとも馬鹿馬鹿しい話だった。

「……あ、お昼だ」

正午を知らせるサイレンが、ガラス窓越しに聞こえてきた。

もうそろそろ四時限目の授業がおわり、昼休みとなる。

「すけすけって おひるなにたべるの」

透明人間でも、腹のへることがあるのだろうか。

わたしは、興味本位で訊いてみた。

「なんにも食べないよ、あたしは。っていうか、食べるっていう行為を今までしたことない。ここの生徒たちが口に運んでいる食べ物を見ても、べつに何にも感じないし」

スケ助は、恥じいるような言いにくそうな口調だった。

普通の人間ではないということに、引け目を感じているのかもしれない。

「ふーん そっかー」

「そう言っぱもみんは、お昼、なに食べるの？」

会話のはずみで、スケ助が訊いてきた。

「ぱもみ おひるたべないしゆぎなの」

わたしは、いつも用意している答えを返した。

21：ばもみ1人芝居（前書き）

魔法使いに透明人間に巨大ロボット。なんだか混沌としてきたけれど、続きをどうぞ。第21回

21：ばもみ1人芝居

三章

生徒調査票によれば、橋本ひろしは一年三組に所属しているとのことだった。

「じしょう しんまらふあえろう」

カドミウム学園の校舎は五階建てで、一年生のクラスには、三階の部分が割り当てられていた。

「がきどもが くさるほどいるね」

つい、本音が出てしまう。

「ちよつと ていせい」

廊下には、昼休みを満喫している生徒たちの姿が、たくさんあった。

身長一三〇センチという小さな体で、わたしは、ようやく階段を登りおえ、三階にやってきた。

「すくみず めげそうになってる」

激しい運動のあとなので、スクール水着の肩ヒモが、ずり落ちそうになっていた。

わたしのそんな姿は、教育上よろしくないと判断し、手早く直した。

おしりの辺りの布地のくいこみも、直す。

劣情をもよおされでもすれば、のちのち面倒だ。

「あ！」

どこからか、馬鹿丸出しの声があがった。

「ばもみタンだ！ ばもみタンがいるぞー！」

まるで狼を見つけた羊飼いのごとく、その男子生徒は、遠くからわたしのことを指さす。

「ばかたれさん　こんにちわー」

聞こえないような小さな声でつぶやきながら、わたしは愛想よく小さな手を振ってやった。

「もえゝ、ばもみタン、もえゝ」

発語障害のヤギのごとき啼き声をあげながら、数人の男子生徒が、教室通路側の窓から身を乗り出している。

将来、特殊戦闘の後方任務を担う連中が、こんな奴らなのかと思うと、先が思いやられる。

大丈夫なのか、この国の未来は。

「おい！　いま手を振ったとき、ワキの下が見えたぞ！　もえゝ」
言っておくが、毛は生えていない。

わたしは、まだ生えていない。

いろんなところが、生えていない。

「だまれよ、この腋フェチが！　くされ外道め！　スクール水着で重要なのは、ヒップのタイトでスタイリッシュなフォルムなんだよ！」

何やら意味不明なことについて罵りあっているのを男子生徒たちを無視して、わたしは一年三組のプレートを探す。

「いまの時代に、旧式スク水とは、ばもみタンは渋いなあー」

「確かに、あの極短スカートタイプのスク水は貴重だよなあ。いまの主流は、なるべく水流の抵抗がすくないスポーツタイプだからなあ」

「そうそう。あの腰から下へわずかに垂れさがっている極短のスカートと呼ばれる部分が、ニヤンニヤン部分をわずかに隠そうとしているのが、萌えポイントなんだよなあ」

わたしに聞こえるように言っているのは、果たしてワザとなのだろうか。

そっという羞恥プレイ的なことをすることで、わたしの含羞の表情

を引き出そうという意図なのかもしれない。

「へんたいの ふきだまり」

男子生徒たちの視線を一心に集めながら、わたしは、裸足にスクール水着という、あられもない姿で廊下を歩く。

「おれ、ここに入学して良かった！」

「僕もだ！ 勉強がんばろう！ 明日から死ぬほど頑張ろうと思う！」

「そうだ死ぬぞ！ 俺は死ぬ！」

「あのー、首席で卒業したら、ぱもみタンの一日膝枕サービス券がもらえるっていうウワサは本当なんでしょうか？」

わたしが知らないところで、どうやらとんでもない都市伝説が飛び交っているらしい。

「みみそうじも ついてくるよ」

つい、余計な事を言ってしまった。

「うおおおおお！ 鼻血ブウウウウ！」

微妙に古い表現でわめきながら、男子生徒たちの喧騒はますます大きなものへと変わっていく。

「こまく やぶりほうだい」

あんな痛そうなことを自ら望むなんて、物好きな奴もいるものだと、わたしは感心する。

来年の卒業式が、今から楽しみだ。

「ここは いちねんごくみ」

そのひとつ向こう側の教室には「一年四組」のプレートが掲示されていたので、目指す場所は近い。

「妹にしたい校長先生ナンバーワン！」

「スク水が似合う校長先生ナンバーワン！」

「頼ずりしたい校長先生ナンバーワン！」

度を越した歓喜の声を上げている男子生徒たちとは違い、女子生徒たちは、特に騒がず、それぞれの机を集わせてランチタイムを楽しんでいた。

「こんにちわ ぱもみだよ」

一年三組の教室に足を踏み入れてから、とりあえず挨拶をする。

「あ、校長先生。こんにちわー」

入口近くにいた女子生徒たちが、わざわざ箸をおいて、わたしに会釈を試みせる。

「おかまいなく きにしないでね」

小さな手を振って、わたしは立ち上がろうとしていた女子生徒たちを制止する。

教室を見渡しても、橋本ひろしの姿は見当たらなかった。

「ねえねえ ちょっと」

わたしは、席を囲んで昼食をとっていた男子グループに近づく。生徒たちは皆、最低でも三人以上のグループをつくっていて、一人きりで食っている者はいなかった。

「うおおおお！ ぱもみタンに話しかけられたああああ」

その男子は、やにわに椅子から立ち上がると、こめかみに血管を浮き立たせ、全力で絶叫してみせた。

「恋愛フラグ、キターーーッ」

「幼女フラグ、キターーーッ」

「スク水フラグ、キターーーッ」

まるで判を押したように、この学園の男子生徒たちの反応は似通っていた。

無駄に騒いで、うるさい、うざい。

「ききたいんだけど ぱもみにおしえてくれる？」

顔を紅潮させてはしゃいでいる様子に辟易としながらも、わたしは尋ねる。

「はい、よろこんでー。ぱもみタンの質問なら、よろこんでー」

「うらやましいいいい！ 放課後イベント発生フラグ、キターーーッ」

「死ね！ 知恵熱だして死んでしまえ！」

「このロリコン！ うじ虫！ 蛾の幼虫！ モスラ野郎！」

わたしが話しかけた男子に向かって、周囲の生徒たちが、いつせいに罵倒の言葉を浴びせはじめた。

にもかかわらず、わたしの目の前にいるその男子は、顔面崩壊しそつなくらいの勢いで、激しくにやついていた。

「じゃあ きくけどね」

このあとの相手の反応が楽しみで、わたしは、口元の緩みを抑えることができない。

「はしもひろし どこにいるかしらない？」

教室内の空気が、一瞬で張り詰めた。

ありえないスピードで、教室内の生徒たちの喧騒が、そのまま静寂へと変わった。

廊下では、他のクラスの男子たちが騒いでいるだけあって、一年三組の水を打ったような静けさは際立って感じられる。

「……………」

誰かが、床に金属製のスプーンが何かを落としたらしい。

キーーーーン、という音がした。

「みんな なんですまるの？」

自分で言っていて、なんと白々しいのだろうと飽きてしまう。

さきほどまでイライラさせられた分、少しくらい意地の悪いことをしたとしてもバチは当たらないだろう。

「なんで めをそらすの？」

わたしが、一三〇センチの身長から顔をのぞきこむと、男子生徒の一人は、すばやく目をそらしてみせた。

関わりあいには、なりたくないのだろう。

「うわ きたないな」

女子生徒のひとりが、いきなりその場で嘔吐した。

この程度の緊迫した状況に耐えられずして、特殊戦闘の後方任務など務まらない。

「ぱもみ こまったな」

彼ら一年三組の生徒たちの反応は、はじめから予想していた。

わたしは、ぜんぜん困っていない。

「いじわるで おしえてくれないの？」

と、意地悪な気持ちで訊いてみる。

「……………」

クラス全員が、揃いもそろって首を横にふり、否の意思表示をしてみせた。

「いじわるするなら ばもみにもかんがえがあるよ」

わたしは、いたいけな幼女の微笑を浮かべて言う。

さて、ばもみ劇場の始まりだ。

「ねえねえ はしもとくん」

「は、なんでしょうか、こうちようせんせい」

「さつきね いちねんさんくみにいったらね」

「ええ、ぼくのくらすです」

「そうそう そこへいったらね」

「ふむふむ。いったら？」

「くらすのみんなが きみのわるぐちってたよ」

「なんですって！ どんなわるぐちを？」

「いきがくさいとか ぶさいくだとかいってたよ」

「うーむ。あいつら、ただじゃおかない」

「知らない ていどにね」

真魔ラファエロこと橋本ひろしの部分だけ声色をかえて、わたしは一人芝居をしてみせた。

「いやあああああああ」

とつぜん叫びはじめたのは、男子生徒。

「ぜんぜん、かわいくない。」

「やめてえええええええ」

それに続いて、別の男子生徒が、女の子のような悲鳴をあげる。

「こ、ころされるうううう」

「しにたくないよおおお」

「まだ恋もしてないのにいいい」

「一度でいいからコスプレしたかったあああつ」

わたしの脅迫ひとり芝居が効いたようで、一年三組の生徒たちがそれぞれ何事かを叫びはじめて、クラス内に喧騒が戻る。

「し、知らないんです。ぼくら、ラファエロさまの居場所なんて、本当に知らないんです」

唇をふるわせながら、男子生徒のひとりが涙目で言う。

彼ら一年三組の生徒たちは、橋本ひろしの事を「ラファエロさま」という呼ぶように、普段から強制されている様子だった。

「あー きたないなー」

今度は、別の女子生徒が、教室の床に向かって嘔吐した。

よほど、橋本ひろしのが恐ろしいのだろうか。

「あれれ やりすぎちゃったかな？」

わたしとしたことが、ここに来るタイミングを間違えてしまったようだ。

いくらなんでも、食事時はマズかった。

脅迫と人殺しは、空腹時を狙ってやらないと後始末が大変なのだ。

「おじゃましました かえるね」

これ以上、橋本ひろしの情報は得られないと判断し、わたしは教室を出ることにした。

廊下へ振り返ると、一年三組の普通ではない慄然とした様子を、眺めている他の生徒たちの姿があった。

「うおおおおっ！ ばもみタン再登場おお！」

わたしが教室から出てくるのを待ち構えていたように、他のクラス男子生徒たちが、ふたたび騒ぎはじめる。

「…… 本省より緊急連絡。本省より緊急連絡。ばもみ校長、至急、職員室までお越しください…… くりかえします。ばもみ校長、至急、職員室までお越しください。通信おわり」

萌え萌えという声を掻き消すように、校内連絡放送が割り込んで

きた。

その職員らしき男性の声は、やや緊迫したものを含んでいた。

「……………」

周りの男子生徒たちも、そのことを感じとったのか、急に騒ぐのをやめ、気まずそうな感じで、わたしの進行方向へと道を開けていった。

本省つまり防衛省からの緊急連絡といえ、この学園内では、もっとも優先されるべき事項だった。

うるさかった男子生徒たちの態度の変化は、そのことをよく理解している上でのものだ。

「はいはい　とおりますよー」

わたしは、変わらぬ愛想を振りまきながら、階段に向かって歩いていった。

22：教頭が死ねばいいのに（前書き）

橋本ひろしが所属しているクラスに行ったものの、会えなかったばもみタン。そこへ職員室から緊急連絡が届く。第22回

22：教頭が死ねばいいのに

「二尉、お待ちしてました」

わたしが職員室へ出向くと、保健医の江賢原料子・二等陸曹が待ち構えていた。

一八。センチを超える長身の、白衣を着た女だ。

「おまたせ、なんかあった？」

「はい。学園内で、死人ができました」

白衣姿の江賢原のまわりには、同じ防衛省出向組の男子教師たちの姿もあった。

すこし色めきたっている様子だ。

「へえー だれがしんだの？」

わたしは即座に、江賢原二曹に訊いた。

「……大変なことになりましたね」

頭の上から、不機嫌な声が降ってくる。

声のした方向を見上げると、そこには無愛想な教頭の顔があった。

「おとーさん おかーさん」

わたしは涙ぐみながら、できるだけ感情をこめて大声で叫ぶ。

「アッ！ やめてください！ アッ！」

教頭は、あつという間に取り乱した。

今度から、説教されそうになったら、この手を使うことにしよう。

「それで じょうきようは？」

「いったい誰が死んだというのか。」

「一年の女生徒です。死亡者の氏名は、獄宮エモーション」

江賢原二曹の口から出た名前に、わたしは聞き覚えがあった。

「ぎよくみや えもーしょん？」

「ええ」

「もしかして せんたいのひと？」

わたしは記憶を辿りながら、江賢原に問いかける。

「そうです、よくご存知で。死亡した獄宮エモーションは、生前、イエロー戦隊員の任についておりました」

わたしの記憶に間違いはなかったようだ。

「そのほかの じょうきょうは？」

さらに詳細な情報を述べるよう、わたしは報告をうながす。

「発見は、現時刻よりも二十四分前の一二時五三分ごろ。場所は、一階西館にある男子トイレの中です」

江賢原二曹が、手元のメモを読みあげる。

「発見者は、二年の男子生徒です。昼休み中、用を足すために西館トイレに足を踏み入れたところ、獄宮エモーションがタイルの上で仰向けになって倒れているところを発見。迅速に携帯電話にて、職員室へ報告。その三分後に、わたくしが本省へ緊急打電いたしました」

つまりは、もう既に、この学園の不祥事は、防衛省の知るところとなった。

「じゃあ もうそろそろだね」

防衛省直属の特務処理班が、いまから数分後もたたないうちに、自衛隊ヘリに乗ってやってくるだろう。

防衛省にとつては、何よりも事件の隠蔽が優先される。

今朝、ラファエ郎にやられた生徒を一度搬送しているので、特務班のヘリは、本日二度目の出勤となる。

「人が死んだのは、今日で二人目ですな。校長も、着任早々、運がありませんねえ」

心なしか、教頭が浮ついた声で言った。

文部科学省出向組としては、血生臭いことの責任は、みな防衛省出向組職員の責任だと言わんばかりの態度だった。

要するに、他人事だと思っっているらしい。

「ばあいによつては ぜんいんくび」

むかついたので、わたしの意地悪の虫が騒ぐ。

「そうですねえクビ……えっ！ そ、そんな大げさな。も、もしそ

うなつたとしても、もちろん、あなたがた防衛省出向組だけですね？　そうですよね？　ね？」

「文科省出向組のひとりやふたり、巻き添えにするくらい、さほど難しくないのでは？　ねえ、二尉？」

保健医の江賢原料子が、気を利かせて援護射撃をしてくれた。

「そーだね　まきぞえおもしろいね」

「わわわ、ぜんぜん面白くありません！」

すこしくらい冗談を受け流すことを覚えたほうがいいと思う。

「ところで　したいみてきたの？」

わたしは、江賢原二曹に尋ねる。

「はい。本省の特務処理班が到着するまでは現場を乱せませんが、獄宮エモーションの遺体は、ひととおり検分しております……外傷はなく、あれはたぶん、シヨック性の心臓麻痺か何かだと思います」
江賢原二曹の言葉に、迷いはない。

医学的見地からみて、何らかの急性疾患だと当たりをつけている様子だった。

「なんで　だんしといれに？」

死んでいたのは獄宮エモーションという、この学園の女子生徒だ。本当にシヨック性の心臓麻痺であるならば、これは病死ということとなる。

だが、女子生徒が、昼休みの時間帯に、わざわざ男子トイレで病死するという事象には、すこしも現実感が伴っていなかった。

あまりにも、不自然だ。

「理由などないのでは？　考え事をしながら間違つて女子トイレに入ってしまうなんて、人生に二度三度はある失敗でしょう？」

教頭が、口を挟んでくる。

「きょうとうが　はんざいのじきょうをはじめたよ」

「はい。教頭先生がやってしまったのは、いわゆる痴漢行為ですね。迷惑防止条例違反に該当します」

すかさず江賢原女医が、わたしの陰湿な口撃をフォローしてくれ

た。

いい部下だ。

じつに、いい部下だ。

「な、なにを！ なにを言いますか、あなたたちは！ 私は、あくまでも、私は例え話をしただけであって、私は、実際には、私は……」

教頭が、大きく表情を乱して弁解をしはじめた。

今朝、はじめて顔をあわせた時の威厳とプライドは、跡形も無くなっていた。

わたしが思うに、やはり学歴コンプレックスが原因なのだろうと思う。

東京大学とスーパー東京大学。

七才の幼女よりも、学歴が低かったという事実。

性的虐待犯の汚名。

さらに、過去の痴漢犯罪歴の暴露。

よほどショックを受けたに違いなかった。

「二尉は、急性の心臓疾患による死亡ではなく……事件性があるとお考えなのですか？」

江賢原料子が、わたしの目の高さに合わせてるようにして、しゃがみこむ。

「あれれれ ぱんつみえてるよ」

しゃがんでいる江賢原二曹のミニスカートからは、イチゴ模様の三角地帯がのぞいていた。

「そうですか。で、二尉はどうお考えなのですか？」

構わずにそう受け流して、江賢原二尉は、そばでソワソワしている教頭に冷たい一瞥をくれていた。

「おかしいでしょ なんか」

わたしとて、確信をもって事件性を主張しているのではない。

ただ、今回の出来事を病死で片付けることには無理があるのは、明らかだった。

「なるほど……では、病死か事件か、どちらかハッキリさせるために、ええと、こういうのはいかがでしょうか？」

しゃがんでいた姿勢から、ふたたび立ち上がって、江賢原二曹が言った。

なぜか、薄笑いを浮かべている。

「えんりよなく　いつてみ」

保健医の表情に自信の色が見られたので、わたしは、多少の期待をこめて、提案を促した。

「ええと、あのですね。ここは思いきって、死亡した獄宮エモーシヨンの開頭手術をしまして、そのう、私にちよこつと脳髓をいじらせていただければ、なにかわかる可能性が無きにしもあらずなのではないかと……」

「だめ　のうずいはだめ」

ガツカリだった。

このマッド保健医に、建設的な提案を期待したわたしが愚かだった。

東大医学部脳神経外科卒という経歴をもつ、この江賢原料子という二等陸曹は、脳髓手術万能論者であり、なにかといえば開頭手術を行いたがる。

「いや、しかしですね、わたしの研究によれば、脳髓をちよこちよこつといじりさえすれば、あの長期間の治療を要する水虫が、なんと一夜にして治るのです。そのほかにも、急性盲腸炎にしまして、発症後、ただちに開頭手術を施すことにより、わざわざ腹部を切開し、患部を除去することなく盲腸炎を治療することも可能なのです。万能なのです。脳髓をいじれば、どんな病気でもたちどころに治癒するはずなのです。だから、私に、死亡した獄宮エモーシヨンの脳髓をいじらせてください。もしかして、なにかの弾みで生き返っちゃったりする可能性が無きにしも……」

「だめ　ぜつたいだめ」

脳で病気を治そうとする前に、自分の脳の病気を治したほうがい

いと、わたしは思った。

「うーん こまったなー」

実をいえば、わたしには、容疑者の心当たりがあった。

しかし、今回の特異な状況は、その人物へ疑惑の目を向けることを拒んでいるように思えた。

23：地底人類のおはなし（前書き）

私立カドミウム学園で、女子生徒の死体が発見される。場所は、男子トイレ。災難だね、ぱもみタン。第23回

23：地底人類のおはなし

校長室の窓からは、ますます強い日差しが差し込んでいた。

エアコンからは冷気が放たれているものの、わたしは窓際に立ちまともに日光を浴びているので、肌がジンと熱く焦げるように感じた。

「あつは なついね」

夏の昼下がり、わたしは意味もなくふざけてみせる。

これから日を追うことに、暑さは厳しくなっていくのだろう。

「で、エモ子は、病気で死んだことになったわけね？」

スケ助が、不満そうな口ぶりで言う。

いま「エモ子」と呼んだのは、きょうの昼休みに男子トイレで死亡していた、獄宮エモーションのことだ。

「そうだよ びょうしだよ」

死因は急性の心臓疾患であると、さきほど、防衛省特務処理班からの司法解剖結果報告が寄せられたばかりだった。

「なんかつまないね。せっかく、推理ドラマ『すくみず水探偵ばもみタン』が始まるかと思ってたのに」

「そうだね つまらないね」

適当に、返事をしておく。

「死んだエモ子って、確か、戦隊員でしょ？ 今回のことって、いくら肉体的に常人離れしてても、病気には勝てないっていういい例なのかなあ」

透明人間なので目には見えないが、平気な顔でスケ助はつぶやいた。

「びょうきって こわいね」

スケ助の言うとおり、いつそのこと急性の心臓疾患、病死であるほうが、今回の事件は筋が通ったものになる。

ただ、わたしはそんな筋の通った病死シナリオが、真相であると

は思っていないかった。

「たしか戦隊員って、ふつうの人間の一万倍の肉体能力があるんでしょ？　ほとんどバケモノよね、それって」

「かいぞうにんげん　だもの」

スケ助は、記憶喪失の透明人間ではあるものの、世界激変以降の知識は、人並みにあるようだった。

「まあ地底人っていうバケモノを制圧するためには、同じくらいのバケモノである必要があるわけね。目には目を、ハムにはマヨネーズを、パンにはやっぱりネオソフトをってやつね」

「ぱもみ　わけわかんないよ」

スケ助が言ってみせた、ハンムラビ法典の低レベルなパロディはどうでもよいとして、言いたいことの意味くらいは理解できる。

つまりは、戦隊員はバケモノじみた肉体能力の持ち主であり、生前その戦隊員の任務についていた獄宮エモーションもまた、強靱すぎるくらいに肉体の持ち主であった。

「さつき死体を見ちゃったけど、案外、普通の女の子よね。地底人をぶち殺せるくらいだから、二メートルを超える筋肉ムキムキの大女だとしてもおかしくないんだけど」

「かいぞうにんげん　だもの」

戦隊員……正式名称は、対地底勢力殲滅戦闘部隊員。

世界激変後、日本各地に出没するようになった、地底人勢力の部隊たち・通称「アングラ・モングラ」たちを残らず殲滅するのが、戦隊員たちの使命だった。

「でもさ、ぱもみん。あのアングラっていう奴ら、なんかしょばいよね。よりにもよって、なんで幼稚園バスばかり狙うわけ？」

「こどもが　もくてき」

スケ助は「しょばい」と言ったが、あれこそが、我々を脅かす、最も効率的かつ確実な方法だった。

「りゆう　そのいち」

幼稚園バスというからには、それに乗っているのは、一才から五

才くらいまでの、幼い子供たちだ。

バスジャックによつて、そんな子供たちを人質に取られた場合、世論の反発なども考慮しなければならず、あまり乱暴な事件解決策をとることができない。

「りゆう そのに」

幼稚園バスは、無くせない。

主に、共働きなどの理由により、我が子を幼稚園や保育園に預けている親が圧倒的に多い場合、また幼稚園までの交通の手段がない場合にも、送迎バスという制度はたいへん重宝されている。

しかし、地底勢力のバスジャック犯罪を未然に防止する目的だといつて、幼稚園バスを廃止してしまえば、それらの事情をかかえた親たちは、たいへん困惑する自体に陥ってしまう。

だからといつて、幼稚園バスを装甲車化したりパトカーによる護衛をおこなつたりするなどという大それた予算はなく、全国で数万件ある幼稚園保育園にあわせてそれらを行う人員もいない。

よつて、幼稚園バスという優れたサービスを廃止することなどできず、そうなれば、バスジャックも防ぎようがなかった。

「りゆう そのさん」

地底人勢力が幼稚園バスばかりを狙う最大の目的は、幼児たちの大量誘拐だった。

なぜ、いまだ教育途中の半端で非力な幼児を誘拐するのか。彼らが欲しがっているのは、幼児たちの遺伝子情報だった。

地底勢力とはその名のとおり、われわれ地球表面上に文明を築いたのと同じように、地球中心部寄りの巨大空洞に、われわれと同じような文明を築きあげた第二の人類だ。

われわれ地表人類が日光なしでは生きられないように、彼ら地底人類は、地球のコアから放出される超高温を、肉体代謝の要としていた。

逆に言うならば、彼らは、地球のコアから遠く離れた場所、つまり地表では、長く生命を維持することができない。

世界激変のすこし前、地底文明の存続を危うくする、何らかの致命的な出来事が起こったようで、地底人類たちは自らの存亡をかけて、地表へと移住しなければならなかったというのだ。

ただ、地表で生活するためには、慣れない日光に対する抵抗力を身につけなければならず、それは遺伝子操作によって可能にすることができた。

地底人たちが幼稚園児の大量誘拐を目論むのは、まだ成長途中の遺伝子を研究採取することにより、日光に対する耐性を遺伝子操作によって獲得するためだった。

「へえー、なるほどね。納得した。悪者にも三分の理ね。ちゃんと理由があつて、幼稚園バスばかり狙ってたのね」

スケ助が、ひどく感心したような唸り声をだしてみせる。

「わかれば よろしい」

外見がスクール水着で幼女のため舐められがちだが、これですこしはわたしの事を見直したに違いない。

「あ、ぱもみんが威張ってる」

「えっへん うっふん」

わたしの色っぽい声は、さておき。

今回の出来事……獄宮エモーションが、男子トイレで死亡していた事件には、違和感を感じる部分がいくつかあった。

「今日も暑いよね。っていつても、わたし透明人間だから、汗かかないけど。あ、でも、なぜか、気温の変化は感じるができるんだよね」

獄宮エモーションの司法解剖報告結果には「右心室にわずかながら気泡が見られ、空気塞栓による死亡の可能性も考えられる」と記されていた。

これは空気塞栓の可能性を示唆しているのだが、エモ子の全身には、注射痕はなかった。

しかし、監察医意見として「また、獄宮エモーションに心臓にまつわる持病があったという記録はなく、また、きわめて微細ながら

原因不明の細胞壊死とみられる痕跡が、右心房内に認められた」とあった。

原因不明の細胞壊死。

これは、魔力による何らかの干渉を示唆しているとも考えられなくはない。

世界激変後、あたらしい物理法則に対応するため、法医学の世界も進歩していた。

それは司法解剖の研究にも恩恵があり、魔力による殺害時の痕跡を見分ける方法も、明らかにされつつあった。

ただ、それらは研究途上の成果であり、法的な証拠として有効なものではない。

だいぶ昔、警察操作にDNA鑑定が試験的に導入された当初、まだ裁判の証拠として認められなかった時期があったのと同じだ。

今回の司法解剖結果で明言がされていないのは、そういう理由による。

「こういう暑い日は、冷たいものでも食べたいよね。かき氷とかアイスクリームとか黒蜜寒天とか。あ、でも、わたし透明人間だからそんなもん食べれないし、手に持つことすらできないや。あはははは」

他殺の証拠は皆無に等しいものの、だからといって病死である可能性は、もっと少ない。

なぜなら、エモ子の肉体は、ちょっとやそつとの病気など発生しえない肉体だからだ。

「冷たいものが食べれないなら、あえて熱いものを食べてみるのも趣向だよな。グツグツ煮えたぎるモツ鍋とかアツアツのおでんとか、それともジュウジュウあぶった炭火焼肉も美味しいよね……あ、でも、熱かろうが冷たかろうが、やっぱり、わたし透明人間だからハシとかフォークとかを手には持てないんだよね。だから何にも食べれない。あはは、自分で言ってる虚しい気持ちになってくるなあ……あれ？　なんか目から水が出てきた……ような気がしたけど、わたし

し透明人間だからやっぱり気のせいかな。あーあ、涙も流せないなんて、あはははは、こっつて笑うところなのかなあ」

死亡した獄宮エモーションは、戦隊員であり、そうであるが故に、改造人間だった。

改造人間とは、通常の肉体に生化学的および機械的な改造を施した者のことを指す。

「ちていじんに たいこうするため」

世界激変後、宣戦布告をしてきた三つの勢力のうちのひとつ、地底人帝国。

彼らは、われわれ地表人類に対して、地球上の数分の一、正確にいうと、アフリカ大陸全土の明け渡しを要求してきた。

「そうは とんやがおろさない」

地球側は、これを断固拒否。

それを受けた地底人帝国側は、ただちに世界各国に攻撃を仕掛けはじめる。

それが、幼稚園バスジャック作戦だった。

「何も食べられないなら、せつかくの夏だし、海にでも行きたいわよねー。新しい水着買ったり、浮き輪買ったりしてさ……あつ、でも、あたし透明人間だから、水着着れないし、浮き輪つけても触れないから、海底までまっしぐら沈んじゃうかも。てへっ」

幼稚園バスジャックの実行部隊は、地底から送られてくる、異形の怪物たちだった。

たいてい、部隊長とみられる醜い怪物じみた者と、それらの部下たちが、早朝もしくは夕方の幼稚園バスを襲撃し、そのまま児童たちを誘拐しようとする。

24：獄宮ディストピア、登場（前書き）

地底人と改造人間について。つづき。第24回

24：獄宮デイスピア、登場

地底からの刺客、たとえば部隊長クラスの者は、みな共通して、珍妙な外見を備えたパワードスーツを身に着けていた。

これは、地底人の弱点である太陽光線を遮るために必要なもののだという。

「へんな きぐるみ」

そして、それらのパワードスーツは、すべて異なるデザインが施されていた。

これらのパワードスーツを着用しているものを、人類は侮蔑と嘲笑の意をこめて「卑劣変態兵」と呼称した。

これまでの例を羅列していけば、まるで猫人間と呼んでも差し支えない外貌の「卑劣変態兵・ニヤンデモジラ」。なぜか新幹線の先頭車両を象った大きなヘルメットをかぶっている「卑劣変態兵バーニング・ヘルトレイン700系」。農業における案山子そのものな「卑劣変態兵・スケアクロウ吾助」。なぜか高層ビル模型のようなヘルメットを頭にかぶっている「卑劣変態兵・ギロツポンヒル―ゼフォン」などなど。

彼らがパワードスーツを着用する理由までは理解できる範疇だが、それらに施されている珍妙なデザインだけは、いまだ未解明の謎とされている。

一説によれば、あえて、われわれ地表人類に馴染みのあるものを異形化することで、深層意識下の恐怖イメージを喚起する効果を狙っているのではないかと言われている。

たしかに、醜くデフォルメされた猫や新幹線の着ぐるみは、その標的である年端もいかなない幼稚園児たちには有効かもしれない。

「あと、夏といえば花火大会よね。花火だったら、透明人間のあたしでも楽しめるし、うってつけよね。ひゅるるる、どっかーん、たーまやー。どーん、ぱらぱらぱら、かーぎやー……あれ、また、

目から水があふれ出てきたような気がしてきたよ」

「さつきから　ひとりごとがおおいね」

よく聞いていなかったが、スケ助はいったい何を喋っていたのだろうか。

「うっん。なんでもない。ぱもみん、気にしないで。ぐすん」

スケ助は涙声でそういつて、二度三度、鼻をすすするような音をたてた。

「ちつとも　きにかけてなんかいないよ」

午後三時をすぎても、いっこうに蝉の鳴き声はやまなかった。

「みーん　みんみー」

いくらなんでも、鳴きすぎではないだろうか。

朝から晩まで、休まず鳴きっぱなし。

羽化した蝉の平均寿命が数週間というのも、納得がいく。

要するに、自業自得なのだ。

そんな生物に、同情などするべきではない。

「……コン、コン」

誰かが、校長室のドアをノックしていた。

「はい　あいてるよー」

この校長室は、わたしが不在時には、厳重なセキュリティのもと機械警備されている。

しかし、わたしが在室中の時に限り、入口のドアに鍵をかけていなかった。

「失礼します」

落ち着いた女性の声だった。

「ぱもみのへやに　ようこそ」

しばらくのあいだ、スケ助には黙っててもらわなければならぬ。

来客の際、たいていスケ助は、校長室の隅でじっとしているよう

だった。

「はじめまして、校長先生。二年一組の獄宮ディストピアと申します」

校長室へと足を踏み入れたのは、長身の女子生徒だった。

ゆうに、一八〇センチは超えている。

わたしが一三〇センチだから、その差はとても大きい。

「うわー せがたかいね」

その女子生徒が名乗った「獄宮」という音の響きには、もちろん覚えがあった。

死んだエモーシヨンの顔は、直に死体をみた際と、生徒調査票に貼ってあった証明写真で確認済みだ。

双子では無かったはずだが、死んだエモ子と、いま目の前にいる獄宮ディストピアは、よく似ていた。

「えもこちゃんの おねーさんだね」

わたしは、わたしの遙か上にある獄宮ディストピアの顔を見上げて言った。

「え、えもこちゃん？」

怪訝な顔をして、獄宮ディストピアはわたしを見下ろす。

「えもーしょん りやくしてえもこ」

「あ、ああ、エモ子。そうです。エモーシヨンは、私の妹です……ついさっき、殺されたばかりですが」

殺された。

強い口調で、ディストピアはそう断言してみせた。

感情を取り繕う様子もなく、険しい目つきで、身長の高いわたしのことを見おろしている。

「ころされたかどうかは あとのおたのしみ」

微妙に言葉を間違えた。

「お楽しみにって……いったい人の命をなんだと思つて……！」
「やっぱり怒られた。」

「ごめんね いいまちがえたの」

いちおう、謝っておこう。

人間、誰にだってミスはある。

「でもね まだきまってないよ」

司法解剖の結果は、あくまでも病死である可能性が極めて高いというものだっただけだ。

すでに、本省の担当部署を通じて、ディストピアには伝えられているはずだった。

「いいえ。殺されたんです……妹は、エモーションは殺されたに決まっています！」

顔を紅潮させて、獄宮ディストピアは足を踏み鳴らした。

「……」

すると、その瞬間、とんでもなく激しい揺れが、校長室を襲った。
「あれ じしんかな？」

わたしは、裸足の両足にわずかに力を込めて、バランスを保とうとする。

どうやら、地震ではないようだ。

揺れは、たった数秒足らずだった。

「……………」

いつの間にか、獄宮ディストピアが、校長室の壁際に飛び退いていた。

「あれれ おおきなあな」

さっきまで、獄宮ディストピアが立っていた場所……わたしの執務机の正面には、直径二メートルほどの穴が開いていた。

「……………」

壁際に立ち尽くしているディストピアの表情をみれば、あまり悪びれた様子はなかった。

それよりも、新たにできた大穴を見下ろしている冷たい目つきが、わたしは気になった。

「おい だれかいたのかなー？」

この校長室の床が崩落したということは、下の階の天井が崩れ落

ちたということだ。

もしも真下に誰かいたのなら、まず間違いなく不幸なことになっている。

「しんじやったなら　へんじをしてね」

そう言ってから、無意味な呼び掛けだったと気づいた。

「ご心配なく……この下の階は、化学実験室です。放課後には使われない場所ですから、誰もいませんよ」

まるで用意していたようなセリフを、デイス子こと獄宮デイストピアが言った。

「みてきたようなこと　いうんだね？」

「ついさつき足をはこんだ時には、誰もいませんでしたから」

天井が崩れてしまってもいいように、あらかじめ下見をしておいた、ということなのだろう。

デイス子が、わざと、ここ校長室の床を踏み抜いたのは、もはや確信すべき事実のようだった。

「校長先生は、驚かないんですね。やっぱり、私のことなんか、すべてお見通しなんですか？」

「そんなことより　あやまるのがさきだよ」

わたしは、幼女特有のあどけない笑顔を浮かべて言う。

「いやです」

自分があけた大穴を避けるように、獄宮デイストピアは、校長室の壁に背中をつけて立っている。

「えもこのことは　ざんねなんだったね」

「残念で済んだら、警察はいりません！……それよりも、妹を殺した犯人を知っているのなら、私に教える！」

デイストピアがいきなり声を荒げて、今度は、自分が背中を合わせている後ろの壁にむかつて、裏拳を打ちこんだ。

「……………」

とても人間の拳による打撃音とは思えない、ドスンッ、という大仰な音が、室内に短く響いた。

デイストピアは、かなり取り乱していた。

「やめてよ わたしのへやをこわすの」

たったいま破壊された壁の瓦礫の向こう側には、青空を映しているいくつかの窓が見えた。

「クソ校長！ さつさと教える！ 妹を殺したのは、誰なんだ！」

ふたたび声を荒げて、また近くの壁を素手で破壊する。

わたしは、もうそろそろ怒ってもいい頃合だろうと思った。

「ちょうしにのるなよ かいぞいうにんげん」

わたしは、片手でスクール水着の肩紐を整えながら、冷ややかな声を発する。

「ふん……それが本性ですか、ぱもみ校長先生？」

はげしく顔を歪めながら、デイス子は、わたしに向かって含み笑いをしてみせる。

わたしには、それはとても醜くみえた。

百年以上も生きた老婆の死に際よりも、はるかに醜い顔つきだった。

「ばけものが にんげんきどり？」

ありったけの侮蔑をこめて、わたしはデイストピアを嘲笑ってみせる。

人間気取りはやめろ、このバケモノが。

「……いまの言葉、訂正しろおおお！」

バケモノはそう怒鳴って、わたしのことを険しい目つきで睨みつけてきた。

唇の端が耳たぶのあたりまで裂けているかと錯覚するほどに、デイス子は、大きな口を開けて怒鳴った。

「ばけものが なにをえらそうに」

バケモノ、改造人間、獄宮デイストピア。

死亡した獄宮エモーションと同様に、その実姉であるデイストピアもまた、同じ改造人間だった。

「殺す！」

その忌まわしい言葉を発したのと、同時だった。

「……………」

わたしには見えなかった。

デイストピアの超人的な跳躍は、幼女の動体視力で追うには、あまりにも速すぎたからだ。

地底人に対抗するため、生化学的および機械的に改造を施された人間……改造人間。

通常の一万倍の運動能力を備え、第一種テラトン級指定殺戮兵器に指定されているバケモノ。

「殺す！ 殺す！ 殺す！」

目には見えなかったが、激しい憎しみのみが込められた単調な声が、耳元で聞こえた。

「あれ れれれ？」

次の瞬間、わたしは宙に浮かんでいた。

べつに、背中に羽がはえたわけではない

「なぶり殺しだ！」

執務机を眼下に見おろし、わたしは校長室の天井へと叩きつけられた。

ところで、この地球には引力というものがある。

「悶え苦しめ！」

高さ四メートルほどの地点から落下するわたしの腕を掴みあげて、デイストピアは喚く。

二人とも、宙をさまよっている

「……………」

わたしは何も言わず、デイストピアにされるがままになっていた。そして、息つく暇も与えられずに、今度は、校長室内の壁に向かって投げつけられる。

「死体になっても、許さない！」

いま投げ飛ばされているわたしは、その行き先である壁をじっと見つめていた。

大きな額縁に写真がおさめられていて、初代校長が気難しそうな顔をしていた。

「……………」
圧倒的かつ非人道的な腕力をまえにして、わたしはどうすることもできなかった。

「……………」
だが、わたしの身体は何ともない。
ちゃんと手足は、胴体につながっている。
それぞれの骨格も、折れたりはいしていない。
痛くも痒くもない。

たとえるなら、四十分の試合のあいだ、飛んだり跳ねたりして酷使されているバスケットボールの気分とでも言おうか。

「あははは！ もう、死んじゃった？」
投げ飛ばされ壁に叩きつけられたあと、床に横たわり、まばたきもせず目を見開いたまま黙り込んでいたのだから、誰だってわたしが絶命したと思うだろう。

「やりたいことは たったこれだけ？」
床に横臥したまま、わたしは、幼女の鋭い目つきで、獄宮デイストピアを睨みつける。

「しぶとい幼女ね！」
わたしに有無を言わず、デイストピアは、英和辞書くらいのコンクリートの破片を、こちらへ向けて投げつけてきた。

スピードガンで計測すれば、時速二百キロ以上はでていることが判明するだろう。

つまり改造人間とは、そのようなことを可能にする連中なのだ。
「……………」

ガゴツ、という鈍い音が、わたしの頭蓋の中で響く。
衝撃のあまり、起き上がりかけていたわたしは、その場で激しく
卒倒した。

「やった！ 死んだ！」

ボーリングでストライクプレイを決めた時のような歓喜の声だった。

「しんでないよ うぬぼれないでね」

わたしは、平気な顔で、ふたたび起きあがってみせる。

スクール水着の生地が、ところどころ破れたり汚れたりしていた。

「あ」

獄宮デイストピアは、目をむいたまま、短い驚きの声を発する。

普通の人間の一万倍の運動能力をもつ改造人間が、わたしのことを驚愕の態度でもって見つめていたのだ。

「信じ……られない」

絞るような声でそう言うってから、デイス子は絶句した。

25：世界に固定された幼女（前書き）

校長室で、改造人間・獄宮デイストピアが襲ってきた。ばもみタンは、このまま殺されてしまうのか？ 第25回

25：世界に固定された少女

「どうしたの　なにがしんじられないの？」

わたしは、だいぶ破れかけているスクール水着を気にしながら、おしりの辺りの違和感を整えてみせた。

たとえ緊急事態のさなかであっても、少女の嗜みを忘れてはならない。

それが、ばもみクオリティなのだ。

「なんで……なぜ死まない？　どうして、顔や身体に傷ひとつについてないんだ！」

半狂乱の顔というものを、わたしは初めて目にしたのかもしれない。

外国映画でも見たことがあったが、やっぱりあれは演技なのだ。

今わたしの目の前にある表情こそが、モノホンの半狂乱。

「死ね！　はやく死ね！　いいから死ね！」

突然、キイキイ金切り声で「シネ！　シネ！」と喚きはじめた獄宮デイストピアは、身近にあった大小のコンクリート破片を、わたしに向かって、次々と投げつけはじめた。

「むだむだ　なんのいみもないのに」

さすがは訓練された改造人間だけあって、投げつけたコンクリート破片は、ひとつ残らず、わたしの全身のあちこちに命中した。

まさに、百発百中。

硬く鋭いコンクリート破片が、わたしの顔面、喉元、心臓部、腹部みぞおち、ニヤンニヤン、足の脛などに着弾するたびに、わたしは、されるがままになって全身を痙攣させていた。

「死ね！　死ね！　六回くらい死ね！」

校長室の床に倒れているわたしに向かって、なおもデイストピアがコンクリート破片を投げつける。

「むだむだ　だむだむ」

さすがの改造人間も、オバケは恐ろしいようだった。

「しんじやったのは、ざんねんだけど……これからは、ずっと、おねえちゃんのそばにいるからね。わたしたち……しぬまで、いっしょだよ」

「いやあああああああ！ オバケと一生いっしょなんて、いやあああああ！」

わたしの鼓膜がこそばやくなるほどの金切り声をあげて、獄宮デイストピアは、改造人間特有の驚異的な瞬発力によって、逃げるように校長室を飛び出していった。

その際、また壁に大きな穴がひとつ増えた。

「いもうとにあえて よかったね」

わたしの皮肉など聞く余裕もなく、デイストピアは「うひゃあああ」という叫び声をあげながら、ひたすら逃げるように校長室から遠ざかっていく。

「ちよつと さむいね」

わたしは手に持っていた、エアコンのリモコンを操作する。

さきほど下げたばかりの温度を三 ほどあげる。

「……すいませんでした。おねーちゃんが、ごめいわくをおかけしました」

「もういいよ おしばいするの」

わたしは、どこを見るときもなく声をかける。

校長室内は、コンクリートの破片が散らかり放題で、無惨な状況だった。

「……そっか。えへへ。どうだったかしら、あたしの演技は？」

「だいじょうゆうも まっさお」

迫真の演技とまで言うで大袈裟になるが、とっさの判断にしては上出来だと思う。

とりあえず事態を収めることができたのだから、どれだけ褒めてもバチは当たらない。

「それにしても、あの獄宮デイストピアってのは、本当にバケモノ

ね」

スケ助は、心の底から感心した様子で言った。

「かいぞうにんげん だもの」

わたしは、ちぎれてしまったスクール水着の肩ヒモ部分を手で押さえつけながら、部屋の間にあるクローゼットへ歩みよっていく。

「あたし、生まれて初めて見たわよ。暴れる改造人間ていうの」

「よかったね めでたしめでたし」

クローゼットを開けると、まず、むせるような樟脳の匂いが鼻につく。

扉の中には、予備のスクール水着が納められていた。

「ぱもみ おーだーめいど」

ハンガーにかけてしまうと手が届かないので、折りたたんだ状態で、常時五着ほど用意してあるのだ。

「でも、あんなバケモノのくせして、オバケが怖いって、いったいどういうことなのよ。おつかしいの」

それについては、わたしも意外に思っていたところだ。

獄宮ディストピアは、過去のとある事件を境にして戦隊員から退役していたものの、依然として、強靱な肉体をもつ改造人間であることに変わりはなかった。

「きゃあ おばけーだつてさ」

怖いものなしかと思われたディストピアが「オバケ」などというきわめて非科学的なものを、情けない叫び声をあげてまで恐れるというのは、にわかには信じられない光景だった。

「でも、非科学的っていったら、ぱもみん……あんたも、幽霊と同じくらい非科学的だと思うんだけど」

ボロボロになったスクール水着を脱いでいるわたしに、スケ助が話の矛先を向けてきた。

「ぱもみは ふつうだよ」

そんなことよりも、わたしの着替えを見ないでもらいたいものだ。ボロボロと化したスクール水着を脱ぎ捨てたわたしは今、ハダカだ

った。

すっぱんぼん。

ニャンニャンが、丸見えだった。

「よく言うわよ、ぱもみん。あんた、デイス子にあれだけ痛めつけられてたはずなのに、カスリ傷ひとつ負ってないじゃん。なんなの、そのツルツルとしたタマゴ肌は？ たしかコンクリートの塊がいっぱい当たってたはずでしょ？ なんでケガひとつしてないわけ？」

スケ助の言うとおり、スクール水着はボロボロになっていたが、わたしはカスリ傷ひとつ追っていないし、もちろん流血もしていなかった。

「ぱもみは こていされているの」

スケ助には、話しておこうか。

「こてい？ 固まるに定まるっていう字の固定？」

「うん そのこてい」

わたしの特別な事情は、あまり他人に話し聞かせてもよいものではない。

だが、目の前にいるスケ助の性格からして「教えません」では納得しないだろう。

こんな事でヘソを曲げられては、あとが怖いような気がした。

「なんなの、その固定って？」

「にねんまえ ぱもみはこていされたの」

それはすなわち、世界が激変した日だ。

あの日から、わたしの成長は止まった。

わたしという個体を構成する全細胞が、活動することも死滅することも止めたのだ。

人体細胞の完全停止。

「よくわかんないんだけど……それって不老不死ってこと？」

「くわしくは わかんないの」

スーパ―東京大学を卒業したあと、わたしは、防衛省に入った。当時、七才になったばかりだった。

世界激変の日は、それから数カ月後の出来事だ。

「固定って言われてもよくわからないんだけど……具体的には、いったいどういう楽しいことがあるわけ？」

楽しいこと、つまり利点は何かと、スケ助は言いたいのだろう。

「といれ いかなくてもいいよ」

これが利点かどうかはわからないが、事実だった。

わたしには、排泄の必要が無い。

つまり、食べる必要もない。

細胞が活動も死滅もしないわたしにとって、栄養を摂取することは不必要なことなのだ。

「一生トイレトペーパー使わなくて済むから、地球に優しいわね」
固定された当初、うっかりパンと牛乳を食べてしまったことがあった。

だが、消化されるはずもなく、数日後には、胃の中で腐っていた。

「あと ねむくならない」

「それって結構お得じゃないの？ 人生の三分の一は睡眠に費やすっていうからね」

何のフォローにもなっていないが、スケ助は、わたしに気を遣ってくれているらしい。

「おふろ ふよう」

わたしは、汗をかかない。

肉体が代謝を必要としないからだ。

「お風呂入らなくていいんなら、水道代とガス代の節約になるから、いっぱい貯金できるわね」

本人からしてみれば、わたしを励ましているつもりなのかもしれない。

「たぶん しなない」

死というものを積極的に試したことはないが、おそらく、わたしは死なないだろう。

さすがに核爆発などを試みたことはなかったが、任務先で、宇宙

からやってきた大怪獣に踏み潰されたことぐらいはある。

「ふうん。よく無事だったわね。だけど、大怪獣に踏まれたんなら、さすがに腕の一本ぐらいは折れたんじゃないの？」

そう言うところを見ると、やはりスケ助は、まだわたしの「固定」の意味を、よく理解していないようだ。

「ぜんぜん いたくもかゆくもなかったよ」

大怪獣に踏み潰された私は、そのまま地面にめりこんただけで済んだ。

あの時の心境を何かに例えるならば、粘土に押しつけられたパチンコ玉の気分、とでも言っておこうか。

よくわからない例えだ。

「ふーん。要するに、うにゅーめりめりい、って感じ？」

「そうそう うにゅーめりめりいってかんじ」

面倒くさいので、わたしは、同意しておくことにした。

「そっかー。ぱもみんも、いろいろ大変なんだね」

スケ助が、なんともいい加減な感じで、いったん会話を終わらせる。

たぶん、わたしが話したことなど、ほとんど理解できなかったのだろう。

こちらにしてみれば、その方が都合がよかった。

「ぱもみ まけないよ」

とりあえず、幼女らしいことを適当に呟いて、わたしは、スクール水着のあちこちを引っ張ってみせる。

新しいものに着替えたばかりのときは、なかなか肌に馴染まず、しっくり来ないのだ。

「いちから やりなおし」

さつき破れてしまったスクール水着は、たしか、一ヶ月ほど前から着ていたものはずで、最近ようやく、身体の動きに馴染んできたと思っていたところだった。

「きたなく ないよ」

一ヶ月間、同じものを着続ける。

いうまでもなく、わたしは固定された存在なので、汗をかかないから汚れたりしない。

「ほんとに きたくないよ」
不潔じゃない。

清潔なのだ。

ぜんぜん臭くならない。

わたしは幼女なので、むしろ、いい匂いがする。

「ばもみ うそついてないよ」
本当だ。

ウソではない。

26：ばもみ、推理をめぐらす（前書き）

眠らなくても平気なばもみタンは、徹夜で真魔ラファエロこと橋本ひろしの過去について調査した。第26回

26：ばもみ、推理をめぐらす

四章

窓の外が、だいぶ明るくなってきたので、わたしは校長室の蛍光灯をオフにした。

うす暗がりのなかで、ノートパソコンのディスプレイ画面が、ほの白い光を放つ。

「うーん だいたいわかった」

昨日は、宿舎に帰らず、学校に残っているいろいろと調べものをしていた。

自称・真魔ラファエロ。

橋本ひろしの過去について、防衛省の機密ファイルをひたすら渉猟していたのだ。

「きょうも まなつびより」

ジイーという、セミの試験運転が時折聞こえてくるなかで、わたしは、目の前にあったノートパソコンを閉じた。

もうそろそろ、生徒たちが登校してくる時間帯だ。

いまは、朝の七時を過ぎたばかり。

「ちよつと おさんぽ」

固定されているわたしにとって、眠る必要がないのだから、徹夜疲れなどありはしない。

校長室を出て、辺りを散歩しようと思ったのは、なにげない気分転換のためだった。

「だれもいない がっこう」

校長室を出て、廊下を歩いていけば、教室にさしかかる。教室の引き戸は開いていて、廊下側の窓も開いていた。

三〇ほどの机と椅子、教卓、黒板。

誰もいない教室。

清々しい静寂と孤独が、わたしの精神の疲れを癒す。

「からだは つかれないけど」

心は、疲れきっていた。

徹夜明けの朝ともなれば、思わず自殺したくなるくらい、わたしの心は疲弊する。

わたしに備わった「固定」の恩恵にあずかれるのは、わたしの肉体だけ。

その肉体に宿る魂、精神、こころにかかる負担は、日々、蓄積され続けている。

眠る、ということが出来ないわたしにとって、気が触れてしまうくらいに「こころ」は困憊している。

この救いがたい精神の鬱積は、固定されているわたしにとって、決して癒すことのできない宿業なのだ。

「きのうのできごと こわかった」

獄宮デイストピアに投げつけられ、壁に叩きつけられ、硬いコンクリート破片をぶつけられた。

昨日のあの出来事は、わたしの心に大きなダメージを与えていた。もちろん、肉体には傷ひとつない。

痛みも無かったし、現に肉体的な痛みは無い。

でも、心はボロボロだった。

「たとえば ごすんくぎ」

いくら痛みを感じないとはいえ、例えば、自分の手の甲に太い五寸釘を打ち付けられたとしたら。

全身麻酔をかけられた上で、自分の顔や腕や腹や足に、百本も二百本も五寸釘を打ちつけられる行為を、間近で見なければならないとすれば。

そのあと、うなりをあげるチェーンソーを用いて、親指から始まり、手の指を十本、続けて足の指を十本、それから右腕の手首、肘、肩というふうに、四本の手足のあらゆる関節を、順に切断していく

様子を間近で眺めなければならぬとしたら。

いくら肉体的な痛みがないからといっても、このような仕打ちを目の前にして、はたして平静でいられると言い切れるだろうか。

「いたい　こころがいたい」

コンクリート破片が、わたしの眼球にぶち当てられた時の視覚映像を思い出してしまい、身体の芯から身震いをする。

ヒトの死は、ヒトの心が耐えられない痛みから、ヒトを守るための防衛機能なのだと思う。

死という最終防衛機能があるからこそ、ヒトは正常な心を保ちながら生きていけるのではないだろうか。

常軌を逸してしまったヒト、それはもはやヒトと呼んではならないものだ。

「わたしは　しをうばわれた」

肉体が健常であっても、不死身の内に鬱積している宿業により、わたしはいつ気が触れてしまっても何ら不思議ではなかった。

「ぱもみ　まけないよ」

幼女の心に鞭うつて、空元気を出して、わたしは一人つぶやいた。

「きょうも　おしごと」

わたしは、防衛省陸上自衛隊所属、ぱもみ二等陸尉。

そして、いまはここカドミウム学園の校長の任についている。

「びょうしか　たさつか」

昨日の放課後から今朝までのあいだ、わたしは、獄宮エモーション死亡事件について、推理と仮説検証を繰り返していた。

司法解剖の結果は、急性心不全による死亡。

ただし、心臓に微量ながら気泡が検出され、空気塞栓を引き起こした可能性も考えられなかった。

何らかの方法により、静脈に一定量の気泡が混入させれば、人は死ぬ。

「えもこは つよい」

司法解剖の結果は、他殺の可能性を疑えるものなのだが、被害者である獄宮エモーションが殺害されるということもまた、不自然だった。

「かいぞうにんげん だもの」

獄宮エモーションは、戦隊員なのだ。

対地底人殲滅戦闘隊員であるエモ子は、改造人間であり、通常の人間の一万倍もの運動能力を持っている。

そんなエモ子を殺害できる存在など、そうザラにいるはずがなかった。

考えられるとすれば、本来の敵である地底人が、それと同等の戦闘能力をもつ仲間の戦隊員たちか。

「かのうせいは ひくい」

前者であるならば、手の込んだ周りくどい殺害方法を選ぶ必要はない。

地底人との戦闘は、その全てが肉弾戦であり、力と力のぶつかりあいであった。

その二者が戦闘を行ったあとの場所というのは、まず間違いなく乱れているものだ。

昨日、エモ子の死体が見つかった一階西館の男子トイレには破損している部位はなく、整然としていた。

また、エモ子自身が着ていた学園指定の制服にも、まったくいつていいほど乱れはなかった。

「じゃあ なかまのしわざ？」

戦隊員であるエモ子を殺害できるとすれば、おなじ改造人間である戦隊員が考えられるのだが、この線を追求するのは、あまり現実的ではない。

「ありばい ついきゅう」

エモ子が所属する戦隊は、本人を含めた五人一組で構成されていた。

他の四人の戦隊員も、ここカドミウム学園の生徒なのだが、死体が発見された先日昼ごろのアリバイを調べさせたところ、他の一般生徒の証言により、四人とも疑いようもないほどにアリバイが成立していた。

「わたしは さつじんだとおもう」

強靱な肉体を備えている改造人間を、殺害できる者。

しかも、腕力に頼った乱暴なものではなく、相手の着衣を乱すことのないスマートな方法で殺害できる者。

この学園で人が死んだ場合、まず真つ先に疑わなければならない奴が、一人いるではないか。

「しんま らふぁえろう」

一年三組、橋本ひろし。

元・魔王討伐師団所属の一等陸佐。

「むかしは えいゆうだった」

二年前におこった世界激変の際、富士樹海周辺に魔王が出現した。はじめに、活動を停止していた富士山を噴火させ、その余波として、日本中の活火山ひいては休火山にも影響を及ぼしていった。

「まおうを たおすため」

日本中の青少年少女のなかから、特に魔力の強いものを選抜し、最終的に四人のメンバーを司令官に据えた、一万人規模の魔王討伐師団が編成された。

「さんには しんだ」

何ヶ月間にもわたる死闘の末、討伐師団は、魔王の力を大幅に削ぐことに成功した。

しかし、それには多くの犠牲を伴った。

師団を構成していた一万人規模の自衛隊員のうち九十五パーセントの者が戦死した。

そして、何よりも、特に魔力の強い司令官級の四人のうち三人が、戦闘中もしくは戦闘後に死亡していた。

「ゆいいつの いきのこり」

真魔ラファエロこと橋本ひろしは、あの魔王討伐作戦で活躍した四人の司令官のうち、たった一人だけ生き残った魔力者だった。

「はしもとひろしが はんにん？」

獄宮エモーションを殺したのは、橋本ひろしなのか。

彼ならば、強靱な肉体の持つ改造人間を、着衣を乱すことなく、一瞬で殺害することができるだろう。

魔王に対峙することのできるほどの強大な魔力の持ち主であれば、改造人間の一人や二人を殺めることなど、たやすいはずだった。

それが可能であることは、ここ数ヶ月間に行ってきた、橋本ひろしの殺人即蘇生行為によって、証明されている。

彼は、他人を即死させることのできる魔力を用いることができる存在なのだ。

「だけど ありえない」

橋本ひろしが、エモ子殺しの犯人であることも、また可能性の低い推測だった。

「なぜ いきかえらせなかった？」

橋本ひろしは、自らの罪が確定しまうことを、とても恐れているはずだ。

だからこそ、彼は殺したあと、相手を必ず蘇生させる。

橋本ひろしの殺人は、相手の命を軽んずる行為を楽しむためのものであった。

今朝の屋上突き落とし事件を含めた過去の五件の出来事からも、決して、他人の命を絶つことが目的ではないのは明らかだった。

必ず、蘇生させている。

「それでも あいつはあやしい」

多少の疑問はあれども、この学園で殺人事件が起こった場合、もっとも疑うべきなのが、真魔ラファエロこと橋本ひろしであることは、揺るぎのない事実だった。

27：リリニャンからやって来た2匹（前書き）

事件から一夜があけて、ぱもみタンは悩んでいる様子。 第27回

27：リリニャンからやって来た2匹

「いちばんの ようぎしゃ」

現に、わたしは、今回の事件の犯人は、橋本ひろしであると、疑いを強めている。

なぜなら、死亡した獄宮エモーションと橋本ひろしには、ある共通点があるからだ。

「ふたりは おなじくらす」

一年三組の、出席番号八番と二十二番。

実は、二人はクラスメイトだった。

他に確証がなくとも、この事実だけで、わたしは、橋本ひろしを疑うに足るに十分だと思っている。

「それに くわえて」

獄宮エモーションの死体が発見されたのが、男子トイレだったということも、また、この事件を複雑にしている要因だった。

「みつつの よういん」

強大な魔力の持ち主である、橋本ひろし。

強靱な肉体の持ち主である、獄宮エモーション。

そして、死体が発見されたのは男子トイレだという事実。

この三つの要因が、いったいどのような真相によって結び付けられるのか。

一晩考えたくらいでは、明確な答えを導きだせなかった。

「すがすがしい くうき」

一階に降りてきたわたしは、玄関を出て、校舎の外へ歩いていく。用務員の手により、とつくに玄関のカギは開けられており、登校してくる生徒たちを迎え入れる準備が、すでになされていた。

「あー ねこだー」

生徒たちの姿がまだ見えない午前七時すぎ。

正面玄関そばに、珍客が訪れていた。

「かわいい　ところがなごむよ」

それは、二匹の猫たちだった。

大きい猫と、それよりも小さい猫の二匹連れ。

チリンチリンと、小気味良い鈴の音を鳴らしながら、わたしのいる正面玄関に向かって、トントコトンと猫の歩みを進めていた。

「ねこちゃん　おはよー」

わたしは、幼女の小さな右手を挙げて、猫たちへ挨拶の言葉をかけた。

「……おはようございます。ごきげんよう、校長先生」

二匹は立ち止まり、白猫の方が朝の挨拶を返してきた。

「ごきげんよー、こーちよーせんせー」

つつけて、幼い言葉づかいで挨拶したのは、小さな猫のほうだった。

首輪には、小さな鈴がついてる。

そして、淡いピンク色の体毛が、小さな身体を覆っていた。

「はじめまして　だよね？」

わたしは、そう言いながら、白猫たちに向かって歩き出す。

「はい。でも、わたくし達、校長先生のことは、よく存知あげておりますわ」

「おりますわー」

幼いピンク色の仔猫が、そばにいる大きな白猫のマネをして見せていた。

いずれにせよ、こうして顔をあわせて言葉を交わすのは、初めてのはずだ。

「ぱもみだよ　なかよくしてね」

わたしは幼女の笑顔を浮かべながら、猫たちの目線に合わせてしやがみこむ。

「わたくしは、一年二組の闇米ナタリと申します。そして、隣にお

りますのは、わたしの妹、胡蝶ぴよりと申します。以後、お見知りおきください」

スラスラと気後れすることなく、ナタリと名乗ったその白猫は、わたしに自己紹介を試みせた。

「ぴよりのことも、よろしくおみまいもうしあげます」

続けてそう言ったピンク色の仔猫は、微妙に言葉づかいを間違えている。

「なんで みょうじちがうの？」

わたしは、単純な疑問を口にする。

闇米ナタリ。

胡蝶ぴより。

さきほど、姉妹と名乗った割には、二匹の苗字が違っていた。

「はい。血のつながりはありませんが、わたしとぴよりは、姉妹の契りを交わしております」

ナタリが、ぴよりの首輪に付いている鈴を眺めながら、そう言った。

丸大豆ほどの小さな鈴で、ツヤのある銀色の光をわずかに放っている。

「この鈴が、わたしたちが姉妹であることの証なのです」

「あかしなのですー」

また、仔猫のぴよりがマネを試みせた。

だいぶ、わたしと喋り方が似ている。

仲良くなれそうな気がした。

「よくわかんないけど わかったよー」

ナタリとぴよりは、人語を解する牝猫だった。

当然、この二匹がカドミウム学園の生徒であることを、わたしは知っていた。

「ねこなのに がくせい」

あえて知らないフリをしたのは、彼女たちに警戒心を抱かせないためだった。

「それでは……わたしたちは、これで失礼させていただきます」

「いただきますー。ごちそうさまー。おそまつさまでしたー」

ピンク色の仔猫がわけのわからないセリフを言い残しつつ、二匹は正面玄関へと向かっていった。

他の生徒の姿はまだ見えず、二匹の交わしている会話が、聞かずともわたしの耳に入ってくる。

「……なたりさまー。おなかすいたー」

仔猫が、甘えた声を出す。

「もう、ぴより。何度言ったらわかるのかしら……わたくしのことは、お姉さまと呼んでくれないとダメでしょう？ わたくしたちは姉妹の契りを交わしたのだから、そう呼んでくれないと、周りにけじめがつきません」

ナタリは立ち止まると、ピンク色の仔猫を見据えて言った。

「そんなこといったって、なたりさまー」

ぴよりは、困ったように身をすくませる。

「ほら、また……ぴよりが、ちゃんとわたくしのことを『お姉さま』と呼んでくれるまで、わたくしは返事をしないことに決めましたからね。たった今、そう決めたんだから！」

そう一気にまくしたてると、白猫のナタリは、プイツとそっぽを向いて、早足で歩きます。

「あつ、まって。お、おね、おねーさま！」

ピンク色の仔猫が、あわててそう呼んでみせた。

「……はい。やっとそう呼んでくれたわね、ぴより」

さきほどまで不機嫌そうだった白猫が、満面の笑みを浮かべながら振り返るのが見えた。

「へんな ねこたち」

わたしは、牝猫たちの茶番の一部始終を、そばですつと眺めていた。

何やら芝居めいていたのは、気のせいかもしれない。

「しょうたいふめい しんしゅつきぼつ」

二匹の牝猫たちは、ある日、突然このカドミウム学園に現れたのだ。

いまから数ヶ月前……カドミウム学園入学式の前日の出来事だった。

とても偶然とは思えないタイミングだ。

「がっこう どこだっけ？」

確か、彼女たちは「私立リリニャン女学院」からの転校生だと名乗ったはずだ。

しかし、防衛省が調べたところ、そのような名前の学校法人は存在しなかった。

二匹の牝猫たちに対して、身分を偽ったうえでカドミウム学園に潜入しようした疑いがかかる。

「なぞのせいぶつ だいよんのせいりよく？」

なにせ、世は世界激変の後だったので、この二匹の牝猫の存在を、防衛省は強く警戒した。

現在、宇宙人・地底人・魔王という厄介な敵と対峙しているなか、それ以外の第四の勢力の手先ではないかという憶測がなされたのは、当然の成り行きだった。

「とりあえず かんしすることには」

カドミウム学園に転入するにあたり、防衛省のある機関によって、牝猫たちは、脳波検査・X線検査などのあらゆる解析を受けた。

その結果、人語を解するという特徴以外は、地球上に生息する一般的なネコ科動物と何ら変わりがないことが判明し、とりあえず様子見という判断が下されて、現在に至る。

闇米ナタリ。

胡蝶びより。

そう自ら名乗る二匹の牝猫たちを監視するのも、数多いわたしの任務のうちのひとつだった。

ただし、今のところ、変わった動きは見せていない。

「そうじゃないと こまるよ」

今のわたしは、獄宮エモーションの事件解決で精一杯なのだから。

28：少女は煙になって（前書き）

ナタリとびより、作者のお気に入りキャラです。ぱもみタンの呼びかけによって全校集会が行われる。もちろん企みがあったのことだ。第28回。

28：少女は煙になって

ブルーとホワイトを基調とする夏服の制服を着た生徒たちが、つぎつぎと体育館に足を踏み入れる。

「わかつて いいよね」

わたしは、彼らよりもひとつ高い、体育館のステージの上にいた。一三。センチしかないわたしは、当然、パイプ椅子で身長をこまかす。

ステージの上に設けられた講壇からは、五〇〇名あまりの生徒たちの顔を一望することができた。

「ばもみ校長、あそこに……」

そばにいた男性教師が、わたしの耳元でそつとささやいた。

なまあたたかい息が、わたしの耳をくすぐる。

「こそばゆいよ なーに？」

あえて男性教師は指をさして示さなかったので、わたしはその視線の先を追う。

「おかしいですね。いつもは出席しないのに……」

真剣な眼差しでそうつぶやく男性教師の視線の先には、ある男子生徒の姿があった。

「ほんとだ はしもとひろし」

他の生徒たちと同じようには整列せず、体育館の壁に背を預けて、腕組みをして立っていた。

橋本ひろしは、じっと目を閉じて、孤独に耐えているようにも見えたと。

「どういう風の吹き回しでしょうか……彼が全校集会に出席するなんて」

「ふーん めずらしいんだね」

ステージ上の講壇から、わたしはざつと橋本ひろしの事を見据える。

わたしの中でまだ固まっていなかった疑念が、ふたたび渦を巻きはじめる。

「アー、アー……それでは、これより緊急の全校集会を始めます。一同、きょーつけ！」

教頭が、マイク越しに号令をかける。

ざわついていた体育館内が、急に静かになった。

「ねえねえ きょーつけってなに？」

わたしは、そばに立っている男性教師に、話しかける。

「しーっ！ お願いですから、すこし真面目にされていて下さいませんと困ります」

戸惑った表情で、そう釘を刺されてしまった。

この男性教師は、わたしと同じ防衛省出向組で、こういう公式の場におけるアシスタントのような役割を務めてくれている。

わたしは、所詮、防衛畑の人間であるため、学校運営実務には疎い。

そんなわたしの事を補佐するための人物なので、いちおう言うことを聞くことにした。

「えー、本日はお日柄もよく……あれ？ しまった、これじゃなかった」

ツー、ピーというマイクのハウリング音が鳴ると同時に、ステージの下にいる教頭が慌てふためいていた。

どうやら、手元のスピーチ用カンニングペーパーを、結婚式のもの間違えたらしかった。

「あはは あの一とまぬけだね」

「あ、だめです！ 声が大きいですよ校長、聞こえてしまいますよ！」

そばにいた男性教師が慌てふためいて、小声でわたしに注意する。ステージの下を眺めると、まだ落ち着きを取り戻していない教頭が、血走った眼で、わたしのことを恨めしそうに睨んでいた。

「しまった きこえちゃったみたい」

幼女のいたずらっぽい表情を浮かべながら、わたしは、そばにいた男性教師に微笑んでみせる。

「……オホン、失礼。えー、本日、このような緊急の全校集会をひらきましたのは、あー、昨日の昼ごろ、この学園内におきまして、まことに残念な、エー、とても遺憾な出来事が起こってしまったからであります、エー、オホン、皆さんには悲しいお知らせになりますが、エヘン、アー、この学園の女子生徒が、ウー、アハン、その若く尊い命を失ってしまうという出来事が、エー、起こってしまいました」

最後の最後で、教頭は、スピーチを言い損ねてしまった。

俗に言う、セリフを囃む、というやつだ。

「あははー へんなことばづかい」

思わず吹き出してしまったわたしにつられて、生徒のなかからも、控えめな笑い声が起こった。

「だめですよ笑っては、ぷぷぷ、いけません、ばもみ校長ぷぷ、くつくくく……」

わたしを諷める立場にある男性教師でさえ、笑いをかみ殺すのが大変そうだった。

「あーっ、うるさいうるさい。一同、静粛に！ とにかく、昨日の昼、この学園の女子生徒が死んじやったから、今日はみんな黙禱を捧げましよう、まあ、この緊急の全校集会は、そういう目的なわけです！」

自らの羞恥心をごまかすかのように、教頭は、言わなければならなかった連絡事項を、だいぶ乱暴で拙い言葉を用いることで済ませようとしていた。

「あー、ちなみに付け加えますと、死んじやった女子生徒は、不幸なことに急性心不全だったそうです。心臓やられちゃったら人間おしまいだね。よいこのみんな、健康には気をつけましようね！」

はい、じゃあ一分間の黙禱をしまーす。いっせーのーで、はい黙禱！

「きょうとう やけっぱち」

本来、このような報告は、もう少し厳かな雰囲気のもとで行われるべきだと思う。

何はともあれ、広い体育館を静寂が支配し、五〇〇名あまりの生徒たちが、死んだ獄宮エモーションの冥福を祈る。

「……あ、あと言い忘れましたが、亡くなった女子生徒のご家族の意向で、お通夜やお葬式などは行わず、つい昨夜、限られた身内のみの密葬が行われたそうです。で、彼女は、つい二時間ほどまえに茶毘に付されたという連絡を受けています。いまごろ、天国で楽しくやっていることでしょうね」

「つまり もやしたってことだよ」

教頭の言葉のあとに続けて、わたしは念を押すようにして言ってみせた。

手元にあつた据え置きของのマイクを通して言つたので、ハウリング気味のわたしの声が、体育館中に響き渡つた。

「ほねになるまで もやすの」

獄宮エモーションの死体は、もうこの世にはない。

そういう意味のことを、わたしは強い口調で公に発言してみせる必要があつた。

「だびにふす したいをもやす」

死体がなければ、生き返らせることもできない。

つまり、殺人という犯罪が確定する。

そのことを、たつた一人の生徒に聞かせるために、わたしは念を押すようにして「もやした」と言ってみせたのだ。

「それじゃあ かいさんしていいよー」

これで、とりあえず目的は達した。

わたしの号令のもと、体育館に集まっていた生徒たちが、整然とした歩みで、各々の教室へと帰っていく。

「どうしたの かえらないの」

わたしは、ステージのうえから、一人の生徒に大きな声で呼びか

ける。

その生徒は、行列には加わず、いまだ体育館の壁に背を預けて、わたしのことを、ずっと睨みつけていた。

「……………」

橋本ひろし。

自称・真魔ラファエロ。

魔王と対等に渡り合えるほどの、強大な魔力をもつ十五才の少年。

「どうしたの　はやくいけば？」

なぜ、彼は、わたしの事を睨みつける必要があるのか。

もはや、獄宮エモーションを殺したのは誰かという問いの答えを導きだすのに、迷いはなかった。

「……………」

わたしは、ステージの上で、橋本ひろしの鋭い視線を一步もひかずに受け止めてみせる。

「……………さあ、ぱもみ校長！　ぼーっとしてないで、我々も、通常業務につきませんと！」

そんな教頭の横槍をきっかけにして、わたしと橋本ひろしの睨み合いは、あっけなく終わる。

「……………」

結局、一言も声を発しないまま、橋本ひろしは、ゆっくりと体育館を立ち去ろうとする。

「もやしたからね　かんぜんに」

見るからに殺気を放っている背中に向かって、わたしは、そんな一言を投げつけたのだった。

29：透明人間の告白（前書き）

いよいよ物語も佳境に。 第29回

29：透明人間の告白

校長室で、わたしは、じつと黙って考え事をしていた。

「ばもみん、さっきから何を考えてるの？」

唐突に、スケ助が話しかけてきた。

透明人間だけに、ほとんど気配を感じる事ができないので、唐突に話しかけると、わたしの心臓は止まりそうなる。

「びつくりするから やめてね」

そうは言っても、スケ助にはどうすることもできないことは、わかっていた。

「ねえ。幼女のくせに、なに難しい顔をしてるの？」

「えへへ ちよつとね」

今朝おこなわれた全校集会から三時間以上ものあいだ、わたしは、あいかわらず獄宮エモーションの事件について、試行錯誤を繰り返していた。

「え、何？ ばもみん、あたしに隠し事なんて、水臭いなあ」

「みずは えんそのにおい」

いくらスケ助が人畜無害の透明人間だからといって、何でも知らせてよいはずはなかった。

何せ、この学園に通う一人の生徒が、史上最悪の殺人鬼へと豹変した可能性があるのだ。

スケ助の気配が絶無であるとはいえ、なにかあるといけない。

こう見えても、わたしは思いやりのある幼女だった。

「ばもみん、なんか隠してるでしょ？」

「ばもみのはんぶんは やさしさでできています」

エモ子殺しの場合、被害者がきわめて特殊な人間であっただけに、加害者を推測し、特定するのは容易かった。

殺人鬼の名は、橋本ひろし。

「そんな意味不明なことを言って、あたしを煙に巻こうとしたって

無駄よ。何を隠してるのか、言いなさい」

「いちどでいいからみてみたい。ぱもみがへそくりかくすとこ」
これまでは、殺しても必ず蘇生させていた。

しかし、獄宮エモーションに関しては、死亡させたあと、そのまま放置した。

それは、明らかな殺人行為だ。

「意味わかんないこと言ってるんで、言いなさいよ、この性悪幼女め！」

「うーん。しょうがないなあ」

ただし、殺人の証拠は皆無だった。

獄宮エモーションの死体が発見された男子トイレからは、橋本ひろしの存在を示す何らかの証拠を発見することができなかった。

現場の一階西館の男子トイレは、主に、同じ階に教室がある第二学年の生徒たちによって、よく利用されていた。

一概には言えないものの、三階に教室のある第一学年の橋本ひろしが、一階のトイレを利用する蓋然性は低いということも言えた。

殺された獄宮エモーション自身からも、橋本ひろしの犯行を示す明確な証拠を得ることはできなかった。

現在の科学では、魔力による物理干渉を完全に証明することが出来ないのだった。

「ぱもみ。じつはね」

「うん。ぱもみんは、いったい何を考えてたの？」

獄宮エモーションの死因は、急性の心不全。

だが、改造人間である彼女が、自然的に心臓停止を起こすことなど、ほとんどありえないことだった。

とすれば、何者かによって、心臓停止を誘発された可能性が高い。
「ぶたをやいたのが。やきぶたでしょ？」

「え、ええ。そうね」

はじめに考えられる方法としては、空の注射器を獄宮エモーションの静脈に打ち込み、空気塞栓を発生させる方法。

一定量の気泡が心臓に到達すれば、ヒトはじきに死亡する。

ただし、注射針を打ち込むためには、獄宮エモーションを静止させる必要がある。

これは、通常の人間は不可能なことだ。

普通人の一万倍もの運動能力を持つエモ子を、押さえつけられる人間など、ほとんどいない。

他の四人の戦隊員のアリバイに関しては、さきほど検討したとおりなので、身内犯行説は考えられない。

ライバルの地底人犯行説も、エモ子に着衣の乱れがないことから、これも却下。

「とりをやいたのが やきとりでしょ？」

「食べ物の話、ばっかりね」

その二者が無理でも、魔力者である橋本ひろしなら、注射器による犯行は可能だった。

まず、獄宮エモーションを押さえつける方法だが、これは催眠魔法を用いればよい。

昨夜、防衛研究所に問い合わせたところ、一個の生物を即座に眠らせる作用の魔力は存在するという回等が返ってきたからだ。

「じゃあ うしをやいたのはなんていう？」

「そんなの焼き牛に決まって……あれ、違うなあ」

「おかしいでしょ それがきになってるの」

そして、肝心の空気塞栓を起こさせる魔法の存在に関する回答はといえば「存在しない」というものだった。

いくら魔王と対等にやりあえるほどの魔力の持ち主といえども、そこまで都合の良いことはできないということらしい。

「なんで やきうしっていわないの？」

「うーん……ぱもみん、なかなか鋭いわねえ」

だが、橋本ひろしは、死者を蘇生させることが出来るほどの魔力者だ。

たとえば、眠らせたエモ子に、あらかじめ用意していた空の注射

器を用いて、静脈注射を行う。

その際、エモ子の腕の内側に残った「注射痕」を、跡形も無く「治療」することならば可能なのではないか。

防衛研究所からも、そんなわたしの推測を肯定する回答が返ってきていた。

だが、橋本ひろしが、そのような手間のかかる殺害方法を選ぶ必然性がなかった。

「さかなは やきざかなっていうし」

「本当ねえ……何で牛だけ仲間はずれなんだろう？ あ、あと焼き馬とも言わないし、焼き山羊、焼き羊つてのも、あんまり聞かないわね。その他にも、焼き猫、焼き犬、焼きピ・チ・ウ……ほんと、興味深い謎だわ。ぱもみん、でかした！ これは世紀の大発見よ！」
殺害方法のほかにも、もうひとつ不可解な事柄がある。

それは、死体が発見され、おそらく犯行現場であると推定される「男子トイレ」についてだ。

なぜ、獄宮エモーションは、男子トイレで殺されなければならなかったのか。

「それかんがえてたら よるもねむれなくって」

「ええ！？ いくらなんでも、それは大げさよ」

「ほんとだよ いっすいもしてないよ」

男子トイレで殺害されたという事実は、同時に、橋本ひろしの動機とも関係があるような気がした。

ただし、ここでいう動機とは、殺害の動機ではなく「殺害後、蘇生も消滅もさせずに放置していった理由」という意味の動機だ。

なぜ、橋本ひろしは、わざわざ自らの犯罪の証拠を残すという危険を冒してまで、エモ子の死体を放置していったのか。

わたしが昨日から頭を悩ませているのは、このただ一点、エモ子を放置していくに至った、橋本ひろしの動機についてなのだ。

「……嘘ね。ぱもみん、嘘ついてる」

スケ助の声が、とつぜん冷たいものへと変わった。

さきほどまでの朗らかさが消えていた。

「ぱもみ うそなんてついてないよ」

「それが嘘ね」

あいかわらず、スケ助がいる正確な位置はわからない。

ただ漠然と、声が聞こえている方向をむいて、わたしは答える。

「ちよつと おしっこ」

いつになく真剣な口調のスケ助に、ただならぬものを感じたので、とりあえずこの場から離れたかった。

足の短い幼女のわたしには高すぎる執務用チェアから、降りようとする。

「ぱもみん、固定されてるんだから、尿なんて出ないでしょ……やつぱり嘘ついてわね」

「なんとなく でそうなきがしたの」

わたしとしたことが、気が焦るあまり、凡ミスを犯してしまった。「ねえ、ぱもみん。当ててあげようか？ いま、ぱもみんが考えていることを」

いきなり尋問めいたものを仕掛けてきたスケ助の声は、冷ややかで、とても落ち着いていた。

確実に捉えて離さない、という、すこし獣じみた雰囲気、わたしは肌で感じる。

「ぱもみんは、死んだエモ子について、悩んでいる」

べつに驚きはしない。

見た目が七才くらいの少女であるとはいえ、わたしはこの学園の責任者だ。

学園内で起こった事件について頭を悩ませている事自体、なにも疚しいことはない。

「えもこ かわいそうだったね」

この事実は、肯定しても、なんら差し支えない。

「そして、ぱもみんは、改造人間のエモ子……獄宮エモーションを殺害した犯人は……橋本ひろしだと疑っている」

スケ助の指摘は、間違っていない。

だが、その指摘を、わたしが安易に認めるわけにはいかなかった。物的な証拠もなく、動機の解明さえ不十分な現状で、橋本ひろしへの嫌疑を公言するわけにはいかなかった。

「ぱもみ のーこめんと」

「……へえ、そう。違うの？ だったらいいんだけどね」

スケ助は、あっさりと引き下がってみせた。

だが、次の瞬間、拍子抜けしているわたしへ不意打ちをかけるかのように、耳元で囁く。

「あたし、いろいろ知ってんだけどなあ」

思わせぶりな言い草で……透明人間なので見えないが、おそらくスケ助は得意気でいやらしい微笑みを浮かべているに違いなかった。

「いろいろって なーに？」

「さあね……何だろうね」

一転、スケ助はとぼけてみせる。

どうやら攻守が逆転したようだ。

「いいから ぱもみにいつてみ」

「何それ？ もしかしてタダで教えるって言ってるわけじゃないよね？」

朗らかな性格だと思っていたスケ助からは、それが完全に消えていた。

姿は見えないものの、きつと狡猾な目つきで、わたしのことを見下ろしている、そんな声だった。

「おかねが ほしいの？」

エモ子の事件について知りたければ、金を払えと言っているのだろうか。

透明人間のくせに、いったい何を買うつもりなのか。

いま巷では、ゲームボーイDSという携帯ゲーム機が流行っているそうだが、まさか、スケ助はそれが欲しいのだろうか。

透明人間のくせに、生意気だ。

「お金なんて、いらないわ。あたしが欲しいのは、自分が一体誰なのかっていう情報よ……一刻も早く、あたしはそれを知りたいの！」
つまり、そういうことらしい。

すっかり忘れていたが、一昨日、はじめてスケ助に出会った時に、依頼されていたことだった。

「げんざい　ちようさちゅう」

透明人間の実在メカニズムなどに関しては、現在、防衛研究所が過去のマンガやアニメ、トンデモ本などを総当りして、調べている最中だった。

「早く！　出来るだけ早く、あたしは知りたいの！　もういや！　もう一人ぼっちはイヤ！　誰とも話せない毎日はイヤ！　誰もあたしの事に気がついてくれない時間を過ごすのもイヤ！　助けてよ、ばもみん！　あたしは一体だれなの！　なんで透明なの！　なんで何も触れないの！　なんで、あたしがこんな目に遭わなきゃいけないの！　なんで！　ねえ、なんで！」

悲痛な涙声で叫びながら、スケ助は泣き崩れていた。
見えないけれど。

「かわいそうな　すけすけ」

とりあえず、無難な慰めを言うておく。

「ばもみん、おねがい……おねがいだから、早くわたしの正体を突き止めて……一生のお願いだから」

声の調子から察するに、スケ助は泣いているようだった。

「わかったよ　ばもみをしんじて」

てつきり、スケ助のことを狡猾な奴だと思っていたが、そうではなかった。

彼女は単に、孤独に疲れていただけなのだ。

スケ助は、わたしがカドミウム学園に来るまで、話し相手すらいなかったのだから。

「約束だよ、ばもみん。指きりげんまん、嘘ついたら、放射性核廃棄物を飲ますからね、わかった？　約束だよ？」

鼻をすすりながら、スケ助は、元の朗らかな明るい声で言ってしまった。

「わかったよ やくそくするよ」

約束はするけど、そのあと忘れたらごめんね。

いくらわたしでも、放射性核廃棄物を飲まされるのはイヤだった。

「ぐすん……じゃあ、教えてあげる」

一呼吸おいて、孤独に疲れた透明人間が言った。

「えもこをころしたのは だれなの？」

わたしは、ズバリ訊いてみる。

「ごめん。それは知らない……わたしが知ってるのは、あいつ、橋本ひろしの隠れ家なの」

わたしにとって、意外な言葉が返ってきた。

「かくれがって ひみつきち？」

すこし、期待はずれだった。

わたしが知りたいのは、そんなことではない。

「あれ？ なに、そのがっかりした顔は……ちょっと、ぱもみん。

幼女のクセに、その表情、生意気よ」

わたしの場合、考えている事が、ときたま顔に出てしまうらしい。

ポーカーフェイスを保ち続けるのは、七才の幼女の顔面筋には酷なようだ。

「ごめんね はなしをつづけてね」

あまり興味は惹かれないが、いちおう耳には入れておくことにする。

「甘いわよ、ぱもみん。あんた、大した情報じゃないと思ってるでしょ？ ところがどっこい」

「したばら ぽっこり？」

わたしのくだらないボケを否定するかのように、そのとき、ちょうど正午の時刻を告げるサイレンが、窓越しに聞こえてきた。

「あ、もうすこしで昼休みね……ちょうど、いいわ。ぱもみん、あたしに付いて来てよ。□で話すよりも、実際その目で見た方が早い

し」

透明人間の後をどうやって付いていけばいいのか。

「ねえねえ どこにいくの？」

「決まってるでしょ。橋本ひろしのお昼専用隠れ家よ」

「おひる せんよう？」

つまり、昼食を食べるための場所、という意味だろうか。

「そうそう。あいつ、すつごく面白い場所で、お昼ごはん食べてるんだよ……これって、たぶん、あたしだけしか知らない情報だともうけど、あ、ちがうか。もう一人いたかもしれない」

話の流れについていけない自分がいる。

真魔ラファエロこと橋本ひろし。

たしかに、今のわたしにとって、無関心でいられる人物ではない。だが、彼の昼飯の内容など、わたしの興味の対象外だった。

ましてや、どこで食べていようが、知ったことではない。

「すけすけいいがには だれがしってるの？」

おそらく、今のわたしは、無関心な表情をしていることだろう。

わたしは、義務的な口調で訊いた。

「確信してるわけじゃないけど、たぶん、獄宮エモーションは知ってしまっただんじやないかなあ……あんなところで殺されてたんだから、たぶん間違いないと思う。エモ子は、橋本ひろしの秘密を知ってしまった。だから……」

透明人間は、その声をひそめて、つぶやいてみせた。

30：男子トイレ突入作戦（前書き）

すべての謎が明かされる一歩手前。第30回

30：男子トイレ突入作戦

五章

ここカドミウム学園は、中央の大体育館を中心にして、その周りに「東館」「西館」「南館」「北館」の四つの校舎が付属している。体育館と四つの校舎は、それぞれルーフ付きの渡り廊下によって繋がっていた。

よって、カドミウム学園を鳥瞰した場合、それはまるで、ゲーム機の十字キーのごとき光景になる。

「きーぷ あうと」

英語で立入禁止と印刷された黄色のテープ、ガードテープを、遠目からでも認めることができた。

「あんなことしなかったって、誰も足を踏み入れようとしないうね」
スケ助は、わたしの背中あたりで言うて見せた。
できるかぎり、声をひそめている。

「ひとが しんだところだからね」

どんな物好きであっても、さすがに人が死んだばかりの場所で用を足そうとはしないだろう。

わたしも、なるべく声をひそめて答える。

さらに付け加えるなら、死んだのは自分たちと同じ学園に通っていた女子生徒で、しかもつい昨日の出来事。

恐ろしくて、出るものも出ないだろう。

「しーっ、ぱもみん、小さな声でね」

「そうだね きづかれるね」

わたしとスケ助は、目的の場所から二〇メートルほど離れたところで、いったん足を止めた。

「ほんとに あんなところに？」

今わたしたちがいるのは、カドミウム学園の西館の一階だ。

四時限目が終了するチャイムが鳴ってから、十数分が経っていた。「いまぐらいが、ちょうどいい頃合よ。もう食べ始めてるんじゃない？」

透明人間なので見えないが、おそらくスケ助は、装着していない腕時計をのぞきこむボケをかましているに違いなかった。

「すけすけは　なんでわかったの？」

「偶然よ。たまたま……あ、エッチな事は考えちゃダメよ。ぱもみん、めっ！」

スケ助は、はしゃいでいた。

これから目の前で繰り広げられるであろう修羅場を想像しては、興奮しているのかもしれない。

「しもねたは　やめてね」

わたしは幼女なのだ。

エッチなのは、いけないと思う。

「何さ、カワイコぶっちゃって……淫乱幼女のくせして」

「あんた　あたまだいじょうぶ？」

さすがにムカついたので、わたしは思いきり顔を歪めて悪態をついてやった。

「あ、ちよつと仲間割れなんてしてる場合じゃないでしょ。さあ、ぱもみん、行くわよ！」

相変わらず声をひそめながら、スケ助がわたしの背中を押すようなことを言ってみせる。

「たぶん　そうぶようだね」

スケ助のことを一時的な躁状態に違いないと決めつけて、わたしは再び歩きはじめる。

目指すは前方の十数メートル先。

黄色のガードテープによって立入禁止区域とされている、一階西館の男子トイレだ。

「あそこに　はしもとひろしがいるの？」

「たぶんね」

スケ助は断言しなかったが、おそらく間違いないだろう。

紺色のスクール水着からのぞく腕には、いまだかつてないほどの鳥肌が立っていた。

「どうなる　ぱもみ」

男子トイレへ一歩近づくと、地を這うようにして、わたしのぺたぺたという足音が湧きあがる。

めずらしく、わたしは不安な気持ちに襲われていた。

「顔がこわばってるよ、ぱもみん」

「そうだね　いやなきもちだね」

わたしは、恐れていた。

目の前に近づいてくる男子トイレの存在が、わたしの心をおおきく揺さぶっていた。

あの中に、魔王と対等の魔力をもつとされている、真魔ラファエ郎こと橋本ひろしがいるかもしれないのだ。

「へえ。ぱもみんでも、緊張することってあるんだね」

「えへへ　おはずかしい」

何を、わたしは恐れているのか。

それは、恐れというよりも嫌悪に近い感情だった。

ぺたぺた、というわたしの裸足の足音が、いつもよりうるさく感じられる。

迫り来る試練の時間が近づくにつれ、神経が過敏になっているようだった。

「ぱもみん、リラックス、リラックス」

「もー　ひとごとだとおもって」

裸足で男子トイレに足を踏み入れなければいけない、わたしの身にもなっしてほしい。

「ぱもみん、いいかげん覚悟を決めなさい！」

トイレの床といえば、由緒正しき雑菌培養地帯だ。

世界中にその名を知らぬもののないくらい有名な、バイ菌のアミ

ユーズメントパーク。

「きたない ゆうえんち」

それこそ、黄色ブドウ球菌やら大腸菌、はてはエ・ズウィルスや炭・菌の温床であるとさえ言われる男子トイレの床を、わたしは直接、ハダシで踏まなければならないのだ。

神をも恐れぬ幼女を自認するわたしだが、なるべくなら、そんな地獄にも似たバイ菌培養地などには足を踏み入れたくはなかった。

「あーあ しかたないな」

これも仕事だ。

防衛省所属の二等陸尉としての役目を果たさなければならない。

「……………」

わたしたちは、再び、前へ進みはじめる。

「……………」

男子トイレまで、あと十メートルくらい。

わたしもスケ助も、唇をかたく閉じる。

まだ、トイレ内に人の気配がするかどうかを感じることはできない。

「……………」

あと五メートル。

周囲の窓は開け放たれているが、暑い日差しの中、セミたちが全力全開でメロディアスな鳴き声を垂れ流していた。

「……………」

廊下であるとはいえ、室内温度は、二五度以上あるだろう。

しかし、わたしは汗をかいていない。

全細胞が固定されているわたしにとって、緊張こそするものの、汗とは無縁だった。

心臓の高鳴りもない。

固定されているわたしの心臓は、いつさい拍動をおこなっていないのだ。

「……………」

男子トイレの入口に立てば、すぐさま人工的な芳香をかぐことができた。

まぎれもなく、ここはバイ菌培養地帯、通称・男子トイレだ。

「……………」

キープアウト。

立入り禁止。

黒文字が印刷された黄色いガードテープを、わたしは、ゆっくりと音をたてないようにして剥がす。

あえて声を発しないようにしているので、もはや、スケ助の居場所を知ることはいらない。

もしかして、すでにトイレ内へと足を踏み入れているかもしれない。なかった。

「………… あれえ？ 誰かが、う●こしてるよお？」

それは、スケ助の声だった。

男子トイレの入り口、手洗い場のあるところに立っていたわたしよりも、はるかに先の方で、スケ助がとんでもない事を大きな声で言ってみせていた。

「おい。誰なのおー、昼休みだっていうのに、う●こなんてしてる人はー？」

う●こを排出するのに時間帯は関係ないと思ったが、わたしには、どうすることもできない。

透明人間であるスケ助の悪のりを止めることの出来る者など、いまのところ、この世界のどこにもいはしない。

「いやよねー。だって今つてお昼休みでしょおー？ 食べたばっかりでしょおー？ らんないゝ らんないゝ 信じらんないゝ」
わたしは、なるべく足音をたてないようにして、男子トイレ内へと、さらに進んでいく。

スケ助の言うとおり、確かに、掃除用具スペースを除いた五つあ

る扉のうち、いちばん奥の一ヶ所だけが、きつちりと閉じられていた。

ほかの四箇所は、完全に開いていたり、半開きになっている。

「絶対いやよねー。食べてからすぐう●こする人なんかと、絶対に付き合いたくないわよねー？　そうよね、ぱもみん？」

と、唐突に、スケ助がわたしの名前を出しやがった。

「ぱもみ　う●こなんかしないよ」

もう仕方がないと思い、わたしは返事をする。

「えー、うつそー？　ぱもみん、なにカワイコちゃんぶってんのー。え、なに？　う●こしないって？　もしかして、清純派アイドルきどり？　あはは、そんなの今どき流行らないから、やめたほうがいいよー、あははははは！」

あはは、じゃない。

スケ助が、取り返しのつかないことをしでかしてしまった。

いや、ぱもみ、落ち着け。

落ち着け、ぱもみ。

まだ終わってしまったわけじゃない。

「あとで　ひどいめにあわすからね」

男子トイレの中の、たった一つだけ施錠された扉。

その向こうにいるのが、必ずしも、あの橋本ひろしであるとは限らないのだ。

「ねえ、ぱもみん。ちょっと、おかしいと思わない？」

ただいま暴走中の透明人間A子が、なおも、わたしの名前をわざと晒しながら話しかける。

「なにが　おかしいの？」

「だって、返事がないよ。ドアに鍵がかかっているのに、中でう●こしている人が、返事しないなんて、おかしくない？　ねえ、おかしくない？」

言っていることはごもつともな事だったが、すこしは空気を読んでほしい。

さきほどは冗談で言ったのだが、どうやら本当にスケ助は、精神の病気を発症したのかもしれないかった。

この空気の読めなさ加減は、異常だ。

「あーっ！　もしかして、中にいる人って死んでるんじゃないの？　う●こしながら死んでるんじゃないの！　大変！　ぱもみん、ちよつとノックして！　早く、ノックしてみて！」

「もあー　かんべんしてね」

スケ助のハイテンションギャグによって、気づけば、わたしに選択肢など残されてはいなかった。

31：明かされる秘め事

わたしは、いやいやながら、施錠されているドアに近づき、幼女の手をグーに固めた。

「こんにちは はいってますかー？」

ノックした後、十秒間ほど待ったものの、返答はない。

「屍だわ。返事がないってことは、中の人、ただの屍と化しているわね、あたしの勘では、そうに違いないわ！」

何を根拠にしているのか、わたしにはさっぱり理解できなかった。

「よし！ わかった！ 死んでるんなら仕方がないわね！ ぱもみん、いますぐ一一九番に電話してよ。その首からぶらさげてる携帯電話で、いますぐ救急と警察を呼ぶのよ！ さあ、早く！」

「ようすを みようよ」

スケ助は、笑い事のように死んでいると言ったが、当然、死んでいるはずなどない。

この施錠されたドアの向こうにいる誰かは、じっと口を閉ざしてわたしたちがこの場から去るのを待っているだけなのだ。

「あ、そうだ！ 救急車や警察を呼ぶにしても、まず、この鍵のかかったドアを何とかしなきゃ、中の死体を運びだすことはできないわね！」

どんどん話が大げさになっている。

いや、スケ助は、わざと大げさに騒いでみせているのだ。

わたしは、これまでのスケ助の行動に、何らかの意図があるのではないかと思いはじめる。

「すけすけ ちょっとおちついてね」

もしかすると、この透明人間は、なにか思惑があって、大騒ぎしているのかもしれない。

鍵のかかった扉の向こうにいるのが、真魔ラファエロこと橋本ひろしだと確信した上で。

「ぱもみん、いますぐこのドアをぶち破るのよ！ 中にいる屍を外に出さなきゃ！」

「ぱもみ ぶちやぶれないよ」

スクール水着を身にまとった七才の少女に、ドア破壊は無理だ。

「よし！ それじゃあ急いで人手を集めなきゃね！ 手始めに、生徒と教師をあわせて三〇人くらい用意しなきゃ！」

「……やめろ！ おまえら！」

その若い男の声は、トイレ内のあらゆる壁に反響して、わたしの耳に届いていた。

「……………」

悪ノリしていたスケ助の言葉をさえぎるようにして、その声は、個室トイレの中から聞こえたのだ。

「……………」

わたしは、スケ助が何か言うと思って黙っていたが、いつまで経っても喋りだす様子はなかった。

あの透明人間の狙いは、どうやらこういうことだったらしい。

「こんにちわ ぱもみだよ」

とりあえず、鍵のかかっているドアに向かって挨拶を試みる。

「こんなところで なにしてるの？」

我ながら愚問だと思う。

個室トイレですることなど、決まっているではないか。

「うるさい！ おまえらに関係ないだろう！ 早く出ていけ、ここは男子トイレだぞ！」

それは聞き覚えのある、とても横柄な口調だった。

他人のことを、はるか天空の城から見下すような、思いやりを欠いた乱暴な口調。

「う・こ してたの？」

なぜ、わたしがこんなことを言わなければならないのか。

実に忌々しいのだが、スケ助が用意周到に作りあげた、このおかしな場の雰囲気、わたしは素直に従うことにした。

「……そ、そうだよ！ う・こしてるんだよ！ だから、早くどっか行ってくれ！」

その特徴的な口調の主、真魔ラファエロこと橋本ひろしは、ずいぶん慌てている様子だった。

さすがの橋本ひろしも、排便中に不意をつかれれば、戸惑ったりもするようだ。

「ふーん あんまりくさくないね」

スケ助の余計な煽りがなくなっただけで、わたしは、冷静な思考を取り戻すことができた。

トイレの中は、臭くなかった。

「う、うるさい！ こ、今回でたやつは、くさくないやつなんだよ！ いいから、はやく、あっちいけよ！」

「ほんとに してるの？」

自分で言っていて、おかしいなと思いつつも、疑問を口せずにはいられなかった。

「う、うるさい。早く出てってくれ！」

わたしが今いる男子トイレは、さほど広いものではない。

小便器が七つに、個室便座が五つ。

入り口から見て、突き当たりにある窓は開いていたが、う・この匂いなどは、そう簡単に霧散するものではない。

「……………」

身じろぎもせずに、わたしは黙考する。

そして、耳を澄ませた。

「……………」

開いた窓を吹き抜ける、なまぬるい風の音。
遠くからは、セミの鳴き声も聞こえてくる。

背中では、センサーに反応した小便器が、自動的に水を流しはじめていた。

「……………」

じつと黙りこみながら、なおも耳を澄ましていると、かすかに新たな物音を聞き取ることができた。

それは、カサツという、わずかな擦過音。

聞こえてきた方向は、目の前にある、鍵がかけられたトイレ個室の中。

「あれれ　へんなおとがしたよ」

わたしは、ふたたび施錠された扉の向こうへ声を投げかける。

「しつこいぞ、おまえ！　はやく、どっか行けよ！　殺すぞ！」

さきほどの「カサツ」という物音は、あきらかに「う・こ」とは程遠いものだった。

「もしかして　なんかたべてるの？」

ようやく、わたしはスケ助の言っていた言葉の意味を理解した。
スケ助は言っていた。

橋本ひろしのお昼専用の隠れ家を知っている、と。

「な、なんで、こ、こ、こんなところで……………なにを食べ、食べるんだよ！」

橋本ひろしの口調が、さらに戸惑いを含んだものになった。

「もしかして　ここでおひるごはんたべてるの？」

わたしは、あえて断言してみせる。

この目で見ただけではないが、スケ助の目撃証言とあわせて、かなり確信のもてる推測だった。

「あ……………」

施錠されたドアの向こう側から、橋本ひろしの、まさに絶句した声が漏れる。

「べんじょで　おひるごはん」

う●こしているところを発見されるよりも、恥ずかしいのだろうか。

これまでの、橋本ひろしのひどく戸惑った声の様子から想像するならば、やはり恥ずかしいのだろうと思う。

ひとりで昼飯を、しかもトイレの中という信じがたい場所で食べている。

なぜ、橋本ひろしは、そんなことをしているのか。

「……………」

扉の向こう側に、沈黙が流れる。

「どうしたの　はしもとひろし？」

「………… おれを、その名前で呼ぶな………… おまえを、殺す！」

大きな怒鳴り声とともに、いきなり目の前のドアが吹き飛んだ。

つまり、すぐ側に立っていたわたしも、巻き添えをくって、後方へ吹き飛んだ。

「……………」

一瞬のうちに、わたしは背中を強打したのを、激しい衝撃によって感じる事ができた。

硬い陶器製の小便器が、わたしの背骨や延髄にめり込む感触があった。

これがもし一般的な少女であつたなら、間違いなく即死していただろう。

「……………」

例によつて痛みはない。

だが、普通の少女であればどうなっていたらうかと想像してしまい、わたしは嘔吐しそうな気分になる。

だが、精神がそう感じたとしても、実際には嘔吐すらさせてもらえないのだ。

延々と、悪寒がわたしの心の底に沈殿していく。

「おまえを、殺す！」

男子トイレの床に倒れているわたしを見下ろしながら、橋本ひろ

しが異国語に似た呪文を詠唱しはじめていた。

「クラーテル・クレーテ・ベルティエータ・アトヴィオールトカ・アクティーボ・エルプズインデ……………死ね！」

詠唱終了と同時に、橋本ひろしは、右手の人差し指をわたしに向かって突き出した。

その足元から、目がくらむほどの強い光があふれだす。

「……………」

しかし、何も起こらなかった。

「なっ……………」

「ぱもみ ごたいまんぞく」

わたしは、なるべく余裕たっぷり表情で、トイレの床から立ち上がる。

そして、ガッツポーズをとって見せた。

「くそっ…………クラーテル・クレーテ・ベルティエータ・アトヴィオールトカ・アクティーボ・エルプズインデ！」

焦りを隠せない表情で、橋本ひろしが、ふたたび同じ呪文の詠唱をおこなう。

「ぱもみ むびょうそくさい」

やはり、何もおこらなかった。

今度は、幼女の得意げな笑みを浮かべながら、さっきよりも大げさなガッツポーズをとって見せる。

何者であろうとも、固定されているわたしに「死」という影響を及ぼすことなどできないのだ。

32：最強伝説ばもみ

「ば、ばかな！ 即死するはずなのに……なぜだ！」

「そのまほうで えもーしょんもころしたんだね」
「すかさず、わたしは口撃を仕掛ける。」

「……な、なんの話だ」

もはや、橋本ひろしの「魔力者」としてのプライドは崩れつつある。

そこへ追い討ちをかけるような、改造人間・獄宮エモーション殺しの追及。

「そっか だからここでしんでいたんだね」

わたしは、独り言のように合点してみせた。

エモ子は、なぜ男子トイレで殺されなければならなかったのか。
いま、ようやく事件の全容を理解できた。

「……………」

口を閉ざしながら、橋本ひろしは、わたしから目を逸らしている。
逃げ道を塞ぐため、わたしはトイレの出入口を背にして立ちほかる。

「えもこに みられたんだよね？」

男子トイレの個室便座で昼飯を食べているという情けない有様を、
彼は獄宮エモーションに見られてしまったのだ。

魔王討伐を果たした、元・英雄。

その英雄だった男の、誰にも知られなかった秘密。

「べんじよで おひるごはん」

「だまれ！ 何も知らないくせに……知らないくせに、なんにも言うな！」

魔力による他者への攻撃は、橋本ひろしにとって、他人を拒絶する意思の表れだ。

その唯一の力が、わたしの特異性により無力化されたいま、橋本

ひろしという人間は、単なる十七歳の少年に成り下がる。

強大な魔力というフィルタがはずれてしまえば、橋本ひろしなど、同年代の者たちよりも遥かに精神が未発達な、ただの心の弱い十五才の少年にすぎなかった。

わたしの勝ちだ。

「えもこを　ころしたよね？」

じつと橋本ひろしを見据えて、わたしは訊ねる。

「……な、なんの事だ。知らない……おれは何も知らない」

幼女のわたしごときに、橋本ひろしは表情をひどく硬直させて、後ずさりしてみせる。

彼は、魔力の通用しないスク水姿の少女を恐れるとともに、自分の犯してしまった罪に対して、はじめて戦慄しているに違いなかった。

「こわいよね　いきかえないって」

今日の全校集会で、橋本ひろしは、たしかに耳にしたはずだ。自分が殺してしまった獄宮エモーションの遺体は、すでに茶毘に付されてしまった、ということ。

「し、知らない……おれは、何も知らない！」

語彙の貧弱なところなどは、やはり、ただの十五才の少年だ。さきほどから、橋本ひろしは、同じ言い訳の言葉を繰り返していた。

「ばつをつけて　つみをつぐなえ」

後ずさる橋本ひろしを追い詰めるようにして、わたしは一步前に踏み出す。

「あ……そ、そうだ。殺した証拠がないじゃないか！　そうだよ、証拠がなければ、おれのことを逮捕なんてできないぞ！」

そんなことは、わたしも承知していた。

今回のエモ殺しが、橋本ひろしの魔力によるものであったとしても、実は、それを証明する決め手となるような証拠がないのだ。

つまり、橋本ひろしを刑事犯として立件することは、最初から不

可能な話なのだ。

「ばかだね かんちがいしてるよ」

しかし、わたしが「罰」といったものは、決して、法的な懲役刑のことではない。

「べんじょめし みんなにいいふらすんだよ」

橋本ひろしが、便所に隠れて、一人さびしく昼ごはんを食べているという事実ことを、校内放送を使って学園中に言いふらしてやるのだ。

「あつ……………」

方法は簡単だ。

「いままでのおはなし これでろくおんしてたの」

わたしは、首からさげていた携帯電話を、橋本ひろしに示してみせる。

折りたたみ式のそれには、液晶小窓がついているが、そこに「録音8分23秒」という表示がされていた。

「う……………それだけでもぶっ壊してやる！」

悪あがきで、橋本ひろしは呪文の詠唱をはじめようとする。

「むだだよ とおくでろくおんしてるから」

この携帯電話には、マイクの役割をさせていただきにすぎない。録音データは、遠く離れた校長室の録音機器に送信される仕組みなのだ。

「えへへ ざんねんでしたー」

わたしは、幼女のいじわるな顔つきで、笑い声を漏らす。

目の前では、顔をどす黒いくらい真っ赤に染めた、ひとりの哀れな男子生徒が、目を潤ませていた。

「やめてくれ……………たのむから、みんなには言わないでくれ……………」

橋本ひろしは、頬をピクピククツと激しく引きつらせながら、とうとう涙を流しはじめた。

「ものをたのむ たいどじゃないよね」

人にものを頼む時には、それ相応の態度が要求される。

「あつ、ひいひいひいひい！……そ、そうでした。すいませ、いえ、申し訳ございせんでした、校長先生、あ、いえ、校長先生、いえ、元帥閣下、いえ、ばもみ大明神様！　お願いです、よろしくお願いですから、オレ……じゃなくって、ぼ、ぼ、ぼくの秘密を、みんなに、あ、この学園の皆様方には黙っていてもらえないでしょうか？　どうかお願いします。神様仏様ばもみ様。ぼくの一生のお願いですから、命をかけたお願いですから、死ぬまで好物のチョコレート食べるのを控えますから、どうぞ、どうか、なにとぞ、お聞き入れ下さいますよう、お願いいたしますでござる！」

最後の方に、変な言葉づかいが混じったものの、橋本ひろしは人格を豹変させてまで、わたしに懇願する。

「くちでなら　なんとでもいえるよね」

しかし、わたしは念には念を入れるタイプなので、ここは徹底的に橋本ひろしのことを屈服させておこうと思った。

「あひいっ！　そ、そうですね、ばもみ様のおっしゃる通りでございますです。あ、こ、これは、ぼくとしたことが、ぱ、ぱ、ぱもみ様よりも高い位置からお願い事をするなんて、な、な、何たる不覚！」

ひとり興奮した様子で、橋本ひろしは、迷うことなくトイレの床に土下座した。

「なにとぞ！　なにとぞ！」

たぶん、テレビの時代劇のシーンを、何の考えもなく模倣しているのだろう。

橋本ひろしの土下座する仕草は、どこか三文芝居じみていた。

「ふーん　なるほどね」

トイレの床に額をつけて謝っている橋本ひろしを見下ろしながら、ドアの壊れた個室トイレの中へ視線を向ける。

「はいけん　となりのひるごはん」

そこには、フタが下ろされた洋式便器があった。

「なにとぞ！　なにとぞ！」

閉じられた洋式便器のフタの上には、一枚の大きなハンカチーフが敷かれている。

そのハンカチの上には、いろいろな物が、置いてあった。

「きょうは ぱんだったのか」

例えば、ストローを差した五〇〇ミリリットルの牛乳パック。

さらに、半分ほど欠けているスティック型の菓子パンが、イチゴジャムのような赤いゼリー状の具をのぞかせている。

「けっこう くつろいでる？」

個室トイレには必ずあるＬ字型の荷物掛けには、小売店のロゴが印刷されている白いビニール袋が吊り下げられていて、中には、まだ何か食べ物が入っているようだった。

「ここって せかんどはうす？」

というのは冗談だとしても、橋本ひろしは、個室トイレをかなり使いこなしている様子だった。

「これにて いっけんらくちやく」

英雄だった少年の、悲しき午餐。

魔王討伐という大きな功を成し遂げたはずの橋本ひろしにしてみれば、このような悲惨な学校生活は、耐え難い屈辱であるに違いなかった。

「なにとぞ！ なにとぞ……」

その後、昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴るまでずっと、橋本ひろしは、トイレの床に土下座したまま謝罪の言葉を繰り返していた。

33：症候群という名の言い訳

六章

「今の子供たちは、孤立することを、極端に嫌いますからね」

目の前にいる白衣を着た大女が、知ったような口をきいた。

まあ、いちおう保健医だし、東大医学部卒なので、偉そうに医学用語を解説する資格くらいはある。

「だけど ベンじよでねー」

「あ、ぱもみ二尉。いちおう女の子なのですから、便所ではなく、お手洗いとおっしゃって下さい。でなければ、トイレ、もしくはWCとか」

ダブリューシーは、ちよつと違うと思う。

「あんなところで よくたべれるよね」

「まあ、橋本ひろしも、好きで便所飯をしていたわけじゃないと思いますけど……」

いま、わたし達がいるのは、一階の保健室だった。

わたしと、保健医の江賢原料子は、昨日の出来事について雑談を交わしているのだ。

「ねえ あれってびょうきなの？」

わたしは、素朴な疑問を口にする。

いくら、昼ごはんを食べる友人が教室にひとりもいないからといって、わざわざ便所に隠れて食べなくてもいいのにと思ったからだ。「そう考えられるのは……二尉が強い意思の持ち主だからですよ」

と、白衣姿の江賢原陸曹は言う。

たしかに、若くしてスーパー東京大学を卒業しているものの、わたしなど所詮は七才の幼女にすぎなかった。

そんな七才の幼女であるわたしよりも意思の弱い一五歳の少年な

どというものが、この世界に存在してもいいのだろうか。

と、こう考える私は、やはり強い人間なのかもしれない。

「だけど あいつまおうたおせるくらいつよいのに」

それにしても、魔王と対等にやりあえるほどの力を持つ橋本ひろしが、便所で昼飯を食べなければならぬほど、精神を追い詰められたのは如何なる理由によるものだろうか。

彼は、所属する一年三組のクラスメイトたちにイジメられていたとでもいうのか。

いや、そんなことは有り得ない。

先日、わたしが一年三組を訪れたとき、彼らクラスメイトたちは、橋本ひろしの事をひどく恐れていたではないか。

「ランチメイト症候群という言葉があります」

事務用のイスに腰掛けている江賢原二尉が、足を組みかえる。

「ふーん それってなーに？」

わたしも、とりあえず地べたに体育座りをして、話を聞く姿勢をとってみせた。

「ランチメイト症候群は、厳密に言えば病気ではありません。学校という場の性質上、朝から夕方までのあいだ、教室という閉鎖的な場所で過ごすことを強制されている学生が陥りやすい、一種の強迫観念症状なのです」

「もつと わかりやすく」

難しいことを難しい言葉で説明するなど、頭の悪い人間のやることだ。

「え、難しいですか……なんかイジワルされてるような気がしますけど、うーん、そうですねえ」

「ふぁいと ふぁいと」

そのとおり。

私は、江賢原二等陸曹に対して、意地悪をしていた。べつに、意味などない。

イジメとは、元来そついうものだ。

「うーん、つまりランチメイト症候群というのは、他人とコミュニケーションを取ることに不慣れた学生が陥るものでして、そのうだいぶ、わかりやすくなってきた。」

「例えばですね、四時限目が終われば、ランチタイムがやって来ます。うちの学園は、食堂がありませんから、たいていの生徒は、自分の教室のなかで、おのおのが持参してきたお昼ごはんを食べるわけです」

例え話で物事を説明しようとする奴にも、ロクな頭のやつはいない。

が、ここは、黙って話を聞いておくことにする。

「学生に限らず、人間というというのは、自然に群れる動物です。いわゆる仲良しグループですね。最小の単位は、二人一組。これは体育の時間などで、頻繁に要求されるパターンです。うちの学園は、クラスを偶数人数で構成するようにしているので、コミュニケーション能力など無くても、とりあえずは、二人一組のグループ構成員になれるわけです」

「びようけつとか、せいりやすみとかは？」

わたしは、江賢原二曹に訊いてみせる。

「そうです。グループを作りやすいように偶数人数でクラスを構成していたとしても、病気やアレの日による欠員が出てしまつたら……クラスの構成員が奇数人数になってしまえば、その途端、グループを作るという行為に、コミュニケーション能力が要求されるようになります」

「ふむふむ　へっぷし」

わたしは、くしゃみをした。

「お大事に。で、体育の時間ならば、教師が仲介することによって、グループ作りは比較的スムーズに行われます。しかし、それが昼食の時間のグループ作りとなりますと……」

「だれも　たすけてくれない」

そつえば、先日、橋本ひろしが所属する一年三組の教室に行つ

たことがあった。

ちょうど昼休みだったが、確かに、それぞれの二人く六人ほどのグループに分かれて、机を寄せ合いながら、昼食をとっていた。

たぶん、独りぼっちで弁当を広げている生徒など、いなかったはずだ。

「いつしよにお昼ごはんを食べよう、この一言を、橋本ひろしは口に来れなかったのでしょうね」

当然、クラスメイトが彼に対して話しかけることなど無いだろう。なにせ、橋本ひろしは、入学以来さんざん悪行を繰り返している。誰が好きこのんで彼に難癖をつけられに行こうとするだろうか。

「ひとりだけ いたけどね」

一昨日に殺された、改造人間の獄宮エモーションを除いては。

「やさしい おんなのこだったね」

それが、わたしの感想だ。

昨夜、獄宮エモーション本人と言葉を交わした印象そのままを述べる。

「ええ、そうですね。彼女がいてくれれば、橋本ひろしの未来もそう暗いものにはならないと思います」

江賢原女医が、しみじみと言ってみせる。

「ゆだんは きんもつ」

腐った性根は、そう簡単に矯正できるものではない。

とはいうものの、蘇った獄宮エモーションは、本当に素直で穏やかな少女だった。

殊勝なことに、エモ子は、同じクラスの橋本ひろしのことを、いつも気にかけていたというのだから恐れている。

「実は燃やしてない、って教えた時、大泣きしてましたよね、彼」
男子トイレでの修羅場のあと、わたしは、床に土下座していた橋本ひろしに対して、真実を告げてやった。

「えもこのしたいは ほかんしてあるよ」

全校集会で「茶毘に付した」と公表したのは、わたしの意図によ

る情報操作だった。

もはや蘇生不可能であると思わせて、真魔ラファエロこと橋本ひろしの不安を煽るためのものだった。

教頭には、わざと嘘の情報を教えて、全校生徒の前で報告させたというわけだ。

「蘇生した獄宮エモーションには、いまのところ精神的な疾病は見られません。実姉のディストピアにも聞き取り調査を行いました。エモ子は殺される前とまったく何も変わっていないそうです。さすがは、改造人間といったところでしょうか」

橋本ひろしの即死↓蘇生行為を受けた者には、ほぼ間違いなく、重度のPTSD症状が現れる。

過去の被害者たちが皆そうだったが、奇跡なのか、また当然のことなのか、今回よみがえった改造人間エモ子に関しては、まったく正常だということらしい。

通常人の一万倍を誇る運動能力は、やはり伊達ではないようだ。

「でいすとぴあは ていがくにしたよ」

そんなエモ子の実の姉である獄宮ディストピアを、わたしは十日間の停学処分にした。

いくら、わたしが聖母マリアのごとき優しい慈悲の心をもつ少女であっても、あの校長室での乱暴狼藉行為を、黙って見過ごすわけにはいかない。

ディス子には、自宅で謹慎をしながら、インターネット上の死体写真や事故現場写真などのグロ画像および、改正児童ポルノ法に抵触するようなロリ画像の警告・削除作業を延々と行うように命じた。「えへへ くるしむがいいよ」

そして、肝心の橋本ひろしの処分については……条件付きながら、身柄拘束や刑事訴追などの責任追及はおこなわないとされた。

「橋本ひろしの処分については、まあ妥当な判断といえるべきでしょうね。というか、本省も、あまり今回の事件を大げさにして、スキヤンダル化することを恐れている印象を受けますね」

わたしは、殺してしまえばいいと思っていた。

あんな奴に正当な法的手続きなど必要ない。

核ミサイル使用による死刑を実施すべきだ、と、わたしは上層部にわざわざ直訴までした。

「じょうだんじゃなくて　ほんきで」

もちろん、あいつを処刑するために核ミサイルを使うことは、現実的な方法ではない。

あの橋本ひろしを抹殺することのできる者など、この世にはいないのだ。

わたしがこの学園に赴任してくるまでの間にも、十数名の暗殺者が返り討ちにあい、橋本ひろしの手によって消滅させられていた。

もし、彼の命を絶つことのできる者がいるとすれば……かつて、魔王討伐師団で共に戦った三名の仲間たちしかいないだろう。

だが、それら肝心の者たちは、すでに死亡している。

三名とも、戦死や病死によるものであるという記録が、防衛省に残っていた。

橋本ひろしは、魔王討伐師団の四人の司令官のうちの唯一の生き残りだった。

「ランチメイト症候群による橋本ひろしの行動は、コミュニケーション能力の欠如がひきおこしたものと、私は考えています。戦場という非日常的な場所で、劣悪な青春期を過ごしてしまったことにより、彼は基本的な対人関係能力を育み損ねたのだと思います。学園内でひきおこした一連の無差別的な殺人即蘇生行為も、やはり、魔王討伐師団時代の異常な心理状況を、特に意識もしないで引きずってしまったのではないかと……」

江賢原二曹は、得意気に自らの見解を披露してみせる。

つまり、人殺しになってしまったのは、思春期に過ごした環境が悪かったからだ、と、江賢原はそう言いたいのだろう。

「……」

確かに、病気と環境は、密接な関係があるとされている。

風邪をひきやすくなるのは、ウィルスが蔓延しやすい空気の乾燥している時期だ。

水虫になりやすいのは、多人数でひとつの足拭きマットを使用している家庭だ。

同じように、残虐な人殺しになってしまったのは、育った劣悪な環境のせいだ、人を殺した人間が悪いのではなく、そんな環境が人を殺したのだと、江賢原二曹は主張している。

だから、橋本ひろしは悪くないというのか？

悪いのは、橋本ひろし以外の要因？

「じゃあ ひとつろしはわるくないというのか！」

わたしは、抑えきれないほどの激情にかられて、つい大声を出してしまった。

「い、いえ。私は、そこまで言っていないんですけど……」

とつぜん怒鳴り声を放ったわたしに驚いて、江賢原二曹が、あわててイスから立ち上がる。

「……うん すこしむきになった」

自分でも、めずらしく感情にまかせて憤慨してしまったと反省する。

「えじんばら ごめんね」

わたしは、気持ちを落ち着かせるために、乱れてもいないスクール水着の端々を、整えてみせる。

「悲劇や惨劇の犯人が、必ずしも人間であるとは限らない」

江賢原二曹が、古代の哲人の言葉をひいてみせる。

「そのとおりかも しれないね」

かつて、魔王との死闘を共に戦いぬいた仲間たち、唯一の理解者たちを次々と失ってしまった少年。

ひとり生き残った橋本ひろしには「英雄」という栄誉ある称号が与えられたが、所詮、彼は一五才の少年であり、また、かけがえの

ない戦友たちを失ってしまった孤独な人間にすぎなかった。

「学園内での無軌道な残虐行為や、今回の獄宮エモーション殺しの件は、決して許されるものではありません……ですが、私は、橋本ひろしに同情する部分が、少なからずあります」

わたしは、肯定も否定もせず、黙ってその場に佇んでいた。

「橋本ひろしは、青春の貴重な一年間を、われわれ大人の都合で犠牲にさせられたのですから……一方的な論理で、彼を責めることは、私にはできませんよ」

江賢原二曹の言っていることは、間違っていない。

世界激変後、出現した魔王を倒すため、半ば強制的に防衛省という軍事組織に加入させられた少年たち。

異形の者たちの流血と肉片が飛び交う戦場で、かけがえのない思春期を過ごさざるを得なかった彼らの哀れさや悲惨さから目をそむけることなど、けっして許されないことだ。

「でも あくにかわりない」

たとえ数ヶ月の間だけであろうとも、橋本ひろしが「悪」であったことに、変わりはない。

どんな理由があろうとも、他人に対していわれのない害悪を及ぼす存在は、秩序の名のもとに裁かれなくてはならない。

心を入れ替え改心したからといって、過去の悪行が煙のように消えるわけではなかった。

橋本ひろしの強大な魔力によってその生命を弄ばれた者たちは、精神に異常をきたしたままだ。

彼らは、いまだ人知れぬ隔離病棟で、わけもわからずに、もがき苦しんでいるのだ。

「ばもみ ぜったいにわすれないよ」

しかし、口だけならば何とでも言える。

わたしは、無力な七歳の幼女にすぎない。

「……」

やりきれない気持ちだが、わたしに、幼女の拳を固く握らせた。

最終回：カドミウム学園の闇

エピソード

ところで、わたしの盗撮写真が出回っていた。

ここカドミウム学園の男子生徒の間で、わたしの日常風景を隠し撮りしたものが、一枚五〇〇円という高値で、大量に取引されているというのだ。

「おとこのこは えろい」

盗撮写真の存在を知らせてくれたのは、透明人間のスケ助だった。「赴任三日目で、はやくもそんなものが出回るなんて、えっと、なに？ 学園のアイドル気取りなわけ？」

べつに、わたしが自分でばら撒いているわけでもあるまいし、責められるいわれはない。

「はんざいだよね とうさつって」

その写真が、いまわたしの手元にある。

わたしは、自分の息のかかった男子教師に命じて、数千円分の盗撮写真を、さつそく入手させたのだ。

「やつぱり すくみずはいいよね」

自分のスクール水着姿に見惚れながら、数千円分の盗撮写真およそ数十枚を、つぎつぎとチェックしていく。

五枚ほど、サービスでおまけしてくれたいらしい。

「ほんとに よくとれてる」

この盗撮写真が、いったいどのようなようにして学園内を流通しているかというところ……なんとも驚くべき場所で行引されていたのだ。

「生意気よ、幼女のくせに」

「えへへ おそれいます」

盗撮写真を調達してきたわたしの部下は、まず、子飼いの男子生

徒を使って、販売者を探させた。

「で、誰がこんな変態じみたものを売り歩いてたわけ？」

変態じみたものとは、失礼な。

盗撮写真自体は犯罪行為だと思うが、天使にも似た愛らしい少女の姿を眺めたいという彼ら思春期少年たちの気持ちを、わたしは必ずしも否定するものではなかった。

むしろ、家宝にしないさい。

「こうばいぶで どうとうとうつてた」

カドミウム学園の購買部。

正面玄関のそばにある二〇坪ほどのスペースで、午前七時四十五分から夕方六時まで営業している。

「え？ 何それ。冗談で言ってるの、ばもみん？」

購買部は、廊下から自由に足を踏みいれられるオープンスペースになっており、食品、雑貨、文房具、参考書、雑誌書籍などが、それぞれの棚に陳列されている場所だった。

通常の高等学校にあるような小さなものではなく、どちらかといえば民間のコンビニエンスストアや大学生協に近い、品揃えの充実したものだった。

「えろほんは おいてないよ」

わたしが放った調査員は、数人の生徒の証言を伝って、わりと簡単に、学園の購買部が盗撮写真の密売場所であることを突き止めたのだった。

「へえ。なんか拍子抜け。もっと壮大で複雑な流通経路かと期待してたのに……あれ？ ここって、いちおう国の機関でしょ？ いいの、そんな犯罪者たちを野放しにしておいて？ あれ？ もしかして、ばもみんって近々クビになるんじゃないの？」

そんな縁起でもないことを、なぜ嬉々とした口調で言うのか。

つくづく、スケ助は意地の悪いやつだ。

そついうところが、わたしと似ているから、あまり憎めなくて困る。

「いろいろ　じじょうがあるの」

盗撮写真の出所がわかっているのなら、すぐに摘発すれば良いのだが、話はそう簡単ではなかった。

「何なの、その事情って？」

「ひとで　ぶそく」

人材難。

人手不足。

売り手市場。

現在、購買部の業務を担当しているのは、三並央美という名前の、女性嘱託職員だった。

元・アニメ声優という異色の経歴をもつ彼女は、ここカドミウム学園創立のときから、他のパートタイマーと共に、購買部の業務を取り仕切ってきた。

この学園に限っていえば、あの学歴コンプレックスの教頭と同等のキャリアを持っていることになる。

「しらべでは　かのじょがしゅどう」

部下たちの報告によれば、購買部の責任者であるはずの三並央美が、密売を黙認しているというのだ。

「ふうん。何でだろう、小遣い稼ぎなのかなあ？」

スケ助は軽い気持ちで言ったのだろうが、あながち見当はずれだとは言いがたい憶測だった。

なぜなら、三並央美の月給が安いからだ。

一般的な小売業に従事する者が受け取っている金額よりも、おそらく二割ほど安かった。

「ばもみも　やすいよ」

わたしが毎月受け取っている俸給も安い。

「ふん。あたしなんて一文無しのうえに宿無しよ」

防衛省は、世界激変後に莫大な軍備予算を獲得することに成功したが、代わりに、世論からの突き上げも激しくなった。

巨大戦闘ロボットや対地底勢力殲滅戦闘部隊、魔力者師団などの

管理・維持に莫大な力ネがかかるため、せめて、防衛官僚および各種自衛隊員の俸給を可能なかぎり抑えようということにならざるを得なかった。

「ほんとに やすいんだよ」

まあ私の場合、食費や光熱費がかからないので、ずいぶん助かっている。

「ばもみん。話がそれてる」

スケ助の声に、わたしは我にかえる。

つい、安月給をグチってしまった。

「いなくなったら こまるの」

実をいうと、不正を行っている三並央美の行為を黙認せざるをえない理由があるのだ。

「なぜかって いうとね」

わざわざ死の危険を冒してまで、安月給のカドミウム学園購買部で働こうとする者がいないからだった。

「まあ、そうよね。校舎のすぐ隣には巨大ロボットの基地があるから、いつ宇宙怪獣が襲ってくるか安心できないし、キレイすい破壊主義的な改造人間はいるし、あと便所で食べるのが好きな男子生徒がいるし……うわー、わたしだったら、絶対こんなところで働かないわ。いっさいお断り」

スケ助が嫌悪感たつぷりの口調で並べたてた理由は、いずれも間違っていない。

「このへんに おみせないから」

カドミウム学園を中心とした、半径一〇キロ以内には、いっさい民間の建物がなかった。

これは、防衛機密上の理由によるものだが、つまりは、庶民のオアシスであるコンビニエンスストアすら皆無であるということだ。

つまり、いま購買部の責任者にいなくなれると、五〇〇人以上いる生徒および学校職員たちが、食事や学校用品の面で、少なからず不都合をこむることになってしまう。

腹が減っては戦はできぬ、というのが、カドミウム学園の校訓のひとつだった。

「だったら、ばもみんの防衛省から、誰か手伝いに来させればいいのに」

それは、できない。

現在定められている「行政機関の組織および運営に関する法律」の規定によって、行政機関職員には、定員三名以上の民間人を必ず登用しなければならない、と定められているので仕方がなかった。

「ごまかしたら おこられるし」

現在、三並央美と民間人パートタイマー二名が購買部に所属している。

このただでさえ法律規定ギリギリの余裕のないローテーションから三並央美が抜けてしまえば、ただちに法務省からイヤガラセの査察官が派遣されてくる事は、もう目に見えていた。

防衛省に限らず、どこの省庁にしてみても自分たちのホームに土足で上がられるのは耐えがたい屈辱なのだ。

「あーあ。官僚って、つくづく陰湿でネクラな連中よね。ほんと反吐がでる……あ。でもあたし透明人間だから、実際には反吐なんて出ないけど」

盗撮写真の密売という不正を行っている三並央美をクビにするのは簡単なのだが、その代わりの者を補充するためには、すこしばかり時間が必要だった。

なにせ、求人を行ったとしても反応がないのだから、わたしも決断しかねているのだ。

「ふーん。だから、すぐにはクビにできないってわけね。ばもみん、管理職としてけっこう苦労してるんだね。ごくろーさまー」

そんな心の全くこもっていない棒読み口調を聞き流しながら、わたしは、自分の盗撮写真を一枚ずつチェックしていく。

「こんなの ひとつつたんだらう？」

数十枚におさめられたカメラのアングルは、多岐にわたっていた。

小さな幼女が、身に着けているスクール水着のおしりのあたりの布地を整えている様子。

笑顔のとてもカワイイ幼女が、学園の女子生徒たちと、談笑している光景。

あらゆる人を虜にしまうほどの魅力を備えたまるで天使のような幼女が、運動グラウンドのそばに佇んで、ぼんやりと空を見上げている瞬間をとらえたもの。

「あれ こんなものまで」

誰もいない学園の正面玄関のそばで、スクール水着姿の幼女と二匹の猫たちが、何やら楽しそうに語りあっている情景。

「……」

大きな穴のそばに立っている大女が、ボロボロになったスクール水着姿の幼女に対して、怒りの表情を浮かべている瞬間を捉えたスナップ。

「……」

キープアウト、立入禁止と印刷されたガードテープの前にたたずむ幼女の様子をとらえたもの。

「……」

いくつかの小便器が並ぶタイル張りの場所で、額をつけて土下座する男子生徒を、冷やかな目つきで見下している、スクール水着姿の幼女のスナップ。

「だれが いつのまに」

そして、最後の一枚は、それまでの写真に比べれば、特にどうとことのない風景を写したものだっただ。

だがこの最後の一枚が、わたしにとって、もっとも空寒さを感じさせる写真だったのだ。

「これはたぶん あのときの」

意識を集中して、過去の記憶を遡る。

わたしが赴任してきた、翌日の朝。

たしか、慣れ慣れしくわたしのことを呼びつけた者がいたはずだ。

わたしは、彼のことを不愉快に思った。

不愉快に思いながらも、わたしの先を足早に去っていく背中しか見ようとせず、彼の顔をはっきりとは確認しなかった。

「これをとっているのは あいつだ」

その写真に写っているのは、L版の写真用紙いっばいに収まるほど間近で撮影された、スクール水着を着た幼女の「うしろ姿」だった。

写真に写るわたしは、まさに後ろへと迫っている「彼」の存在に気づく様子もなく、まっすぐ前を向いて歩いている。

「あの　せいとだ」

思い出した。

たしかにあの朝、突然うしろから「ぱもみタン、おはよー」と呼びかけられた記憶がある。

間違いない。

わたしは、確信する。

この盗撮写真の撮影者とわたしは、あの日、一瞬ではあるけれど、顔をあわせていたのだ。

「すべて　しられてる」

この際、盗撮という犯罪行為自体は、さほど重要なものではない。わたしが恐れるべきなのは、わたしに全く気づかれることなく、わたしの身の回りで起った機密事件を密かに撮影していた者がいたという事実だ。

特に、橋本ひろしがらみの写真は、防衛省にとって致命的なものになる恐れがあった。

世界激変後に勢力を広げた防衛省には、敵が多い。

これらの写真が、きわめて悪質な陰謀事件に利用されないとも限らない。

「ぱもみ　くびになるかも」

盗撮写真の回収作業は、現在、防衛省からの支援要員たちが秘密裏に行っていた。

そのスキームは単純なもので、一枚五〇〇円で売られていたものを、ダブリOKしかも一枚三千円という破格の条件で買い取るという情報を流すというものだ。

「おしごと やまづみ」

ここカドミウム学園に赴任してきて、まだ四日しか経っていないというのに、この慌しさは何なのだろうか。

「ねえ、ぱもみん。あんた、ほんとに独り言の多い幼女なのね」

どこにいるのかわからない透明人間のツツコミに頭を痛めながら、思わず、わたしの口からは、深い溜息が漏れる。

「ぱもみ やすげつきゆうなのに」

そう呟いたとき、わたしの落胆を代弁するかのように、スクール水着の肩ヒモが、すこし脱げかけたのだった。

おしまい

四〇〇字詰原稿用紙 三〇〇枚

最終回・カドミウム学園の闇（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8786b/>

絶対すくみず黙示録

2011年7月23日03時31分発行